

平成 30 年度

千葉県市町村職員海外派遣研修

事前研修会「講演会」講演録

公益財団法人 千葉県市町村振興協会

講演録目次

平成 30 年 5 月 10 日 (木)

「カナダの農業と農業施策」

立命館副総長・立命館大学副学長、食マネジメント学部教授 1
松原 豊彦 氏

「カナダの子育て支援」

NPO法人セカンドリーグ茨城理事長 横須賀 聡子氏 19

平成 30 年 5 月 16 日 (水)

「カナダの観光研究・ケベック州を中心に」

立教大学観光研究所研究員 羽生 敦子 氏 43

「カナダの社会と人々」

神田外語大学外国語学部教授 矢頭 典枝 氏 69



「カナダの農業と農業施策」

立命館副総長・立命館大学副学長、食マネジメント学部教授 松原 豊彦 氏

【講師略歴】

大阪市立大学経済学部卒業

京都大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学

経済学博士

宮城学院女子大学専任講師、助教授、立命館大学経済学部助教授を経て同教授、2018年4月
月から食マネジメント学部教授（現在に至る）

京都府農業会議専門員、草津未来研究所所長、守山市食のまちづくり協議会座長、北海道ア
グリビジネス・リーダー塾検討委員会委員長など

著 書

松原豊彦『カナダ農業とアグリビジネス』法律文化社、1996年3月

松原豊彦『WTOとカナダ農業—NAFTA（北米自由貿易協定）とグローバル化は何をもたらしたか—』、筑波書房、2004年1月

大塚茂・松原豊彦編『現代の食とアグリビジネス』有斐閣、2004年5月

松原豊彦・磯田宏・佐藤加寿子『新大陸型資本主義国の共生農業システム—アメリカとカナ
ダ—』、共生農業システム叢書第9巻、農林統計協会、2011年3月

カナダの農業と農業施策

立命館副総長・立命館大学副学長、食マネジメント学部教授

松原 豊彦 氏

カナダで海外研修をされるということですので、きょうは皆さんに、カナダの農業、それから農業施策について、この2つをテーマに話をさせていただきたいと思います。

行き先のバンクーバーは、日本に一番近いところの太平洋側です。それから、ずっとその東のほうへ行ってトロント。バンクーバーからトロントまで飛行機で4～5時間かかります。3時間の時差がある。同じ国の中ですごく時差があるという、これも日本のように時差のない国におりますと経験することはないのですが、本当にバンクーバーとトロントは、かなり世界が違うことも経験していただけないかと思います。

きょうは、目次としては、次の順番でお話をさせていただきたいと思います。

前半はカナダ農業についての基礎知識です。それから、後半はカナダの農業政策。最後に、ファーマーズ・マーケットに行かれるということですので、トロントは市民の食に対する政策を自治体が行っているという点で、北米で大変注目されるエリアになっております。そういう点では、皆さんがトロントに行かれるのは非常にいい機会だと思いますので、トロントの食政策評議会（Food Policy Council）が20年以上活動しています。そういうことについても最後に少し触れたいと思います。

この写真は、カナダのちょうど真ん中ぐらい、サスカチュワン州です。お手元にカナダの地図を追加で配らせていただきました。この地図のちょうど真ん中あたりにサスカチュワンという州があります。ここは小麦とナタネの一番大きな産地です。日本にもたくさん輸出しているのですが、こういう刈り取り風景です。このトラクターは幅が二十数メートルあります。高さが5メートル以上ある。私も農家にこのトラクターに搭乗体験をさせてもらいましたが、はしごで2階に上がるぐらいの高さの運転席ですね。こういう非常に大型機械で作業をしています。

これは、牛の放牧をしています。日本では外で牛を見ることは、北海道を除けば少ないのですが、カナダでは放牧が割と一般的で、冬になったら寒いので畜舎の中に入れますけれども、夏場は外で放牧している。

「はじめに」ということで、カナダの経済の中での農林水産業の位置づけは、いわゆる

GDPに占める比率は2%余りです。この数字は日本、アメリカ、カナダ、ヨーロッパは大体同じです。農林水産業が経済全体に占める位置づけはこの程度まで低下しています。製造業やサービス業が非常に大きいわけです。しかしながら、カナダの農林水産業は輸出産業であり、貿易黒字を非常に稼いでいます。カナダの輸出額全体でいうと17.3%を占めています。

日本との関係を見ていきたいと思います。カナダから日本が輸入している農林水産物はおよそ48億USドルに達している。アメリカ、中国、オーストラリアに次いで4位がカナダで、日本の輸入食料を支える役割をしています。

この表は、JETROの資料からとったもので、カナダと日本の農林水産物の貿易関係を示しています。なたね、豚肉、小麦、大豆までは農産物、下の2つは林産物です。なたねが金額的に一番多い。日本が輸入しているなたねのうち9割近くはカナダ産で、あとの1割は大体オーストラリアです。これは菜種油を搾るためのもので、スーパーに行きますと揚げ物とかに使う植物油としてキャノーラオイルを売っているあの原料です。なたねを搾ると重量の大体45%ぐらいは油がとれるので、それから搾るために日本の製油メーカーが輸入しています。日清や豊年などのメーカーがあります。

2番目は豚肉です。金額的には豚肉などの畜産物は結構大きい。単価が高い。日本の豚肉自給率は50%ぐらいで、半分は輸入しています。その豚肉輸入の1位はアメリカですが、2位がカナダ産豚肉です。この20年間ぐらいで急激に畜産が伸びています。

3位が小麦です。カナダ産の小麦はパン用の小麦として非常に評価が高い。パンを焼くのに非常にいい小麦がとれますが、全体の中では少し下がっています。これもアメリカが1位で2位がカナダ。

4番目は大豆です。これは省略します。

それから、きょうのテーマである農業とは違うのですけれども、第1次産業という点では林業、木材です。丸太ではカナダ側の雇用が余りふえないので、向こうで製材してプレカットしたものを日本に輸出する。これは大体が住宅の建築用材です。皆さん2×4（ツーバイフォー）を御存じだと思いますけれども、2×4の規格はカナダやアメリカの材木から始まって、日本でも随分大きく広がりましたけれども、ああいうものがたくさん輸入されています。

農産物ですけれども、ここでは3つに分けて考えたらいいのではないかと思っております。1番目は、さっき説明したように輸出競争力がある農産物です。貿易黒字を稼いでい

る農産物がここに載っている穀物、ナタネや大豆です。ナタネや大豆は油を搾る作物でオイルシード（油糧種子）といいます。あとは家畜・食肉です。食肉はさっきの豚肉・牛肉ですが、家畜とは何でしょうか。これは生きている家畜をアメリカに輸出しています。もともとカナダは畜産業でいうと繁殖地帯で、子牛を産ませて、ある程度大きくなったらアメリカに輸出する。それをアメリカで肥育して、最後は牛肉になります。そういう一種の分業ができ上がっているということで、生きた家畜も輸出品になるということです。

2番目は、国内中心に自給をしている、輸出も輸入も余りしていない農産物です。代表的なのは牛乳・乳製品、それから卵、鶏肉です。牛乳・乳製品は、日本では牛乳消費は少し減っていますが、最近ではヨーグルトの消費量が増えています。北米の人の食生活にとって牛乳とか乳製品は大変重要なものでありまして、人によっては、これは日本にとってのコメみたいなもので、非常に重要な食材であるということを行う人もおります。これをつくっている酪農経営も大変重要な役割を果たしております。

3つ目は、輸入が多い野菜、果実、それからワインが載っていますが、これもブドウの加工品ですから、加工品も含めて輸入しているものが結構多くあります。カナダは寒冷地ですので、野菜や果実はそんなにたくさんの種類はできません。向こうで生活して買い物に行くと、日本のスーパーと違って野菜の種類が多くない。寒冷地でできないものは結局輸入してくる。アメリカのカリフォルニア、あるいはメキシコ、中南米から輸入してくることになります。カナダ産で自給率が高い野菜は、ジャガイモとか芋類、タマネギです。果実もリンゴやブドウはできますが、バンクーバーの近郊、フレージャーバレーやトロントの近郊もこれらの果実の生産地帯ですが、寒さの関係で柑橘類はできないのです。柑橘類は余り北のほうに行くときれないので、輸入することになります。

そこで、大きく地域区分ということになりますと、ここでは①、②、③、④と分けていますけれども、①と②が東部、③と④が西部です。こういうふうには、大きく言うと真ん中で切って東と西というふうに分かれます。皆さんが行くトロントはオンタリオ州で東の一番中心部に当たるところです。

一番東は大西洋岸で、お手元の地図で見ていただきますと、一番右がニューファンドランド島、ノバスコシア、ニューブランズウィック、プリンスエドワードアイランドです。大西洋岸の主な農産物はジャガイモや酪農などです。プリンスエドワードアイランドは赤毛のアンで大変有名なところですが、実はカナダ人はそれほど赤毛のアンを知っているわけではないのです。むしろカナダの一般の人にとってプリンスエドワードアイ

ランドは、夏に遊びに行き、新鮮な魚やロブスターを食べる地域です。もう1つは、カナダ人にも余り知られていないことですが、ジャガイモの産地です。あの島は余り山がなくて平べったいので、至るところにジャガイモ畑があります。アイルランド移民が来て、あそこの島でジャガイモの栽培を盛んにやるようになったのです。いわゆる漁業と観光とジャガイモの島です。気候はカナダの中では割と穏やかです。島自体が非常に小さい島で、人口も多分10万人ぐらいかなという感じです。今は大陸と10キロの長い橋につながっております。これが大西洋岸の典型的な農業の姿です。

その次の②はオンタリオ州とケベック州です。この地図で斜線を引っ張ってある部分が農業生産のできる農業地帯と考えてください。これを見ると、カナダは日本の27倍という広大な国土ですが、北の方は全く農地がない。農業ができない気候です。要するに、この斜線を引っ張っているところは、アメリカ国境から300キロ以内ぐらいの範囲で、カナダ全体からいうと限られたエリアになります。この中で、東で農地が多いのはオンタリオ州とケベック州です。気候的には割と北海道に似ていて、酪農、養豚、園芸作物がさかんです。

トロント都市圏全部合わせると人口約500万人で、モントリオール都市圏も350万人ぐらいですので、これら2つがカナダを代表する大都市です。大都市圏に近いというのがオンタリオ州やケベック州南部の農業地帯にとっては大変有利な条件です。それで、今日は後で出てくると思いますが、ファーマーズ・マーケット、消費者に対する直販、日本的にいうと産直みたいな直売所を展開しやすいという条件を生かして農業をやっている。そういうところで、今言った酪農とか園芸作物（野菜、果実、花、種苗）の、いずれも付加価値の高い農業を展開しております。

皆さん、ナイアガラとか行かれますか。トロントからナイアガラの滝に向かって、車で2時間ちょっとで行きます。ナイアガラの手前の地域が、ナイアガラ・オン・ザ・レイクというナイアガラとエリー湖の間の地域ですけれども、ここは果樹地帯です。もともとはリンゴ、ブドウ、桃が盛んなエリアでした。最近、リンゴは随分減りまして、リンゴの木を切って減らしています。むしろ今はワイン用のブドウで、ここは観光地でもあるので観光用ワイナリーがあちこちにでき、大型バスが入ってきて、試飲したり、そこで土産を買ったりしています。カナダの場合も、ワインの自給率はそんなに高くなく、カナダで消費されているワインのうちカナダ産の比率は3割程度です。あとはアメリカ、ヨーロッパやチリからの輸入が多いです。

カナダ産ワインの1つの特徴はアイスワインです。御存じの方は多いと思いますが、非常に寒くなるまでブドウの木をずっと置いておいて、生き残っているブドウを摘んで、しかも明け方の寒い時に摘んだブドウからつくったワインだから濃縮されている。甘味も大変強いデザートワインで、1本当たりの単価も大変高い。寒冷地という条件を生かしたアイスワインを生産しているということです。ナイアガラ地域がカナダのワインの生産でいうと一番多いと思います。もう1つはブリティッシュコロンビア州オカナガンバレー、これが2番目に大きいところですけど、大体このあたりに集中しております。

③は平原州です。さっきのサスカチュワン州に代表されるような大変広大な農地です。山がなく見渡すかぎり平地がずっと続いている。車で走りますと、何時間走っても余り風景が変わらない。道が真っすぐにどこまでも続いている、そういう広大なプレーリーです。ここは小麦、ナタネ、肉牛が主な農産物で、最近では養豚も増えています。

④はBC州（ブリティッシュコロンビア州）で、一番太平洋側に近いエリアです。バンクーバーの近郊をフレーザーバレーと言います。バンクーバーというのは、フレーザー川の河口、デルタに堆積した土壌の上にできた都市です。日本流に言うと中の島です。ここは都市近郊農業になります。酪農・養鶏、あるいは園芸作物をつくっているエリアです。

それから、さっきふれたオカナガンバレーです。BC州の、バンクーバーとロッキー山脈の間の真ん中ぐらいのところに大きな湖があり、その周辺は果樹地帯です。

そういう地域区分を頭に置いておいていただきまして、皆さん方は、バンクーバーから入って、最後はトロントまで行くということで、真ん中の平原州は飛行機で上から見ることになるかと思います。

カナダ農業を取り巻く経済環境の変化については、NAFTA（北米自由貿易協定）などいろいろありますが、省略します。

ここからは作物別にどんな動きになっているかを簡単に見ていきたいと思います。小麦は、長年にわたってカナダを代表する農産物で、これが貿易黒字を一番稼いでいた代表的な農産物だったのですが、最近では少し減っています。表①に数字をつけておりますので、ごらんいただきたいと思います。これに代わって先ほどの油糧種子のナタネや大豆、そして飼料作物の面積が増えています。ナタネはキャノーラという名前ですが、これはカナダで改良された品種で、それで“Can”がついてcanolaという名前をつけています。1970年頃に開発され、それ以降、急激に伸びたものです。これは、先ほど言ったように油を搾ります。油を搾りますと、あとに油粕ができます。日本では油粕というと肥料ですが、キャ

ノーラの場合は家畜の餌として使えますので、「1粒で2度おいしい」ということになります。搾った後の油粕を家畜に与えても、消化不良を起こさないように改良したんです。普通の在来種のナタネは家畜に粕を与えると消化不良を起こしたりして問題がありました。キャノーラは、油も搾れるし家畜の餌にもなる。だから、これを使って畜産もできます。昔は主に小麦単作型で、農家は小麦の値段が上がるといいけど、不作や値段が下がるとたちまち困る。こういう不安定な経営だったのですが、これを多角化して安定化させる方向にだんだん変わってきました。

畜産については、表②で豚が増えているところだけ確認してください。牛の頭数はほぼ横ばいです。豚の頭数はかなり増えました。輸出向けに養豚経営が規模拡大し、特に企業的な養豚経営が増えました。米国向けに子豚や豚肉を輸出している。もちろん日本向けにも豚肉を輸出している。ただし最近は過剰生産でありまして、経営的には悪化しているところも出ていますが、長い目で見ると増えている。

ここで園芸作物の話に行きたいと思うのですが、カナダ農業の中で園芸作物の比率は全体からいうと小さい。ところが、細かく見ていくと興味深いことがあります。

例えば、ブルーベリーがあります。カナダ産のブルーベリーは生産がすごく伸びています。健康ブームで、ブルーベリーのアントシアニンと成分が目がいいとか、老化を防ぐ作用があるとか、医学的にも効果のあることが言われて、ブルーベリーの売り上げが非常に伸びている。北米でも日本でもブルーベリーは非常に人気があります。日本で消費されるブルーベリーの多くはカナダ産の冷凍したものを輸入している。生鮮で輸出するのはなかなか難しい。多くは冷凍物で輸入して加工することになります。今言いましたようにBC州でも結構栽培しています。

もう一つは温室、施設園芸です。冬は寒く雪が降りますので、ガラス製の立派な温室が主流で、温室面積は相当増えています。トマト、キュウリ、ピーマン、レタスを作って、カナダ国内のスーパーに出しますが、主としてアメリカ向けに輸出して、アメリカのウォルマートとか大きなスーパーに出荷している。温室の集中しているエリアが、オンタリオ州の南部やBC州のフレーザーバレーです。

なぜカナダで施設園芸が伸びているのか、意外に思われるかもしれませんが。カナダといえば広大な農地を使って大規模機械化農業がある一方で、なぜ施設園芸が伸びたのでしょうか、ここでは4つの原因を挙げております。1番目は省略します。

2番目は、生産技術の革新という技術革新が非常に進んだということで、非常に人工的

に管理された環境で効率的な生産ができる。これは農業の工業化の一環になるわけですが、こういう技術が非常に普及してきています。

3番目に、アメリカへの輸出です。NAFTA（北米自由貿易協定）で関税を撤廃しました。多くの農産物も関税を撤廃しましたので、アメリカ市場における輸出が伸びる。これはカナダドル安が結構大きく効いています。米ドルとカナダドルの比率でいうと78%ぐらいです。カナダドルは1ドル=85円前後です。米ドルに比較するとカナダドルは安いので、カナダから輸出するときは安く輸出できるので有利です。

4番目は、温室経営は多くの労働力を必要とします。どうしても収穫とか剪定とか、いろんな管理作業に人手がたくさん要ります。メキシコやカリブ海地域からの出稼ぎ労働者がたくさん入っております。そういう人たちがいないとなかなか人手を確保できない。そこで、カナダ政府が送り出し国政府との間で出稼ぎ労働者の労働条件についても協定を結んで、余りあこぎなことをやらないように、政府間でお互いに保障しています。これは実はアメリカとはちょっと違う。アメリカは合法、非合法でたくさん入ってきていて、今トランプ大統領が塀を作るとか言っています。カナダの場合は出稼ぎ労働者を受け入れています、政府間で協定を結んで受け入れています。

こういうことで、メガ温室経営はオンタリオ州の南部、一番アメリカに近いあたり、それからBC州のフレーザーバレー、ここに温室経営で非常に大きな規模のガラスの温室が集中している。日本の温室よりはるかに大規模なものが連なっております。これは水耕栽培で土を使わない農業です。典型的なのはヤシ殻を砕いたものを布のバッグに入れて、そこに苗を挿してドリップで灌漑する方法です。ドリップ溶液に栄養分が入っていて、栽培するやり方です。こういう技術はオランダの企業が開発しております、アメリカ、メキシコ、韓国どこに行っても同じようなものがある。それがカナダでも増えているということです。

大きな2番目の構造変動のトレンドに行きたいと思います。

見ていただいたとおり、農場数は年々減っています。農場数全体で、今20万を少し下回っています。日本だと農家の数は、統計のとり方にもよりますが、250万戸ぐらいありますが、カナダの場合は農場数としてはかなり少ない。

ところが平均面積は1農場当たりの面積はおよそ300ヘクタール。日本は平均1.2ヘクタールなので、面積規模からいうと格段の差がある。規模感だけでいったら日本の農家とカナダの農家は全然ケタが違う。いわゆる「新大陸型」の農業になっております。

それから、大規模経営への生産の集中、いわゆる二極化が起こっております。その境目は販売額で25万ドルぐらいです。売り上げで25万ドルといえば、日本円で約2000万円でしょう。それ以上の農家は規模拡大している。規模拡大しているということは、2000万円あたりを境目に経営的にもちゃんと成り立っている。それよりもっと小さい農家は数が減っている。離農やリタイア、あるいは兼業化している。兼業農家も結構あります。特にBC州プレーザバレーなんかはバンクーバー都市圏で仕事場が近いので兼業農家が多い。それから、トロント都市圏も同じことで条件的には割と兼業化しやすい。このあたりは日本と似ているところがあります。

大規模農業経営はいわゆるメガ・ファームと言っていますが、売り上げ100万ドル以上なので約8500万円以上に相当します。売り上げ8500万円のうちどれだけ手元に残るかというのはありますけれども、それでも相当な規模です。メガ・ファームは農場数の2.6%ですけれども、こういう経営が売り上げの4割を占めるという状況になっています。だから、ここはカナダ農業の一番中心的な担い手になっているということでもあります。

それから、日本ほどではないにせよ、徐々に高齢化も進んできています。

それでは、次に後半の農業政策に行きたいと思います。ここでは大きく2つのテーマです。1つは、供給管理とマーケティング・ボードについてお話ししたいと思います。それから、もう1つのテーマはセーフティネット政策です。

農業政策の話をするときに理解していただきたいのは、カナダの場合には農業政策は連邦政府と州政府の共同管轄であることです。背景を申しますと、カナダの憲法では、連邦は〇〇をする、州は△△をしますというふうに役割の分担が定められている。連邦の役割は、例えば外交や防衛、それからN A F T Aのような貿易交渉や通貨の発行、こういうものは連邦政府の権限です。州はどういうことをするのかというと、例えば保健医療、ヘルスケア、これは非常に重要な分野で、特にカナダは医療保険が非常に発達しております。これはアメリカと大きな違いで、カナダの場合には全国民に対しての医療保険がきちんと確立していて、しかも、薬代とかを別にすると医療費が無料化されている。それから、福祉、教育は州の権限になっている。だから、身近なところの話になると、これは州政府の仕事です。ここで言う農業政策や産業政策は連邦と州が共同で管轄しています。

ここでいう供給管理制度はどういうことかということ、対象は酪農、卵、鶏肉などです。先ほど言いました農産物を3つに分けたうち、ほぼ自給で賄っている品目です。これはカ

カナダ独特の制度である供給管理制度によって保護されている。これは生産と価格を安定化させるための制度であり、農業経営に対して生産の割り当てをして、その範囲内で生産するということで過剰生産になることを防いでいる。農産物が過剰生産になると値崩れする。例えば、日本では去年の秋から今年の春にかけて野菜は天候不順の影響で不作でした。だから、キャベツが店頭になかなか出回らないとか、値段が高いとか、こういうことが起こります。ところがもう一方で、今度は豊作でいっぱい取れると、豊作貧乏になり値段が一遍に下がる。こういうことを繰り返しているわけです。だから、どうしても農業の経営は安定しないということがあります。

こういう問題に対して、経営を安定化させるために需要と供給を調整しているということです。需要にあわせて供給側を調整する。それを各農家に、あなたの経営はこれだけの生産というふうに全部割り当てているわけです。それは権利として、一種の株みたいなもので、クォータと叫んでいる。需要と供給を調整しているのが、各州に作っているマーケティング・ボード（販売組織）です。これは農業生産者がメンバーで、自分たちの農産物の価格を安定化させるために、そういう組織をつくっている。日本の農協と違うのは、マーケティング・ボードは法律によって権限を与えられていることで、そういうのが法律によって保障されている。そういう点では半ば公的、半ば協同組合的な組織で、カナダ独特のやり方です。これは州政府や州の何々公社という組織とも違います。あくまでも農業生産者がつくっている団体です。しかし、一方では生産を調整して、生産者にクォータを配分している。そういう権限を法律によって保障されている。公的な性格と両方ありまして、説明するのがなかなか難しいのですが、そういう独特の組織をつくっています。

このクォータ（割り当て）は株みたいなものだと言いましたが、これは売買可能です。例えば新規参入したいとか規模拡大したいと思ったら、廃業や縮小する生産者からそのクォータを買い取る。お金はかかりますけれども、投資になるわけです。その権利を買い取ると経営を拡大できるという仕組みになっています。

そういう点では、生産者価格はかなり安定している。生産者にとっては飲用乳とバター、チーズ、ヨーグルト、アイスクリームなどの原料になる原料乳と2種類あり、いずれも価格的には安定しています。皆さん方が向こうに行かれて、もしスーパーに寄る機会がありましたら、例えば牛乳の値段を見ていただきたいと思います。はっきり言ってカナダの牛乳の値段はアメリカより高いです。日本の牛乳の値段と比べても余り変わらない値段だと思います。これは、言ってみれば過当競争にならないようにして、生産者同士で自主

的に生産調整をやっている。それで価格を安定化させているわけです。そうすると、生産者にとっては良いのですが、牛乳の値段はアメリカに比べると高くなります。

この制度のもう1つの側面は、輸入・輸出を規制しているということです。輸入のほうも、仕組みとしては関税割当制というやり方をとっておりまして、国内消費の5%程度までは非常に安い関税で、ほぼゼロに近い関税で輸入していますが、それを超えると途端にものすごく高い関税がかかってくる。バターとかチーズは高率の二次関税（200%から300%）がかかりますので、例えば200%だったら、100円のを輸入して200円関税が乗ると、結局300円になります。実際にはそんな高い関税を払って輸入しようという業者はいないので、そういう形で一種のバリアをつくっている。これは今のNAFTAでは、さきほどあげた供給管理品目は貿易自由化の例外品目ということで守っています。

TPPに関しては、カナダもTPPのメンバーなので、酪農とか卵・鶏肉をどうするかというのは大きな課題になりましたけれども、低率関税枠に追加輸入枠を設けるということで決着いたしました。

皆さん方がBC州のベジタブル・マーケティング・コミッションに行かれるということですが、BCのベジタブル・マーケティング・コミッションも販売組織なので、これもマーケティング・ボードの1つです。ただ、マーケティング・ボードというのは、ここに書きましたように幾つか異なるタイプがありまして、今私が説明した供給管理、需給調整、価格決定を行っているというタイプのマーケティング・ボードは、酪農・鶏肉・卵に限られる。このあたりは供給管理をがっちりやっている。これに対して、野菜とか果実にもマーケティング・コミッションとかマーケティング・ボードはありますけれども、ここがやっているのは販売促進、それから普及や啓発事業が主たる機能です。今説明した酪農・鶏肉・卵といった供給管理型とはかなり違うので、そのあたりはベジタブル・マーケティング・コミッションへ行かれたときに注意していただければと思います。実際にBCのベジタブル・マーケティング・コミッションがどんなことをやっているか、見学していただければいいかと思いますが、酪農・鶏肉・卵の供給管理のようなことはしていない。あくまでもこれは販売促進を主な機能としていると見ていただければいいと思います。これがマーケティング・ボードですね。

もう1つの話題は、カナダの農業セーフティネットです。連邦政府と州政府（および準州政府）は21世紀に入ってから、毎年ラウンドテーブル（円卓会議）を行って農業政策を議論しています。連邦の農業大臣と10州の農業大臣が集まって、10+1と言っています。

10+1で毎年集まって議論して、大体5年に1回、大きな農業政策を策定し協定を結んで実施するのが、今のカナダの農業政策の基本的な形です。ここに名前を書いた“Growing Forward”から始まって、今年から向こう5年間は「カナダ農業パートナーシップ」を実施することになっています。こういう形で5年ごとに見直しをするという形で進んできています。

カナダ農業パートナーシップは、大きく言うと4つぐらいの柱から成り立っております。詳細はこれから詰めるということで、割と大きな方向性みたいなことを農業大臣の会合では話し合っ合意しています。大きな方向性としては、①貿易の成長と市場拡大、もっと輸出をふやすということ、②技術革新と競争力の強化、③環境保全を意識した持続的でクリーンな成長、④多様性と消費者の信頼確保、こうした項目が挙がっています。

現在の政権は自由党のジャスティン・トルドーという若い首相で、まだ40代の前半ぐらいですが、2015年の総選挙で保守党から自由党に政権交代が起こりました。カナダの連邦政治は保守党と自由党の二大政党の政権交代でやってきている。色分けの違いとしては、保守党が自由競争重視で中道右派、それに対して自由党は中道左派で、福祉を重視するか、環境を重視する。③や④には現在のトルドー政権のカラーが多少は反映されているのかなという感じがします。しかし、同時に農政としての継続性はあるので、政権交代が起こったからがらりと変わるということではなくて、基本的には前の保守党のハーパー政権時代からの農業政策の①、②は継続している。

農業セーフティネット政策もハーパー政権の時代から継続してやっていることで、カナダではビジネス・リスク・マネジメントといいまして、農業経営にとってのリスクをいかに最小限にしていくか、リスクをいかに減らして安定化させるかということが大きな課題です。ここでは4つの柱で、その中で予算としてはアグリスタビリティ（収入保険）が一番大きな比率です。これは過去5年間の参照指標がありまして、販売額から経費を引いた後に残った手取り収入を指標にして、過去5年間の70%を下回ることが起こると、これを発動するという制度です。例えば過去5年間の70%を下回って60%になったとします。この年は不作で、余り収入がなかったということで、過去5年間の6割に落ちてしまった。そうすると、70%から60%の差の10%部分を収入保険から農家に対して支払います。少なくとも過去の7割は保障されています。そういう形で安定化させている。これが収入保険です。日本でもいろいろ検討され導入されています。これは収入保険なので、国が全部見ているわけではないのです。生産者と政府が3対7の割合でそれぞれ掛金を出して、これ

を下回ったときは、ここから農家にお金が支払われるという制度です。

図①にこの仕組みを示していますので、後で見ていただければと思います。これが一番大きな農業セーフティネットの政策であります。これは野菜や果物も全部対象になります。収入が減った場合には、その分をカバーするという収入保険制度です。もちろんこれは収入保険なので、加入していることが支払いの条件です。毎年毎年の売り上げの中から、これの掛金を払って行って、それでもし収入が減ったときは、そこから補填されるという仕組みであります。これもマイナーチェンジがされてきて、以前は書類を書くのが非常に面倒くさいとか、仕組みがわかりにくいとか、こういうのは経費として認められるのかとか、恐らく日本でもこういう政策をやると、必ずそういうことが出てきます。農家から結構批判がありましたが、最近は改善されて定着しています。

あとは簡単に述べます。アグリインベストというのは積み立てです。投資資金が必要なときに備えて農家が積み立てをすると、政府が農家の口座に同額を補助する仕組みです。年間の積立額は上限があって、1年で積み立てできるのは1万ドルまで。例えば農家がこれに5000ドル積み立てをします。この口座をつくって申し込んで積み立てしたら、政府から同じ額がここに振り込まれる。これは補助金として振り込まれるので、農家にとっては大変割のいい制度であります。そういうものを積み立てておいて、新しい事業をやるとか、規模拡大するときの投資に使える。

3つ目は作物保険です。干ばつとか自然災害による損失を補填する。4番目はもっと特別かつ異常な災害による損失を補填する緊急対策的なものであります。激甚災害の復興救済策と言ったほうが適切でしょうか。そういうものに相当すると思います。

最後に、トロントの食政策評議会についてお話をしたいと思います。今までは農村部についてもっぱら話してまいりました。ここからは都市住民の話になります。近年北米の都市部で市民の食に関するネットワークが広がっております。これは市民の自主的な取組団体があるわけで、ファーマーズ・マーケットもその1つですけれども、この他にもいろいろな団体、取組みがあります。行政がそういう市民の取り組みを後押しして、食に関するネットワークが広がっています。トロント市は、その中でももっとも早くから活動してきました。

トロント市は1990年代から食政策評議会 (Toronto Food Policy Council) という組織をつくりまして、市民の食の改善に取り組んでおります。どんなことをやっているかという、例えば市民農園を作りたいというときに、それを斡旋したり援助したりする。市

民農園を運営している市民のグループを援助する。

さっきのファーマーズ・マーケットもそうです。ファーマーズ・マーケットは北米でどんどん増えています。ファーマーズ・マーケットは、例えば土曜日、日曜日とか定期的に曜日を決めて、定期市みたいなものですね。そういうのがファーマーズ・マーケットの基本的な形です。その場所を提供して、そこに農家がトラックで野菜とか果物を持ってくるわけです。農家がずっと道沿いにトラックを並べて、その荷台で売っているというものが多いです。基本はそういう形で、市民にとってみれば、農家から直送なので新鮮で、とれてすぐのものが手に入る、それから、スーパーなどを通していないので安い、こういうことが大きな魅力になっております。

ファーマーズ・マーケットは、そこにたくさん人が寄ってくると、当然農家以外のパン屋さんが店を出したりとか、ジャムとか加工品を売ったりします。日用品というか食料品は色々なものが手に入る。そこに外食店も店を出す。そういう形の歩行者天国的な場所を町の中心部の人が集まるところにこしらえる。それがファーマーズ・マーケットで、これが定着しています。

あとは、買い物困難地域というか、生鮮物を扱っている食料品店が余りないエリアもあります。車を持っていない人にとっては、歩いて買い物に行くとかかなり遠いところまで出なければならぬ。そういう不便な地域もありまして、特に低所得者の多い地域にはスーパーも余り出店したがない。向こうでもコンビニエンスストアはありますが、日本のコンビニと違って向こうのコンビニは生鮮物を余り扱っていません。あとはコーヒーとパンが若干あるぐらいで、品揃えはそんなに多くない。トロント都市圏の中でも生鮮食料品店が少ないエリアがありますので、そういうところの住民を支援する。地理情報システム（GIS）を使ってそういうエリアを調べて、住民が必要としている食料品が供給されるにはどうしたらよいかを検討しています。

トロント食政策評議会は、公衆衛生局（Public Health）のもとにおかれて、事務局に市職員が派遣されています。事務局は市の職員とボランティアが協働で仕事をしている。トロントのダウンタウン、都心部に事務局を構えております。これはトロント市が職員を派遣していますけれども、主体はあくまでも市民のネットワークであって、それがファーマーズ・マーケットの運営や市民農園をやっている。それから、カナダ自体が移民の国ですけれども、トロントはとくに移民の多い多文化都市で、いろんな国の出身の方が来ていて移民同士のネットワークがあるわけです。例えばアフリカ系の人たちのネットワークが

ある。そういう人たちのフードバスケットというか、食料をお互いに融通するネットワークがあったりします。こうしたネットワークに、様々な立場の人たちが参加している。栄養士や農家もちろんです。それから、トロントは大きな大学が幾つもありますので、トロント大学を始めとして研究者、専門家の協力体制ができていることも重要です。

カナダの農業と農業生産、そして食政策評議会について話題提供させていただきました。皆様の御参考になりましたら幸いです。これで私からのお話は終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

－質疑応答－

質問1 先ほど御説明いただきましたメガ温室経営について教えてください。こちらのほうは相当大きなお金が動くものだと思いますけど、こちらを経営している主体は、この農場だけの単体のものでしょうか。それともいろんな企業が、こういった経営にも参加しているということでしょうか。

回答1 これは非常に規模が大きいものになりますと法人組織ということです。そういう企業的な経営です。大体2つぐらいのパターンに分かれると思っています。1つは、農家から出発をして、だんだんと大きくなって法人化したというルートですね。もともとはその農家だったのが、規模拡大して大きくなり、人も雇ってやっていると、法人化したほうがいいということで法人組織になるという道筋です。だから、株式会社の形をとっているわけですがもとは家族経営であり、その上に法人の衣がかかっているという形です。もう1つは、まさに企業が外から参入してきて、大きな企業がそれに投資をしてメガ温室経営をつくるということで、巨大なガラス温室がいきなり農村に出現するというケースもございます。大きく言うと2つの経路があるという感じです。

質問2 カナダの自給率はどれくらいなのか教えてください。因みに、日本はすごく低いというイメージですけれども…。

回答2 食料自給率という場合にはいろいろなものを全部総合して考えますので、日本でよく言われるカロリー自給率は、日本は今も40%をちょっと切っている。カナダは二百数十%で、生産力が非常に高い。特にさっきの穀物や油糧種子は輸出が多いので、全体の食料自給率は非常に高い。ただし、さっきも言ったように、野菜とか果

物とか、どうしてもカナダでできないものがありますので、そういうものは輸入に頼らざるを得ないということになります。総合的に見るとそんな状況だと思います。

質問3 農業経営者の高齢化も進むというお話がありましたが、日本では後継者問題などが話題になっています。カナダはまだまだそんな話は出ていないのですか。農業は若者にとって魅力がある職業でしょうか。

回答3 結構難しい質問です。実は、カナダの場合も統計で見ていると、日本ほど極端ではないと思いますが、平均年齢は上がってきていますので、だんだんと高齢化しています。それから、同じ場所でずっと農家をやっているという人もいますけれども、ある程度の年齢になったらリタイアして、大きな都市に移動して暮らす人も結構います。子供は全然違う職業をやっている人の場合には、農場を売りに出して都市部へ移って生活する人もいます。もちろんそこでずっと農業を続けて、高齢者で農業をやっている人もいますが、日本に比べると移動性が高いのではないかと思います。

例えば私は去年、サスカチュワン州に行ったときに訪問した農家の場合は、奥さんは今、フランスのパリで大学の先生をしている。ご本人はサスカチュワンで農業をしている。子供はどこかへ行っている。それぞれに自由な生き方をしている人もいます。プレーリーでは冬になったら農作業ができないので、農場を閉めてヨーロッパへ行くかとか、お金があればそういう人もいます。また、大きな農家になると自動車修理工場みたいな大きなガレージを持っています。工場みたいな施設を持っていて、冬の間はそこで機械の修理をやったり、翌年の準備をしたり、そういう農家も多いです。そういう形で、生活のスタイルはかなり多様だと考えていただいたらよいかと思います。

あと、新規参入の状況についてはなかなか難しい質問ですが、やはり新規参入しようとする、どうしても資金が要るので、その投資ができるかどうか大きな要素です。全体としては若い人が参入するのはだんだん少なくなっているのではないかと思います。

質問4 今の新規参入のお話ですが、日本だと農協の手続が難しいとか、厳しいとかいろいろ聞きますが、カナダは農業を始めたいとって、お金がある人が気軽に始められるのでしょうか。それをまた商品として売り出すというのだと、いろいろ手続が

必要になるとおもうのですが。

回答4 だんだん難しい質問になってきました。その点は日本よりは規制は厳しくないと思います。日本では農地を持っていないと農業を始めるというのは壁があって難しいというか、農地を全然持っていない人がいきなり来て農業をやろうとすると、結構難しかったり苦勞していたりということがありますが、カナダの場合には、新規参入への壁は相対的に低いのではないのでしょうか。

ただ、最近の動きとしては、外国人が農地を所有することについては制限をかける動きは出ています。例えば皆さん方のなかで、バンクーバーがすごく気に入ったから、バンクーバーで農地を買っていきなり参入というのは、ちょっと難しいかもしれません。例えば、カナダの市民権を持っている方が農村へ行って農地を買って農業を始めるというのは、ハードルは低いのではないかという感じがします。

カナダの市民権を取ることですが、あそこに5年以上住んでいて、テストを受けないといけないのですが、そんなに難しいテストではないようです。私のゼミの卒業生ですが、カナダで旅行代理店の仕事をやっていた時期に、テストを受けてカナダの市民権を取ったことがあります。人の受け入れについては、ちゃんと手順を踏めばカナダ市民権を取ることとはすごく難しいことではないと思います。

質問5 農業の労働力というところを教えてくださいとおもうのですが、大規模な農家もいるだろうし、小さなファームを経営している人もいると思いますが、小さなファームといっても日本よりは大規模になると思うので、それが家族経営だけでやっていけているのか、あるいは誰か仕事をする人が別にいるのか、そういったことを教えていただければと思います。

回答5 ありがとうございます。これは農業の形態によってすごく差があります。基本は家族経営という、家族でやっているというのが基本の形です。ところが、どうしても家族だけでは人手が足りないというふうになりますと人を雇ってということで、例えば先ほどの施設園芸なんかは典型ですけれども、人手がたくさん要るので、そういう場合は出稼ぎの人を雇っている農家が結構あります。

あとは、農業の場合、どうしても季節性という要素があります。年中通して仕事があればいいんですけど、必ずしもそうではない。忙しいときだけパートで手伝いに来てもらうというケースもあります。これも地域によってかなり差があります。例えばトロントの周辺などオンタリオ州南部ですと、大きな産業としては自動車産

業があり、他の製造業の工場もたくさん立地しているので、そちらの待遇が良いわけです。カナダ人の働き手は、どうしてもそちらに行ってしまう。農家としては、必要なときに欲しい人が来てくれるかということもそれも難しい。日本でも今、農業でも人手不足が大きな課題になっていますが、それに近い現象が起こっています。だから、人手が足りない場合に出稼ぎの人を雇うことが起こっています。

質問6 今の出稼ぎの方ですけど、それを斡旋するような事業者はいたりするのでしょうか。メキシコとかカリブとか海外から出稼ぎの方がはるばる来るわけですね。それをここの農家さんでこれだけの人を欲しがっているというのを斡旋してくれるような業者がいるのでしょうか。

回答6 おっしゃるとおりで、例えばメキシコから出稼ぎの労働者がこれだけ来ているというのは、もちろん農家が直接やるわけではなく、間に業者が入るわけです。送り出す側のメキシコにも業者がいて斡旋しているという形で、カナダの受け入れ側にもいて、お互いに情報をやりとりして斡旋している。ただし、そのときに、例えば農家にメキシコから出稼ぎの人が来て、住宅はどうするのというときには、先ほど言いましたように政府間で協定があり、一定の面積の住宅や、電気、ガス、水道などの基準があります。旅費などの条件については取り決めがあって、それに基づいて業者が斡旋しているのが実態です。

オンタリオ州の南部でリミントンという地域がありまして、私が10年ほど前に調査で行った地域ですが、トマトやキュウリの温室が非常に集中しているエリアです。リミントンは人口3万人ぐらいの小さな地方都市です。ところが、人口3万人の町に出稼ぎの人が5000人来ている。規模感からいうと、それぐらいたくさん来ている。私が行ったときに新聞を読んでいたら、トロントにメキシコの総領事館がありますが、リミントンに出張所をつくらなければいけない。出稼ぎの人たちの様々な相談や手続をする出張所がリミントンの小さな町にできる。こんなニュースが出るぐらいです。そういう点で、地方の小都市にとって大変大きな影響がある。受け入れ体制の整備をこの間進めているというのが現状です。



「カナダの子育て支援」

NPO 法人セカンドリーグ茨城理事長 横須賀 聡子 氏

【講師略歴】

1961 年生まれ

コミュニティ・オーガナイザー

ワークショップ・デザイナー

自身の子育て困難から「水戸こどもの劇場」に入会、やがて運営にかかわり、1999 年の NPO 法人化により理事、その後副代表を務め、長年、子育て支援に携わって来た。

その間、CAP 茨城 や NPO 法人いばらき子どもの虐待防止ネットワークあいの設立にかかわり、子どもの暴力防止、権利擁護の活動も行ってきた。

2015 年 11 月より NPO 法人セカンドリーグ茨城理事、2017 年 5 月より理事長に就任し、茨城県内の子ども・子育て支援団体の組織化と運営支援を行っている。

2003 年より武蔵大学武田信子とともにコミュニティワーク実践研究会（2012 年より日本コミュニティワーク協会）を設立、カナダのコミュニティ・オーガナイゼーションの発想と手法を紹介し続けている。

カナダの子育て支援

NPO法人セカンドリーグ茨城理事長 横須賀 聡子 氏

まず最初に、私自身のことを少し。今回、このお仕事のご依頼を引き受けたわけなんです。私は普通の母親であり、主婦です。なので、何か特別にまさにこうですよと教えるようなものをお持ちしたわけではないですし、実は私は、昨年度の資料をお送りいただいて、とんでもない仕事を受けてしまったと思って、友人とかにぼやいて、ちょっと私ができる仕事じゃないわと言ったら、そうしたら、ずっと私は武蔵大学の武田信子という人と一緒に、彼女の研究を手伝ったりとか、コミュニティ・ワークの勉強会をしたりとかいうことをしているので、彼女から、あなたがすべきことをやってくればいいんじゃないのと言われ、受講者の皆さんはきっとあなたよりずっと優秀な方たちだから、データなんていうものはグーグル先生を引けば幾らでも出てくるんだと言われて、データなんかしゃべってくる必要はないと背中を押してもらって、きょう何とかこちらにやってきました。パワーポイントも、実はそういうもっともらしいものをつくろうかなと思ってやりかけたんですけれども、急遽、3日ぐらい前につくり直して、私が皆さんにお伝えしたいことをただお伝えしに来ようと思ってやってまいりました。そういうのが私の背景です。

カナダの子育て支援ということなんですけれども、カナダの子育て支援で、このところの日本の子育て支援にすごく大きく影響を及ぼしているんですね。皆さん、子育て支援とか、子供にかかわる、子供の福祉とか教育というところに携わっておられた方だというふうに聞いていますけれども、地域の子育て支援のことを御存じの方はどのぐらいいらっしゃると思いますか。聞きませんから、安心して手を挙げてくださいね。みんなの前で、じゃ、教えてくださいって、時々言うけれども、大概は言わないので。——何人もはいらっしゃらない感じですかね。ありがとうございます。日本の国内で行われている子育て支援ということを知っていただいて、もし視察に行かれるんだったら、見ていただいたほうがいいんじゃないかなとちょっと思って、そういう資料もつくってまいりました。

私がカナダと出会ったのは、1999年とかそのあたりなんです。そのときには既に小出まみさんという方が「地域から生まれる支えあいの子育て」という本を出されていて、これが、今子育て支援の中心的な活動をしている人たち、ひろば全協の奥山さんとか、せたがやの松田さんとか、日本の国内の子育て支援をずっと引っ張ってきた人たちがみんな読

んだ本でした。その後、私がいろいろお世話になっている武田信子が「社会で子どもを育てる」という本を出します。これはトロントで、実際子供を連れてトロント大学の客員研究員で行って、そのときの生活とか、彼女が利用してすごくよかったと思ったようなカナダの子育て支援のことが書かれていました。私が実は、先ほど御紹介いただきました水戸こどもの劇場というところで活動しているときに、子供とか子育て支援のことをやっていたんだけど、どうしても何かしっくりこないことにぶち当たっていて、そのときに、こどもの劇場とか、親子劇場というのは全国のネットワークがありますので、そこからコミュニティ・ワークを学ばないかと声をかけてもらって、「社会で子どもを育てる」というこの本に出会って、武田さんのところに通うようになったという感じなんですね。そのときに、私は初めてカナダの子育て支援ということに出会いました。

子育てひろばって、つどいの広場事業、今は拠点事業とかいうふうに呼ばれていますけれども、それに取り組んでいる市町村の方、ちょっと手を挙げてみてください。うちの市町村でやっているよ。——ありがとうございます。多分大概の市町村にありますよね。子育て支援センターとか、ひろばとか、そういうものですね。これが厚労省で始まるちょっと前に、私たち水戸こどもの劇場ではサロンを開き始めていたんですね。そのときに、ちょうど「社会で子どもを育てる」に出会って、私たちはこの本に書かれていることを全部やっているけれども、でも、おもちゃサロンというか、来る動機づけというところは全然視点がなかったなと思って、そこからヒントを得て、おもちゃサロンというのを水戸で始めることになって、おもちゃを貸しますよと言ったら、人がばっと集まって、すごく層が厚くなったということがあって、それがどうしてできたかという、茨城県の家庭教育推進事業というのでお金をくれるという枠組みがあって、それがあったからやろうと思ったことができたということなんです。

そうこうしているうちに、厚労省のほうで制度になって、それに伴って、つどいの広場全国連絡協議会というのも立ち上がって、今、全国の子育て支援とか、サロンとかを運営しているような、市民活動とか、NPOの方たちのネットワークができ上がっている。なので、こういう活動もベースとなっていたのは、カナダのドロップインというのがすごく大きな影響を与えたということなんですね。皆さんも多分、どこかごらんになる予定ですよ。

あと、私はそのころ、CAPというアメリカのプログラムにもかかわっていたので、カナダといって思い出すと、メグさんの性教育という性教育に関するワークショップという

のも——カナダのこのメグ・ヒックリングさんというのは、勲章とかも受けられた方で、長いこと保健衛生の分野で、性教育とか、性の健康科学というふうに彼女はおっしゃるんですけれども、子供たちとか親に向けて性の話をしてきたという人です。この人もNPO法人女性と子どものエンパワメント関西というところが招聘して、多分1998年ぐらいからずっと日本にかかわり続けています。カナダでも、彼女は保健師さんなんですけれども、彼女の周りにたくさんメグさんの性教育をやるという方たちがいて、今も続けられている活動です。

あと、イクメンがいきなりブームになったと思いませんか。イクメンていきなりわっと出てきて、ブームになった。あれは、実はお父さんの育児参加のキャンペーンをと、当時、こどもみらい財団というところが研究助成をしていて、その研究助成を私たちは武田さんと受けて、子育て支援の研究をしていたんですけれども、そのときに一緒にやったプログラムで、カナダのソーシャル・マーケティングの方を招聘して、パパはずばらしい仕事みたいなキャンペーンを張るといふのを学ぶということをやったんですね。その後、新座の坂本純子さんという方なんですけれども、皆さん、どこかでお名前を聞いているかもしれないんですけれども、彼女とかが、厚労省とか、あとは財団とかと組んで、そこに安藤さんが参加してファザーリング・ジャパンというのが立ち上がってくる、それでイクメンブームができるという流れがあって、あのイクメンブームのベースとなったのもカナダのソーシャル・マーケティングという取り組みなんです。

Nobody'sもごらんになる予定ですよ。皆さん、どこかで見る予定ですか。Nobody's Perfectという、これはペアレンティングのプログラムなんですけれども、Nobody's Perfectを御存じの方はいらっしゃいますか。——いない。多分、千葉県内でもなさっている方がたくさんいらっしゃると思います。結構保健師さんとか、心理職の方にやっている方が多いと思うんですけれども、これはカナダ生まれのプログラムで、これも日本国内にすごくたくさん広がっていて、やっている方たちがすごくたくさんいます。このファシリテータの養成ももう既に日本で行われていて、ここですね。NPO法人子ども家庭リソースセンターとか、あとNobody's Perfect日本センターとか、こういうところがトレーニングをして、カナダのプログラムを日本国内で実施できるような取り組みがもう既に、これも多分2000年ぐらいから動いているので、10年以上のキャリアを持って日本国内にあります。Nobody'sは、このところずっと養成のプログラムをどんどん広げていて、いろんな大学とか、研究機関なんかでもNobody's Perfectのプログラムを実施できる人たちの養成という

のを始めていて、ちょっとこれから爆発的にふえるんじゃないかなと私たちは思っています。

a s o b i 基地という団体さん、N P O さんなんですからけれども、ここはまさにトロントの子育て支援をモデルに、保育園から、子育て支援から、外遊びの体験活動みたいなものまで広く企画をしていて、どんどんこれも各地に広げているので、地域チームというのが多分千葉にもあったんじゃないかと思います。

結構これだけでもカナダのものが日本にもう既に入っていて、皆さんの身近にあるという感じがしませんか。こういうものに出会ったときってないですか。聞いたことがある感じ？

○—— 聞いたことがある程度です。

聞いたことがある程度、そうですね。何か市民活動でやっているものというのは、行政の方たちのお仕事とつながるのがなかなか難しかったりとか、つながりにくかったりとかして、何が国内で展開されているのかというのが、やっぱり蛇の道はへび的にその業界の人しか知らなかったりということがあるんだろうなと思ったので、わっと行って見に行くよりも、実際にもう国内でやられているものは、国内との比較で見せていただいたらいいかなと思って、ちょっと御紹介したいなと思っていろいろ持ってきたんですね。

あと、共感の根、Roots Of Empathyをやっているところもバンクーバーでごらんになると日程に入っていたので、実はRoots Of Empathyは科研によるプロジェクトで、東京で4校実施した実績があります。でも、残念ながら日本への導入には至らなかったもので、それはさまざまな理由があるんですけども、オープンにされていないものもあるんですけども、でも、Roots Of Empathyの創始者の方が来日されたときに、たくさんの方が彼女の話聞いていて、そこから日本国内のオリジナルな動きが生まれているんです。島根とか、鳥取とか、あちらのほうの保健師さんだったと記憶しているんですけども、Roots Of Empathyに想を得て、自分がちょうど赤ちゃんを出産されたばかりで、その赤ちゃんを連れて学校に行くということを始められた方がいたんですね。それがどんどん広がって、今、赤ちゃんを連れて学校に行くというプロジェクトが国内でもたくさん実施されています。

赤ちゃんが学校にやってくるとか、赤ちゃん学校とか、そういうのは聞いたことはありますか。ないですか。教育の現場で、家庭科の先生とか、保健の先生とかが、赤ちゃんを連れてお母さんたちに、学校に来てねとオーダーをかけて来てもらうみたいなことも結構

生まれているんですけども、NPOとか、民間の市民団体が赤ちゃんを学校に連れていくことで次の世代に何を伝えるかみたいなこと、それから命の大切さとか言うけれども、実際に赤ちゃんが行ってしまうと一瞬に伝わってしまうみたいなこともあって、そういうプログラムを開発して実施している子育て支援団体も国内にすごくたくさんあるんです。あるところの方は、学校にその赤ちゃんを連れていったら危険じゃないかみたいなことを学校側に言われたんだけど、赤ちゃん、出産とか育児ということを家庭科で教えるときに、赤ちゃん人形を使っていたら、赤ちゃん人形を子どもたちに振り回されちゃって、投げられたりして、本物が来ちゃったらどうするんだろうみたいな話もあったらしいんですけども、実際にそこの学校の同じクラスに赤ちゃんを連れていったら、もう大騒ぎして、赤ちゃん人形を投げていたやつらが、物すごく赤ちゃんをかわいがって、そっと優しくさわってみたいなことが起きたらしいんですね。そういう実践報告がたくさん届いて、結構広がってきているところなんです。その中で、それをもうちょっとRoots Of Empathyに近く、プログラムとして提供しようという団体もあらわれて、それが赤ちゃん先生プロジェクトというものなんです。これは神戸の団体さんなんです。

これはRoots Of Empathyのカナダのホームページです。ここも行けば、今、Roots Of Empathyが何を見て何をやっているのか全部記載されているので、もし英語が堪能な方がいらしたり、あとグーグル先生の翻訳、怪しい翻訳でもめげずに読める人は、行って、見ていただいて、こんなことをやっているところなんだなと知って、行っていただくといいかなと思います。

これが赤ちゃん先生プロジェクトです。こんな感じで、カナダで、これはもう最初から、この人はカナダのRoots Of Empathyに想を得て日本版に私たちが開発しましたと言っているんで、これも確実にカナダからの流れで生まれている市民活動です。

では、そもそもカナダはどんな国なんだろうということ、きっと最後にやりますよね。研修会の最後です。国土は日本の26倍、人口は4分の1というところらしいんですけども、気候も、広いので、広いけれども、でも、全体として寒いんです。トロントは冬は普通だとマイナス20度ぐらいが当たり前と言われます。私はトロントに2回行ったけれども、私が行く年はいつも暖かくて、そのマイナス20度を経験していないから、全然寒い感じが個人的にはしないんですけども、寒いらしいです。言語も、国内で公用語が英語とフランス語と2つあるんで、モントリオールとかはフランス語なのかな、そんな感じみたいなんです。産業とかは、観光のところいろいろこれから皆さん、学ばれるのかもしれない

ですけれども、でも、ぜひインターネットとかでたくさん検索していただいたらいいと思うんです。なので、私はそういう調べればわかることはしゃべってこなくていいと武田から言われてきたので、この辺は用意していないんですけれども、あと特産品で、私は全然思いもしないものがすごくおいしかったので、これだけはお土産を買う都合上、教えておこうかなと思ってきたのが、マスタードがおいしいんです。マスタードはカナダが産地なんですって、特にトロントの近くは。まだ国内に入っていないマスタードもあって、本当に行く人がいたら、ラベルの写メを送って買ってきてほしいぐらいおいしいマスタードがあるので、もしうろうろした暁にはですけれども。

カナダという国がどんな国なのかということは非常に重要だと私は思っていて、なんちゃってでこんな軽く知っていますけれども、でも、視察に行つて、どんないいものを見ても、どんなおもしろいものを見ても、それには背景があるということを思つて行つていただきたいなと思うんです。

以前、私はその武田のところ、子育て支援から教育の研究という感じで研究のお手伝いをしているんですけれども、オランダからカナダの教育改革にかかわつた、最初の一步を踏み出した方を招聘したときに、その方がネズミの嫁入りの話をしました。隣の国はこんなにすばらしいと思つたけれども、もっとすばらしいといつて、ぐるぐる回るけれども、みんな日本人はオランダの教育がすばらしいといつてオランダに視察に来るけれども、でも、オランダは日本のすばらしいところをまねて、今も教育改革を実践したんだよと教えたんですね。なので、そこの国の背景、それから私たちの国でどんなことが起きているのかというようなことを頭に入れながら、視察の計画を練つてほしいと思います。

ところで、私にとっては非常にトロントなんです。これは何でしょう。ひょっとして知らない？

○—— 知っている。

知っている。これは何でしょう。

○—— バルタン星人。

バルタン星人。私の中で、トロントといえばバルタン星人なんですけれども、バルタン星人がやってきました。ハグをしましょう。

皆さん、座るところはグループに、班になっていますか。そうじゃない？ 1列目、3列目の方、こちらは2列目の方がちょっと後ろを向いていただいて、皆さんのところにバルタン星人が攻めてきました。何をしますか。どうやって皆さんの地域を守りますかという

ことをちょっと4人で話していただいていたいいですか。バルタン星人がやってきました。さあ、どうします？皆さん。

皆さんは地球防衛隊の隊員としてよく真剣に考えてくれます？皆さんの地域が危機的な状況です。どうしますか。ちょっと対策を立てていただきませんか。3分ぐらい時間を差し上げますので、対策を協議していただいて、決めていただいて、どなたか教えていただける方を決めてください。

もしかしてバルタン星人の話を忘れました？バルタン星人が地球にやってきて、それで宇宙船が壊れたから修理をしたいというのと、それから燃料を補給したいと言ったんですけれども、でも、地球がとってもいいところだから住みたいと言ったんです。でも、1人、2人はいいかなと思って、いいよって言ったんだけど、実は何万人も宇宙船に乗っているとされたんです。そういう話なんですね。では、どうしましょう。あとテレパシーは使えるんです。

そろそろお時間ですけれども、どうするか決まりましたか。どうでしょうか。隊長、どうぞ。

○—— 住む場所を探したり、場所を提供したりしてあげれば地域との問題は起きないのではという回答になりました。

○横須賀 住むところを探してあげる、土地をあげる。ありがとうございます。（拍手）

○—— 一番最初は、バルタン星人がチョキで、じゃんけんとかがいいんじゃないかと思ったんですけれども、でも、悪者ではなかったというお話だったので、じゃ、一緒に住みたいねとなったときに、ただ、入ってしまうと、私たちの生活、今まであったところとトラブルとかになって戦いが起きるのは嫌なので、人数は余り考えていないですが、ある程度、こういうテリトリーみたいに、バルタン星人のいるところと……。

○横須賀 バルタン星人村。

○—— 村みたいなところをつくって、その中で交流をしていくというところで、仲よく暮らせるんじゃないかなというところで終わりました。

○横須賀 ありがとうございます。（拍手）ほかに何かありますか。どうでしょう。

何で突然バルタン星人というのからきつと離れられなかったかなという気もするんですけれども、何でと。バルタン星人の話って知っている方はいますか。ワークショップとかをやると、必ず1人ぐらい知っていたりするんですけれども、バルタン星人で難民なんです。宇宙旅行に出ていたら、科学者の暴走か何かでバルタン星がなくなって消えてしまっ

て、帰るところを失った人たちなんですって。それで、バルタン星人の話は、地球に住みたいと言っただけけれども、その数に驚いて、そんなにたくさんいるんじゃないかって言ったということから、バルタン星人が怒って町を破壊するというお話なんだそうです。

なぜトロントといえばバルタン星人かというと、トロントは移民の国なんです。難民をすごくたくさん受け入れている。だから、もともとたくさんの種族の人たちが暮らしている町なんです。カナダの中でもとりわけトロントは国際色豊かな都市です。

では、私がコミュニティ・ワークを学ばない？と言われて、武田さんにつながったという最初のところに戻るんですけども、コミュニティ・ワークというのがどうして生まれたかということ、その価値観とか、発想とか、それから常識的なものとか、あと生活スタイルとか、みんな違う人たちの中でどうやって課題を解決していくのかということも1つある。それから、移民が多いということは、格差も問題として抱えてしまうということがあって、その格差の中で、新しくカナダに入ってきた人たちの生活をどうつくっていくのかということ、あとは格差があるということは、さまざまな社会問題を抱えるということにもなるので、自殺未遂の問題とか、非行の問題とか、さまざまな問題をどう解決すればいいのかということ、ソーシャル・ワークが発達するということになるんですね。カナダは、ソーシャル・ワーカーという人たちがすごくたくさん活躍していて、行政の中にも、その行政の政策に横糸を通したり、政策自体をチェックする機能としてソーシャル・ワーカーという方が雇用されていたりするんだそうです。いろんな多様なニーズにどう応えていくのかということの、本当に先進的なモデルだと思うんです。

でも、行政の皆さんは、きっと新人の方は当たり前だと思うかもしれないけれども、行政で長くお仕事をされている方たちは、市民ニーズの多様化というのは肌で感じておられると思うんですよね。いろんな人がいろんなことを言う。片方の人のニーズに答えていると、片方からクレームが来るといようなことはもうたくさん起きていませんか。トロントはもともとそういう都市なんです。

その中で、私たちはコミュニティ・ワークというものを学んでいきたいと思ったのは、私も子育て支援をしている中で、お母さんたちのニーズがそれぞれに違う。前だったら、みんなでこんなことしたら楽しいねと言っても、やったら、そこそこ人が集まって、そこそこみんな楽しくできたのに、でも、本当は楽しいよねとやっても、だんだん、くだらないと言う人とか、それはもうやりたくないという人とか、いろんなお母さんたちがあらわれて、こういう人たちをどうやってつないでいったらいいんだろうかと思っていた時期だ

ったからなんですね。

私たちは、コミュニティ・ワーク実践研究会というのをつくって、マリオン・ボーゴさんというトロント大学でソーシャル・ワーカーをずっと長年養成しておられる方をお呼びしたりとか、それからビル・リーさんという私がとても尊敬しているコミュニティ・ワーカーを養成する方を招聘したりとかというようなことをして、それで子育て支援のトータルに、利用者支援と言われるものが今始まっていると思うんですけども、その利用者支援というもののベースになるところに、カナダのコミュニティ・ワークの考え方というのを持ち込んでいます。

これは私がやっている活動で310食堂というのを月1回、子供食堂のようなものなんですけれども、私は子供食堂は嫌いなので、310食堂という名前で、誰でも食堂を、子供無料で、大人300円でやっているんです。実はこれの発想のルーツもカナダにあって、ちょうどトロントからビル・リーさんを招聘した2005年のときに、彼が、子供の貧困の問題がカナダでもすごく大変なんだと、母子家庭で御飯を食べられない家族がいるんだというようなことをおっしゃっていて、それで市民団体が、じゃ、みんなで御飯を食べちゃえばいいよねと言ってコミュニティ・キッチンという活動を始めたんだと。州政府がそれはいいねと、ここがカナダのすてきなところとかいうか、見てきていただいたらいいと思うんですけども、市民活動でやっていて、いいねと思ったら、それいいねと言って、すぐ予算がつくと。それで、こういう活動はいいから——最近、日本もそんな感じになってきていますよね——予算がついて、オンタリオ州全体にコミュニティ・キッチンというのが広がろうとしているんだというところだったんです。私、子供食堂のブームがぱっと来たときに、何か嫌だなとすごく思って、もちろんきょう御飯が食べられない子供を救いたいという気持ちは、いいかげんな私にだってあります。だけれども、そういう子だけを集めて、そういう子だけに食べさせるって何か嫌だなと思っていたときに、カナダで言っていたコミュニティ・キッチンというのを思い出したんです。みんなで御飯をつくって食べようよと活動したら、お金があってもなくてもそこにやってきて、御飯を食べたい人が一緒に御飯を食べればいい。

当時、日本では食育ということがすごく言われていました。コミュニティ・キッチンの事業は、食べられない子供たちに御飯を提供することと、もう1つ、つくって食べる。みんなカナダのお母さんたちも忙しくなって、テイクアウトのものを食べることが多くて、おうちで料理をする家族が減ってきているというところに、その食をどうやって次

の世代に伝えていくのかといったときに、やっぱりそれはみんなで食べることだよ、食べてみるんだよということになって、給食にコミュニティ・キッチンという事業が広がって、みんなでただ御飯を食べるだけです。ただ御飯を食べるだけの事業が広がっているんだという話だったんです。では、私もそうしようと思って、私はそういうスタイルで最初から、子供食堂が要らない町をつくるというので、310食堂をやっているんですけども、ちょっと最近、湯浅誠さんとかが同じようなことを言うてくださるようになってきたので、広がっていくといいなと思って、この発想は、私は半分は、私たち日本人が昔というか、皆さんは私より若いからそんな経験ないかもしれないけれども、親戚のうちに集まると、実家みたいなところに行くと、見たことのない親戚が中で一緒に御飯を食べていて、あの人は誰？みたいな、どんどんお客さんが来るから、おかずが足りなくなったら、誰かが台所に立って何かつくってみたいな食事の風景って日本人は持っていたと思うんです。その再現と、それからカナダのコミュニティ・キッチンの発想をあわせて、私はこれをやってみている。そういう感じで、いろんな人がカナダというところからの発想を持ち込んで、日本流にアレンジをして何かするということがもう始まっていると私は思っています。

そんなふうにして、カナダとのおつき合いとか、やりとりはあったんですけども、ついに、ついに武田がトロント大学にもう1度、今度は客員教授で行くという話があって、住んでいるうちにという、ただ観光じゃなくて、住んでいるうちにだったらいろんなところを見てもらえるからというふうに言ってもらって、トロントに再度行くことになりました。

これはトロントの一番最初にできたと言われているドロップインです。子育て支援センターみたいなものです。これをよく見ておいてください。こんな感じで窓にちょっと入りやすい感じの表示があって、中に入るとこんな感じに棚があって、おもちゃが並んでいて、ここへ入ったらすぐに木のスペース、木がぼんとあって、その周りを本が囲ってあって、靴を脱いでごろっとできるようなスペースになっていて、親子で本が楽しめるようなスペースもあるんですけども、こんな感じで、ちょっと小ざれいじゃないですか。これはキッチンなんです。そのドロップインの中で、お母さんたち自分たちで持ってきたものをお湯を入れてつくったりとか、お茶を入れたりとかということが自由にできるスペースがあって、この上のほうは掲示板です。子育てに関する情報がこんな感じにたくさんあって、ここは資金を得るためにランチのサービスをしていました。ランチをみんなお母さん

たちに買ってもらうことで、ここの運営資金をつくるというスタイルでやっていたんですけども、すごくすてきな感じでしょう。これはデザイナーが入っているんですって。子供たちが育つ場だから、環境をきちんとつくるというので、デザイナーさんが入って、地下もあるんですけども、地下もすごくすてきな空間でした。こういう感じのドロップインが、日本の子育て支援を始めた、つどいの広場とかという発想を始めた人たちのモデルにしたものです。これは本当に一般的な親子さん向きのドロップインなんですけれども、でも、もう1つ、カナダでは新たな子育て支援が始まっていました。

これは、世界中から親子が集まってきているから、自分たちの写真を撮って、どこから来たのかという印をつけて壁に張るといようなことをしていて、この方がRoots Of Empathyをつくったときに、アシスタントでずっと伴走していた方なんですけれども、今は新たな子育て支援のプログラムの開発ということで、いろんなところに、トロント市内に何か所も同じようなプログラムを提供する子育て支援センターをつくっています。実はこれは学校の敷地内とか、学校に併設しているんですね。それもモデルスクールと言われる学校についているんです。

これも子育てに関する情報提供です。前にお見せしたドロップインと何か変わらないですか。私はトロントのことしかお話しできないので、トロントの話をするので、バンクーバーとはまた違うと思うので、比較するという視点で見えていただけると、すごくたくさんの方が得られると思います。前の情報の提示はこんな感じ、だけれども、新しいドロップインの情報の共有はこんな感じ、こういうものがたくさん張ってある。

モデルスクール併設のドロップインというのは、知的玩具、知育玩具みたいなものもたくさんあって、最初にお見せした、最初にトロントでできたドロップインですよといったところは、ノンプログラムで、いつお母さんが来て、いつ帰ってもオーケーという場所なんです。ただ、自由に行けるだけの場所なんです。だけれども、モデルスクール併設のドロップインは、時間によってプログラムがあります。読み聞かせの時間とか、英語の歌の時間とか、あとはおもちゃを使った遊びの時間とかというのもあって、そこにスタッフが常駐して伴奏するんです。何が違うのかというと、さっきの情報提供も、英語が読めない人にもわかるような提示をしているんです。新たなドロップインは、モデルスクールというのは、移民とか、貧困層の多い地区の学区をモデルスクールというふうにオンタリオが指定して、移民の人とか、貧困層に向けたサービスを手厚くするというので、新たな支援を始めているんですね。

そのドロップインでどうして読み聞かせの時間や英語の歌の時間があるかというのと、それを子供と一緒にお母さんが体験することで、移住してきたとかというようなお母さんたち、あとはベビーシッターさんが子供を連れてくるというケースもあるんです。ベビーシッターさんというのは、ほとんどが移民の方だったりとか、低所得層の人たちらしいんですね。なので、その人たちが英語をマスターできるように、ドロップインの中に子供のプログラムと言いながら、大人も学べるというような時間をわざとつくっている。日本は、ずっとカナダをモデルにノンプログラムということで、支援センターとかつどいの広場が特にそうですけれども、そういうふうに進めてきたけれども、もしかしたら、私たちの地区にもぼちぼちと外国籍の人たちが目につくようになっていて、海外にルーツを持つ子どもたちもふえてくるという現実を見たら、いつの日か、私たちの子育て支援にもそういうものが必要になるかもしれない。

これはモデルスクールというものなんですけれども、カナダの学校はプレスクールからあるので、こんな小さい子も、幼稚園みたいなところのクラスもあるんですね。モデルスクールと言われるところは、そういうわけで貧困層とか、移民の多い地区の学校が指定されているので、おやつ時間があって、おやつが出たりとか御飯が出たりするんですね。掲示物も、きょうは入れないでしまったかな、顔とか、名前とかを自分で書いてというような、どこから来て、どんな子なのかというのがわかるような仕掛けをしていたりとか、いろんなことをやっているんです。

私が行った年に、ちょうどシリアの難民を受け入れるという学校で、これはモデルスクールだけじゃないんですけれども、5年生のクラスを見せてもらったんですけれども、そのときは、そのシリアのお友達をどうやって自分たちの学校に迎え入れるかという話し合いをするというところに行きました。国がシリア難民の受け入れを決めて、その翌週には、オンタリオ教育研究所からシリア難民に関する資料が全小学校の先生たちが使える状態にウェブ上にアップされたそうです。それを使って、学校の先生たちは子供たちに、難民というのはどういう理由で生まれるのか、どうしてカナダに来なければならなかったのかというようなことを授業で、もちろんシリアという国がどこにあって、どういう国なのかということも含めて授業でやるそうです。

その中で、子供たち同士でも、家族によってはシリア難民受け入れ反対の家族もあるじゃないですか。だから、シリア難民を受け入れるのを賛成なのかとか、反対なのかとか、その理由はどうなのかというようなディベートをしたりとかというようなこともクラスの

中でやって、その上で、でも、そういうたくさん意見があるにもかかわらず、どうして政府は受け入れを決めたのかというようなことを子供たちに話すんだそうです。自分たちの学校にもシリアの子供たちが来るから、そのときに、どんなことに気をつけたらいい、どんなふうに迎え入れる準備をすればいいのかということをお子たちと一緒に考えて、一緒にその準備をするというふうに話されていました。それがすごく特徴的だなと。受け入れるということ、大人がこうだから、みんなこうしましょうというのではなくて、こういうことが政府で決まったけれども、その背景をお子たちと一緒に学び、お子たちと一緒に考え、それでその対応をみんなで作っていくということがすごくオンタリオの教育らしいなと私は感じて見ていました。

これはおまけですけども、アロースミススクールって、これは発達障害のお子たちに特化したスクールで、脳科学を用いてお子たちの可能性を引き出すというんじゃないけれども、脳のトレーニングをすることによって、ほかのお子たちと一緒に生活しやすくするためにトレーニングをするというところがあって、すごくお子たち1人1人のニーズに対応するというプログラムが用意されているということも1つ特徴的なこととして言えるんじゃないかなということ。皆さん、多分シュタイナーをごらんになる予定ですよ。シュタイナースクールって、世界的に見ると、私はたくさん学校を見ているわけじゃないからわからないんですけども、お金持ちのお子さんたちが通うことの多い学校らしいので、結構秩序ある学校なんですけれども、カナダの中にも本当にいろんな学校があります。

それと、すごく特徴的だなと思うのは、モデルスクールって日本で言ったら何を指しますか。モデルスクールと聞いたら、すごく最先端のいい教育をしている、どこにも誇れるような学校をイメージしませんか。モデルスクールを見学すると私は言われたので、いや、モデルスクールはいいです、普通のところと違ったぐらいなんですけれども、でも、一番困難な人たちにスポットを当てて、そこをモデルスクールとして、そこがよくなるような対策を考える。実はモデルスクールの学区に住みたいという日本人がすごくふえているんだそうです。それはなぜかといったら、手厚く子供を見てくれるからなんですって。モデルスクールは、最初幾つで始まったかちょっと忘れてしまったけれども、数をどんどんふやしていく方向で動いているというふうにそのときは聞いてきました。コミュニティ・ワークもそうなんですけれども、一番困難な困っている人のところにスポットを当てて、そこをみんなで解決していくということがあるというのが、私にとってのトロント

の魅力です。なので、トロントは、バルタン星人と共存を決めた町だと私は思っています。

いろいろな人が本当にたくさんいるし、英語を話せない人もたくさんいます。私はそんなに英語を話せないけれども、トロントだったら暮らせるかもしれないとすごく思います。チャイナタウンに行ったら、本当に片言の英語もわからないような中国人が住んでいます。でも、チャイナタウンにはたくさんの人たちが買い物に来て、すごく皆さん楽しそうに過ごしています。なぜなら、ケンジントンマーケットというところとチャイナタウンは物がすごく安いんです。だから、生活するには、チャイナタウンは閉じてチャイナタウンなわけじゃないです。チャイナタウンに行ったら、いろんなものが安くて、おいしいものがあるから、たくさんトロントの市民はチャイナタウンに来るんです。だから、そこに交流はあるけれども、でも、英語ができなくても暮らせる仕組みがそこにあって、誰にでも優しい町というのを実現しているなということを思いました。

これはNPO法人のWOOD GREENという団体なんですけれども、ここは何億もの州政府の予算を得て活動しているNPOです。メインにしているのは移民の生活の支援をしているんですけれども、これもすごくトロントらしいと私自身は思っています。住居の支援とか、就労支援とかもしているんですけれども、ここが何でそんなにお金を動かしているのかというと、たくさん政策提言をしているからなんです。リサーチをすごくメインに、中心的にやっています。移民のニーズとかというのを聞いたときに、例えばアンケートをとりましょうといっても、英語が読めませんとか、あと、聞いても、知らない人に本当のことは言いませんとか、多分日本人も困って、よっぽど困っていれば言うかもしれないけれども、できればおうちの中の困り事とかを知られたくないわという人が多かったです。そういうふうには文化によっては余り自分のことを語らないという人たちもいるということもあって、このWOOD GREENは、そのリサーチャーに移民を使っているんです。移民の人たちの中には、清掃の仕事をしている人たちでも、自国に戻れば医者だったりとか、自国では大学で教えていたりとか、スキルを持った人たちが移民の中にいるんだと彼らは言っていました。その人たちに、次の仕事につながるチャンスとしてWOOD GREENのリサーチャーを頼む。その地域に入って行って、自国の人たちに対してヒアリングをして、その人たちのニーズを拾ってくる。それを支援の政策としてまとめ上げて、政策提言というのをWOOD GREENがするんだけれども、そのリサーチャーとして働いたということは、1つのキャリアになるんだそうです。それで、今までは清掃の仕事でしか働け

なかった人が、企業に就職できるみたいなルートになっているらしくて、そういう形で就労支援というの、チャンスをつくるということをやっている団体でした。

とにかく当事者に聞くということがトロントで私がかかわっている人たちが言うことなんです。その困っている人、その本人に聞くんだということをしごく言われて、コミュニティ・ワークの基本もそうです。誰かが解決してあげるのではなくて、当事者が解決することを支援するのが支援者だと、解決してあげるのが支援者ではないということをしずっとコミュニティ・ワークを学んでいる間も言われてきましたけれども、カナダでこのWOOD GREENに行ったときにも同じようなことを言われました。そのリサーチャーも、ここには写っていない、一緒にインタビューに答えてくださった方も、実は私も移民でしたという方がこのWOOD GREENの正規のスタッフとして働いていたりして、あと最初に新たな子育て支援というので、プログラムを開発している、この人がRoots Of Empathyにもかかわってきていた、彼女も実は移民なんだと言っていました。移民で、自分が言葉ができなくて苦労したという経験があるから、だから、あのプログラムが必要だと思ってつくったんだと言っていました。彼女は、民間の団体としてプログラムを展開していたんですけれども、それが州政府の何かのプロジェクトに参加することになって、トロント全体にそれが広がったということを私が行ったとき、2年前にそういう話をされていました。なので、今どうなっているのかわからないんですけれども、モデルスクールが今どういうふう展開されているのかもわからないし、コミュニティ・キッチンがその後、どういうふうになったのかもわからないんですけれども、そうやって次々に必要なことを市民と一緒に形にしていくという姿勢が常にトロントにあるということは、私がすごく魅力を感じるころです。

トロントの子育て支援の基盤になっていることは、多文化共生ということなんです。みんな違うということから出発して、みんな生きていくためにどうするかということを考えていくということ、あとは権利擁護ということが言われています。権利擁護ってすごく難しいけれども、その人が尊厳を守られるということだと思っんです。だから、私は子供食堂で、あなたたちは貧しいから、みんな貧しい人たちだけで御飯を食べましょうというのにちょっと抵抗があるのはそのあたりなんです。

実は310食堂、最初は子供も無料じゃなかったんです。子供は100円だったんです。そんな施すみたいなのは嫌だよねとみんなが言って、100円ということにしたんですね。でも、そうしたら、ちょっと気になるお子さんがスタッフと出会って、声をかけたんです。

こういうのがあるからいらっしやいて。そうしたら、子供100円と書かれていて、日本ですよ。100円だから、100円と書いてあるから行かないとまず言われたんです。小学校3年生ぐらいの子ですよ。100円と書いてあるから、今ないと言われて、でも、お手伝いしたら、100円じゃなくて、ただでもいいんだよとその子にうちのスタッフが言ったら、でも、行かないって。でも、遊ぶこともできるよって言ったら、遊ぶだけだったら行ってやってもいいと言われて、どうしても100円ないから食べないと言われたんですよ。子供も、自分がみんなができること、みんなが100円払えることが払えないということが嫌だったりとか、自分だけが貧しいからと見られるのが嫌だったりとか、それはすごく単純なことだけれども、その人の尊厳を傷つけるんじゃないかなと思うんですね。だから、多分カナダは食べられない子供がいるという問題意識に対して、コミュニティ・キッチンというみんなで食べようというやり方でカバーしていこうという動きができたんだろうなと思います。

私たちがやっているコミュニティ・ワークもソーシャル・ワークもそうですけれども、ソーシャル・ワークやコミュニティ・ワークの目標は、エンパワメントと社会正義ということなんです。エンパワメントというのは、1人1人が私には力があると思えること。だから、移民の人たちに対して何かをやってあげるんじゃなくて、移民の人たち1人1人に話を聞いて、何が必要なのか、何に困っているのか、どうしたいのかを聞いて、それを形にまとめていく。それで、そこに移民の人たち自身がかかわって、自分たちの問題を解決していけるんだという、そこに支援をしていくというところが、多分そこにいる人たち1人1人が私は無力ではない、私には力があるんだと感じられることになるんじゃないかな、それが本当の意味で人をエンパワするという事なんじゃないかと思っています。

社会正義というのは正しいことを押しつけることではありません。そこに集まった人たちが今何が適正なのかということをもみんなで考えて、みんなで決めるということなんです。いろんなところでそれは——私はちょうどクリスマスのシーズン、クリスマス前に行ったんですね。なので、それをすごく感じることができました。たくさんの人たちがいろんなところで寄附を募っているんです、思い思いに。ぜひ視察に行ったら、張られているポスターとか、流れているCMとか、そういうものを必ず見てくださいね。私は武田に、まず電車の中に張ってあるポスターを見ろと言われたんです。ぜひ見てきてください。何が書かれているのか、日本と何が違うのか。

その背景には、移民の社会だということとか、多様な文化と価値観がある。だから、本

当に私たちの社会より困った社会だということでもあるんですよね。なかなか単純にこうしましよとって、そうならない社会だということがあるんだと思いますけれども、あと、移民が多いというので、最初から繰り返しているように、貧困の問題は常に抱えているということ。そこから発想して、みんなで生きる社会というのを常に模索している都市だなどと思います。

実は私、そういうふうに見察に行ったんですけれども、武田信子と大げんかになりました、2日間放り出されるという経験をしたんです。なぜかという、彼女が見てほしいところのプログラムをざっとつくっていたんです。CNタワーに行って、CNタワーのところで食事をしてとか、トロントに来たらみんなやるでしょうというコースを用意していたにもかかわらず、私が行きたくないと言ったから、それでちょっとね。あとそれと、私はそんなに海外旅行になれているわけでもないのに、シカゴ乗り継ぎのカナダというちょっと恐ろしい便で行ってしまって、というのも、ぎりぎりまで航空券をとらなかった自分が悪いんですけれども、まさかの乗り継ぎ便に乗りおくれるというところからカナダ行きがスタートしているので——乗り継ぎ便に乗りおくれるのも大丈夫です。次の便に乗せてもらえますとか言うとも怒られちゃう。2日間、英語もできない私がトロントの町に放り出されるという経験をして、それで、お願いだから、行っちゃいけないところだけ教えてくれと、やっちゃいけないこと、行っちゃいけない場所だけ教えてくれと言ったら、そんなものはないと言われて、ただ、バッグの置き引きとか、そういうものは軽犯罪はあるので、そうはいっても海外ですから、日本と同じように生活すると、ちょっとトラブルが起きちゃうかもしれないんですけれども、何で私がそう言ったかという、私は電車とバスに乗りたかったんです。ただ、ずっと電車とバスに乗って、どんな人たちがいて、どんな町があつて、ちょっとでもそこに暮らしている人たちの暮らしをのぞきたかったんですね。多分それも彼女は理解してくれて、上手に放り出してくれたんだと思うんですけれども、ひたすら電車に乗って、ガイドブックの小さな記事、大体大きいところは観光地なので、小さな記事を頼りにいろんなところに行って、でも、ここだけは行かないとなと思ったのは、ミュージアムと美術館だけは行こうと思ってたから、そこは行ったんですけれども、でも、何せ土地勘もなく、英語もできなくという私なので、うろうろしながら行動することができました。それはすごくいい経験でした。困っていると、結構みんな声をかけてくれます。案内してくれたりとか、ガイドブックを出せと言われて、ガイドブックにラインを引いてくれたりとか、結構そんな町です。

これはミュージアムなんですけれども、Loyal Ontario museumももし機会があったらぜひお勧めです。展示が、ちょうどウイークデーに行ったので、子供たちがたくさん学校から来ていて、みんなわいわいおしゃべりしながらいろんなものを見ていて、触れられる展示とか、体験できる展示、これは日本でも最近ふえてきているけれども、そういうものがあって、あと床にクジラのサイズにテープでクジラが描いてあったりとか、すごく楽しいので、それとどこへ行っても写真がオーケーなんです。なので、写真が撮れるし、あと展示がジャンル分けにマニアックに展示してあるんじゃないじゃなくて、結構ざっくりしていて、この時代の暮らしみたいな、この時代のお部屋みたいな感じの展示の仕方をされていたりするんです。こういう場所はすごくたくさん学校の子供たちが何度も何度も自由に遊びに行くと聞いています。美術館も、美術の時間を学校でやるんじゃないなくて、美術館で美術の授業をするということを知っていて、子供がすごくたくさんいるんですね。ギャラリーもそうです。ギャラリーも写真はオーケーだし、話をしながら鑑賞できるし、展示のスタイルが違うので、あとはMuseum shopはお土産物に最適です。なので、ぜひ時間があったら行ってみてください。わからなくても、ガイドブックを持っていたら、誰かが助けてくれます。

まずは、私のお勧めです。町を歩きましょう。どうしてもスケジュールがあると、ホテルで休んで、みんなで御飯を食べてとなるけれども、ちょっとでもいいから時間があれば1人とか、2人とか、少人数で町を歩いてみてください。あとスーパーマーケットに行ってみてください。スーパーマーケットに行くと、その社会の暮らしみたいなのが透けて見えるんですね。バンクーバーはわからないんですけども、トロントはすごく日本に近いなという気がしました。いろんな国のいろんなものがあります。南米のものがすごくたくさんあるので、ちょっと変わった——皆さんが行くのはいつでしたっけ。8月？

○—— 6月です。

6月ですか。6月だったら、きっとおいしい果物がたくさん並んでいると思います。

電車とかバスとかにぜひ乗れるのであれば、乗ってみてください。私は新たなパワポをつくったのには入れていたんですけども、トロントの中ってすごくシンプルなんです。メトロ1本しかないし、それからストリートで全部わかるし、ぜひマップをもらってください。そこに数字が書いてあるんです。さすが移民の国なので、英語を読めなくても、数字が読めて、行きたいところがわかれば、その数字を頼りにバスに乗って、1人でも行きたいところに行けるようになっているんですね。あと、困っているとすごく声をかけてく

れます。怒られちゃったりもするんですけども、私はメトロで駅員さんに怒られて、何回も出入り自由なんですけれども、乗った駅でおりたら、もう入れないんですけども、乗った駅でおりたのに入って言われたんですけども、間違っただけと言われたんですけども、でも、そんな感じで必要なことを言ってくれるし、すごくみんなが声をかけてくれる町でした。なので、ぜひトロントをうろうろしてみてください。うろうろにお勧めな町です。

最後に、子供の権利擁護について。これは日本では余りアドボカシー事務所とかってないですよ。子供の権利擁護に関するルールが、アドボカシー事務所というのがトロントにはあって、それはオンタリオの議会の直下の機関なんですって。議会に直接くっついていて、それでこの方はカナダで中心的なアドボカシーのアーウィン・エルマンという、みんなの大好きアーウィンというおじさんなんですけれども、この人たちが子供たち、それも力を持たされていない子供、社会的養育の環境にある子供だったりとか、非行の問題を抱えた子供だったりとか、困難な環境にいる子供たちに声をかけて、子供たちの話を聞いて、その子供たちの声をまとめて議会に届けるということが彼らの仕事です。子供の政策は子供に聞かなければわからないということをカナダの人たちはみんな言います。子供の教育も保育も、それから子供の福祉も、その当事者である子供たちに聞かなければわからないんだって言うんですね。

実は昨年12月に来日していただきました。彼はもう5度目ぐらい来日しているんですけども、児童養護施設とか、そういう子供の社会的養育にかかわる人たち、あとは社会福祉士の方たちとか、そういう方たちが招聘して勉強会をしたりしています。12月3日には千葉にいらして、お話をしていただきました。

あとはSOS子どもの村福岡という結構精神的なことを、社会的養育の施設、児童養護施設みたいなものと里親の間みたいな施設を運営しているところなんですけれども、そこもアーウィンにつながって、勉強会なんかを通じて、なので、児童福祉の世界にもカナダというのはかなり影響を与えているなと思います。ただ、彼が私たちが日本に来てねと言ったときに、私のオフィスにはもう何百人も日本人が知らずに来たんだよと言って、それで日本は何か変わったのかと、子供の権利は守られるようになったのか、子供の声が聞かれているのかとおっしゃったんです。視察をするということはそういうことなんだなと。私は不用意に武田さんがトロント大学にいるという理由だけで、学校のモデルスクールを見たりとか、ドロップインを見たりとか、視察ができるかなと行ってしまったけれ

ども、見たという責任があるんだなとすごく昨年末に感じさせられて、やっぱりしっかり見て、見たことを私たちも社会にどう生かすのかということを考えていただけるとうれしいなと思って、ちょっとだけ御紹介しました。

私は、アドボカシー事務所みたいなものを、子供の権利擁護に関するそういうセッションが日本にできたらいいなと今は思っていて、何かそういうことをやればいいなとは思っています。

「よい旅を！」ということで、これは皆さんが行かれるファーマーズマーケット、セント・ジェイコブスに行かれますよね。多分日程表にあったので、皆さん行かれます。こんな感じで、昔ながらのスタイルで生活している人たちの村の近くにファーマーズマーケットがあって、彼らがつくったメープルシロップとかキャンディーとか、あとはハムとかソーセージとか、いろんなカナダのものを売っているとか、季節の野菜がたくさん出ていたりとかするんですけども、メノナイトの人たちもすごくたくさんいろんな方がいらっしゃるんです。この人たちは観光のためにやっているわけではないので、写真を撮るのもちゃんと声をかけてから撮ってくださいねとそこの方にも言われたんですけども、嫌だという方もいますけれども、結構皆さんいいよと言って写真を撮らせていただけます。この人たちは本当に昔ながらの生活を守って、電気もなく、馬車で暮らしているという御家族もいれば、こういうスタイルで暮らしているんだけど、すごい最新の立派な車にばんと乗ってマーケットに来る人もいて、その同じメノナイトの人たちでもいろんな個人の選択が許されているんだなと、こういうメノナイトの地区だからといって伝統的な生活をしなきゃいけないというものでもないかなと私はそこでも感じて、すごく1人1人が大切にされて、それからみんなが自分の生き方みたいなものをしっかりとつくっている国なんだなと思いました。

カナダは広いので、州ごとに学校とかのシステムが違ったりするんですね。なので、ぜひ比較して見ていただければいいなと。多分バンクーバーとトロントは違うと思うので、それも比較していただけるといいなと思います。

あと、保育園とかというのが、カナダは教育は無料なんですけれども、保育園で結構高い保育園で、デイケアと言われている保育園なんかがあるらしいんですけれども、そこは結構高いらしいんですね。だから、どこにどんなふうにお金が使われているのかというようなことも聞いたほうがいいかなと思います。皆さん、いい旅を楽しんでいただければと思います。

では、ありがとうございました。

朝はウォーミングアップされたんですね。では、最後に2つ、農業の話とか、私のまとまらない話で申しわけないんですけども、こういう話を聞いて、感想とか、自分が疑問に思ったこととか、さっきの4人でちょっとシェアする時間をとりませんか。聞き取りだけではつまらないというか、しゃべりたくないですか。5分ぐらいいかがでしょうか。

何となく話ができましたでしょうか。マスタードの御質問をいただいたんですけども、私はメーカーをちゃんと覚えていなくて、後で画像を私のフェイスブックに上げます。ほかにも何か御要望があればやっておきますので。

ぜひ地元にある子育て支援というものは何があるのかということをチェックして、あとは地元の農業の状況とか、地元のことを知って、比較できる状態で行かれるのをお勧めします。

質問1

質問者 カナダでは子育てするときは夫婦は協力してするものなののでしょうか。日本だとやっぱりまだまだ女性がメインな風潮ですが。

横須賀 まだまだ女性がという話はカナダでも実はあって、女性の負担があるという話もちょっと聞いています。だけれども、働いている女性も多いので、ベビーシッターを利用したりとか、デイケアと言われる保育園みたいなところに預けたりとかという感じで皆さんお仕事をされているみたいですけども、だから、完全に北欧のように男性も女性も一緒みたいな感じでもない、就労環境も女性のほうが賃金が安いという話もちらっとあったりとか、これは私は確認していないので、1回はぜひ確認してきてください。私の身の回りではそういう話はちょっと出ています。

質問者 カナダの社会全体として子供を育てましようみたいなのはあるんですか。

横須賀 はい。

質問者 トロントは結構それが多いいみたいなんですか。

横須賀 カナダもみんな子供を育てましようというのがあって、それは町のつくりをまず、だから、町をうろついてもらうといいんですけども、町のつくりが違うんですね。道路とかに面せずに、道路、直、家みたいな状況ではないので、だから、子供が遊ぶスペースとかというものもあるし、それから私がホームステイ時にお邪魔した地区は、結構御近所のおつき合いがあったりとかということも聞いてはいます

けれども、でも、実際、日本人の方とかで暮らしている方たちが、例えばトロントでソーシャル・ワーク、留学みたいに検索すると、トロントで暮らして、子供を育てながらソーシャル・ワークの勉強をされている方が、トロントの暮らしとかを上げているので、そういうところでチェックしていただくのが確実かなと思います。ただ、本当に困っていたら声をかけてくれるという社会でもあるので、おうちの中で1人で泣いて子育てをするみたいな環境ではない気がします。

質問2

質問者 先ほどのお話の中で、まず地元の子育て支援ですとか、日本の自分たちのことを確認してから出向かれたほうがというお話があったことに関連してなんですけれども、講義の冒頭のほうで、地域で子育てを支え合う本ですとか、社会で子育てをする本の御紹介がまずありましたが、かつて、もっとそれより、その本が紹介される前は、子供だけではなくて、障害を持っている方も、高齢者の方も、地域で支え合う社会が日本にあったと言われていることが多いのですが、なぜ2000年近くになってそのような本が出版されるようになり、その考え方を強調するというか、改めて確認するような動きとなったのかというところをどう考えていらっしゃるかというのを1点お聞きしたいです。

横須賀 ありがとうございます。私は、かつての日本の社会がよかったと思っているわけではないんですね。それはすごく窮屈でつらいから、みんな自分たちの家族だけで暮らしたほうが、自由だし、気楽でいいと思って、核家族も進んだし、御近所のつき合いも、つまらない文句を言われたくないとか、干渉されたくないといって、私たちは整理してきたというところがあるんだと思うんです。だから、かつての日本に戻ればいいとは私は思っていないんですね。ただ、私たちは、もとをただせば、狩猟、採集民族だったときから、人類って1家族だけで子供を育てた時代はないんですよ。いつもお母さんとお父さんと子供だけでは子供を育てた経験で私たちはなくて、そういう動物ではないから、だから、それには無理があるんだろうと思います。窮屈で嫌だったから、それを整理してなくしてきたけれども、でも、全く自由になったら本当に幸せになれるかといったら、そうじゃないと気づいたんだと思うんですね。それで、新たなつながり方を探していくという流れになってきて、それで、社会で子供を育てるとか、地域で子供を育てるということに再度スポットが当たったんだと思うんです。

でも、また、かつてのような状況に戻っても、私は意味がないとっていて、カナダから何を私が学んだかといったら、寛容なんですね。違うものを受け入れるということ。私とは考え方が違う、やり方も違う、大切なものも違う、正しさも違う、でも、そういう人とどうやって一緒に暮らしていくのかって、それは、コミュニティ・ワークは1人1人に話を聞くというところから始めると言われていて、組織化するには、組織化しようとする人たち全ての話を、1人1人の話を聞くんだという、そこから始まると言われているんですけども、そういう寛容な対話、批判するのではなく、拒絶するのでもなく、あるいは全く同調するのでもなく、お互いを知り合おうとするというところから結び直すということが、私たちの社会がまたかつてのようなつながりを取り戻すときに必要なだろうと私は思っています。

質問者 今質問に対するお話をお聞きしまして、私は子育て支援の係ではないんですが、子育て支援の担当から聞いたエピソードを思い出しまして、子育て支援センターに相談に来る若いお母さんがいらっしゃって、子育ての仕方とか悩みがあるということであらっしゃっていたそうなんですけれども、その方には近所に実母が住んでいて、義母も近くに住んでいてという環境だったそうなんです。なので、そういうことから、新たなつながりというか、かつての近所、家族のつながりではなくて、新たなやはり支える人とか、仕組みとかが必要なんだということが今のやりとりで気づいたというか、何かそういう新しい気づきを今回のカナダの視察でも得られればなと思いました。感想になってしまいましたが。

横須賀 ありがとうございます。



「カナダの観光研究・ケベック州を中心に」

立教大学観光研究所研究員 羽生 敦子 氏

【講師略歴】

1964 年生まれ

1987 年白百合女子大学文学部フランス文学科卒業後、フランス留学（語学習得および外国人のためのフランス語教育法）帰国後は、(株)日本ミシュランでの語学研修講師、付属のフランス人学校での語学講師や栃木県立および私立高校でのフランス語講師を経て、2009 年に立教大学大学院観光学研究科に入学、2011 年修士号「観光学」、2014 年博士「観光学」を取得。現在は、立教大学観光学研究員の他に、立教大学、日本女子大学、白百合女子大学、首都大学東京に於いて、兼任講師としてフランス語、フランス語圏社会、観光学（ツーリズム論）などを担当している。

所属学会：日本観光研究学会、日本ケベック学会、国際ケベック学会、日仏歴史学会

カナダの観光研究・ケベック州を中心に

立教大学観光研究所研究員 羽生 敦子 氏

羽生と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。本日は、申しわけないのですけれども、ケベック州が中心となってしまいますが、多分カナダ全体を考えるとときの参考になると思うので、ぜひ生かしてください。

まずは、パワーポイントを見ていただく前に、長い文章の資料があると思うのですけれども、見ていただいて、まずは、少しカナダの歴史についてお話ししたいと思います。

カナダという国名ですけれども、もともと先住民の言葉なのです。「カナタ」といって「そこ」とか「あそこの落」という意味だったらしいのですけれども、それが国名になっているということがとてもおもしろいと思います。それから、オタワ、皆さんが行かれるところですが、オタワ族という先住民族の名前です。それから、トロントというのもヒューロン族の言葉だったらしくて、このように上げたら切りがないのですけれども、カナダでは先住民族の言葉を語源とした土地の名前とかが多いです。これは、アメリカと大きな違いがあって、アメリカはどちらかというと言潰していったほうなんですけれども、カナダはそうではなくて、先住民との共存を前提化して、今までも進んでいるところなんです。例えば、ナイアガラに行ってもわかるらしいのですけれども、アメリカ側だとモヒカン族とか毛皮のもの、インディアンがつくった、先住民族のつくったものは、お土産屋さんではほとんどだめらしいんですね。だけれども、カナダはそういうものがお土産としてあります。そこがやはりアメリカとカナダとの大きな違いなのかなという気が、今、しています。

このように、カナダというとなんかどうしてもアメリカのお隣の国と違って、英語圏ということが多分皆さんの頭の中にあると思うのですけれども、実は、フランスとの歴史のほうが非常に重要というか、カナダの始まりとして考えてほしいんですね。

まず、15世紀ですけれども、イギリス王に仕えたイタリア人、ヴェニスの人なんですけれども、カナダというか、ニューファンドランド島に到達します。その後に、16世紀なんですけれども、今度はフランス王の命令によってイタリア人がニューファンドランド島に到着します。ここで、フランス王の国旗を立ててしまう、十字架を立ててしまうんです。しかしながら、カナダの創始者と呼ばれるのは、1534年にセント・ローレンス湾までの航

海を行ったジャック・カルチエという人です。この人がジャック・カルチエ・カナダという名前をつけた人なんですけれども、その後、全部で3回にわたり彼は航海します。

第1回航海の際の先住民族との出会いが旅行記で語られるんですけれども、おもしろいのは、第1回の後に先住民族の首長さん2人をフランスに連れて帰ってしまうんですね。1年後に戻ってくるからとかと言って、嘘だと思ったら1年後に戻ることができて、しかもその2人を連れて帰ります。未知の国だったカナダというか、セント・ローレンス湾までは行くんですけれども奥に入っていけないんです。セント・ローレンス湾までは行くんですけれども、このあと入っていけないんですね、未知過ぎてしまって。何がいるかわからないということで、全ての航海家、航海に行った人が嫌がったところです。ところが、2人の先住民族の息子を連れていったおかげでガイドさんの役をしてもらえるんです。その2人が、今まではセント・ローレンス湾までだったところから、さかのぼっていくことができました。そこから、モントリオールとかケベックシティの歴史が始まるわけです。

ジャック・カルチエという人の貢献とはどういうことかということ、やっぱり旅行記を残したことだと思うんです。実はその前に行っている人はいるんですが、この旅行記があったために、彼を創始者としています。またその5年後に3回目の航海をします。そこでも先住民族との出会い、交流がフランスの特徴というか、ほかの国の人たちは先住民との異文化交流をしようとはしなかったんですけれども、このジャック・カルチエの一行は先住民族と交流をしたので、その後のフランス植民地となる基礎をつくっていったわけです。その数年後、1608年なんですけれども、今度は、やはりフランス人なんですけれどもサミュエル・ド・シャンプランという人が、このセント・ローレンス川をさかのぼっていき、ケベック州に要塞を建ててしまいます。そこで、フランスの初の北米植民地Nouvelle France、ニューフランスが建設されます。

このように、カナダの歴史というのはフランス人から始まっています。現在では、ケベック州だけが異質な「他者カナダ」であるような印象を受けるんですけれども、実はケベック州こそがカナダの始まりと言っていいと思います。

ではなぜ、英語系カナダの印象がそんなに強いのかということなんですけれども、それは、18世紀になりますが、フレンチ＝インディアン戦争というものがあまして、フランスがイギリスに負けるんです。負けてしまって、後で御紹介しますが、今のアメリカのルイジアナ州まで影響があったニューフランスという植民地が、ケベック州以外はほぼとられてしまいます。ということは、英語系になってしまうということなんですけれど

も、その後に、1763年パリ協定というものが戦争の中で締結されまして、北米にあったフランスの領土をほとんど失ってしまいます。その結果、帰国するフランス人もいたし、カナダに残るフランス人もいました。それから、先ほども言いましたように、ルイジアナ州までも広がっていたわけなので、ルイジアナ州に残るフランス人もいましたし、アカディ地方というのがありますけれども、アカディに残ったフランス人とかと交流して、今でいうケジャン文化。ジャンバラヤとか皆さん御存じですか、あの料理。あれはケジャン文化とって、フレンチ文化が入っています。フレンチ文化と土着の文化が入っているのをケジャン文化とって、このようなところにも残っています。

恐らく、ルイジアナ州の地方名を見るとフランス語が多いのは、そのときの影響です。

このように、ほとんど全ての領土を失ってしまったフランス人、仏系カナダ人ですけれども、救われたことは、言語がほぼ保持されたんです。それから、フランス民法というものが保持されたおかげで、細々ながらフランス系として生きていくことができました。それ以降は、共存というか、支配階級と被支配階級にしかすぎないんですけれども、長い間、イギリス系カナダ人が支配者としてカナダにいます。フランス系の方は、細々と20世紀中盤まで生きていくんです。

多分、初めて聞かれると思うんですけども、1960年代にケベック州では「静かな革命」というものがあつたんです。これは、革命、リボルーションというとすごく武力的な感じがしますが、意識改革であつて、今まで被支配者階級として細々と生きてきたフランス系の人たちが、自分たちはこんなのではないんだ、ちゃんとフランス系の文化としてもちょっと威張って生きていってもいいのではないかということで、いろいろな面で改革が起こります。宗教もそうなんです。それ以前は、フランス系はカトリックなので、カトリックにがじがじに固められて生きてきた人たちなんです。考え方も何百年も変わらず、自分たちは戦争に負けた人間だということでもずっと小さくなって生きてきたんですけれども、そこで意識改革が起こります。カトリックからも解放されていきます。それを体現する大きなイベントが60年代にあつて、1つが万博の開催です。御存じですか、モントリオール万国博覧会。それから、1976年のオリンピックの開催があります。多分、オリンピックと万博の開催で、モントリオールとかケベックという言葉がワールドワイドに広がったんだと思います。

それから、ケベックの人たちも、仏系カナダ人というよりもケベコワ——ケベックの人という意味なんですけれども、ケベコワとして生きていくことを決心する、自信を持って

生きていくことになります。

このようなものが現代に至るカナダ、ケベック州のほうの歴史です。

英系カナダ人の一例ですけれども、オンタリオ州、首都はオタワで、トロントが最大の商業都市です。ここがナイアガラというカナダ最大の観光資源があるところです。トロントはカナダで一番大きな商業都市ということなので、首都ではないんですけれども、旅行先としては一番ポピュラーなところだと思います。それから、直行便が飛ぶのはトロントが一番多いので、今御紹介したモントリオールとかは、今までトロントで乗りかえが必要でした。

それから、イギリス側ですけれども、勝ったものの、今度はアメリカとの問題があって、アメリカ独立戦争後は、イギリス側の人、つまり王党派の人たちの多くがトロントにやってきます。それから、土地を求め多くのアメリカ人も移住してきました。1791年に、セント・ローレンス川の上流をアップパーカナダ、多分今でもこういう文章がどこかにあると思うんですけれども、下流地域をローワーカナダと言うようになります。このアップパーカナダの首都がトロントと制定されました。1812年になると、第二次アメリカ独立戦争があって、戦場がアップパーカナダになります。アップパーカナダ、トロントのほうにいるアメリカ人も英系カナダ人とともにカナダを守る。今度アメリカ人が入ってくるんですけれども、結構大量に入ってきてしまうので、今度はアップパーカナダがアメリカ化してしまうのではないかということで、危惧がかなりあったそうです。1840年になるとカナダに自治が与えられます。1967年になると3つの植民地がオタワ連邦政府の下に統合して、「ドミニオン・オブ・カナダ」といって、これまでの英系カナダ人、スコットランド移民、アイルランド移民、これらはみんなプロテスタントの人たちなので、プロテスタントの移民社会が形成されていきます。他者は、カトリックの仏系カナダ人とアメリカ合衆国ということです。「イギリス帝国の忠誠な長女」としてカナダは発展してきました。

カナダの独立なんですけれども、1867年に今言った「ドミニオン・オブ・カナダ」ができましたけれども、半独立国家です。内政自治のある植民地という立場だったわけで、完全独立と書いてしまいましたけれども、これは主権国家としてということです。独立はまだしていませんよね。エリザベス女王が一番上にいてということなので、一応、主権国家として認められて首相を持つようになるのが1982年なんですけれども、こう言われるのはカナダ憲法ができたからです。「アクト・オブ・カナダ」というんですけれども、カナダ憲法が1982年にできて、これをもって主権国家となったとされています。

移民国家カナダというのが皆さんのイメージだと思うんですけども、トロントでも住民の半数以上が移民とされています。エスニックの数も80以上なので、かなり細かい数の分け方かと思えますけれども、いろいろなエスニックの人がいるということです。チャイナタウンを初めとして、コリアタウンとかリトルイタリー、ポーランドタウンとかギリシャタウンなどがあり、多国籍グルメを観光として楽しめますという感じでしょうか。そういうグルメから移民文化を見ることもできると思います。あとは、オンタリオ美術館とかセント・ローレンスマーケットなどが人気のスポットというふうにガイドブックなんかでは紹介されています。

あと、皆様の行くバンクーバーですけども、バンクーバーはかなり西です。対極と言っていると思うんですけども、バンクーバーは、カナダで一番大きい港の都市だそうです。林業とか製糸業、鋳業、バイオテクノロジー、ソフトウェアなど、新しい産業都市でもあると言われていて、ここにAIと書きましたけれども、モントリオールもそうなんですけど、AIとかゲーム産業とかも盛んで、これはカナダの都市全てに言えるのかもしれませんが。最近の傾向としては、移民の国家なんですけれども、東アジアからの移民がすごく多いです。なので、バンクーバーも、最近ではアジアンバンクーバーと表現されるそうです。バンフで客死した新渡戸稲造記念公園などもあるそうなので、お時間があれば行ってみるといいと思います。

それから、3枚目になりますけれども、これはフランスの雑誌なんですけど、その雑誌がバンクーバーで見るべきものみたいなことをちょっと特集されていたので、その幾つかを書いてみました。チャイナタウンが、サンフランシスコ、ニューヨークに続き北米で第3番目に大きいそうです。映画のロケ地としてかなり有名らしいです。私も余り考えたことがなかったんですけども、北米のハリウッドと言われることもあって、映画撮影地見学ツアーなどもあるそうです。あとはビールがすごく有名で、最近では地ビールがすごくはやっているそうです。ここに書いているのはビールの名前なんですけれども、よかったら皆さん探して飲んでみてください。バンクーバーではブルワリーツアーとかもあるそうなので、時間があったらですけど。あと、警察美術館、バンクーバーポリスミュージアムというものがあって、これを結構お勧めしていましたけれども、汚職の歴史とかアヘンのネットワークとか、禁酒法時代のネットワークの歴史を知ることができるそうです。あとは、アイランドの観光とかが載っていましたが、これらは日本の観光ガイドに載っていなかったなと思ってちょっと御紹介させていただきました。

カナダを観光だけで見ると、キーワードは多文化、移民、先住民、自然でしょうか。これはカナダ全体に言えることだと思うので、それを思いながら観光を意識していただけたらと思います。

パワーポイントに入りますけれども、済みませんがケベック州の話になってしまいます。モントリオールの位置はさっき確認したので何となくわかると思いますけれども、東側です。ニューヨークのもっと北に行ったほうですけれども、これが合衆国です。この川を境にちょっと行くともうアメリカになってしまう地域なんですけれども、これがセント・ローレンス川です。先ほど、カナダで一番大きな都市はトロントと言いましたけれども、モントリオールが第2に大きいところです。第3の都市がバンクーバーなので、トロント1番、モントリオール2番、バンクーバーが第3番と覚えていただければいいかと思います。人口がもともと日本と比べると少ないんですけれども、最大の都市といっても600万人ぐらい。モントリオールが400万人ぐらい。バンクーバーが250万人ぐらいなので、全体でも3600万人とか3800万人と、4000万人以下の人口です。これは確認ということでもいいと思います。

まず、キーワードなんですけれども、ケベック州、モントリオール——フランス語ではモンREALというんですけれども、フランス語、市内と旧市街ということを書きました。面積は日本の4.4倍あって、ケベックというのももともと先住民の言葉で、川幅の狭くなる場所という意味です。あと、フランス的事実とよく言われるんですけれども、やはりフランス人が興したところだからなんです。先ほど紹介したジャック・カルチエがいて、それからサミュエル、歴史的には大きな2人です。あとセント・ローレンス川、フランス語ではル・サン・ローランといいますけれども、それからフランスの植民地ヌーヴェル・フランス、ニューフランスのほうがわかりやすいですかね。

実は、先ほど言った「静かな革命」から去年は50周年だったんです。2017年はそれ以外にもいろいろなイベントが重なり年だったらしくて、これはモントリオールの市役所の前なんですけれども、いろいろな記念のお花が飾られていました。カナダ連邦としては150周年、それからモントリオール375年——先住民との交流の歴史が始まって375年、万博67の50周年といっって、全てが一気に飾られていました。

この人がジャック・カルチエという人です。多分皆さん全然御存じないと思うんですけれども、この人はケベック州の観光資源となっているような人物だと思います。この人物像も19世紀になってつくられた感じですか。実は、ジャック・カルチエという人は長い間忘

れられていたんです。だけれども、1960年代の「静かな革命」のときに、ケベックのナショナリティーではないですけども、ナショナリズム高揚のためにある一人が必要だったんです。それでジャック・カルチエを持ち上げて、その画像はちょっとわからないので、いろいろな資料から組み重ねてつくられたこのイメージの人です。この橋も、つくられたときはもともとジャック・カルチエ橋ではなかったんですけども、今ではジャック・カルチエ・ブリッジと書いてありまして、セント・ローレンス川の一番大きな橋です。この人の名がついた広場とか公園とかがすごく多いです。知っている、ここかと思うんですけども、知らない、全然何のことはない、ただの橋になってしまうんですけども、ジャック・カルチエという人を覚えておいてください。

最近、ケベック州は日本人誘致をすごくしています。いろいろ理由を考えてみたいんですけども、フランス語学習のための語学留学先として、最近多いです。なぜかといったら、皆さんも研修先がカナダになったのは多分そういう理由だと思いますけれども、ヨーロッパはテロが最近多いです。特に学生相手だと何があるかわからないということがあるので、カナダだったら安心ではないかということで、フランス語だったらケベック、しかも英語も学べるので、2カ国語学べるよということで、割とこのケベック州は推奨されているところなんです。

それから、語学以外にも可能性があって、実はモントリオール大学は研究が盛んなんです。私も昨年行ったときに、ちょっとやっていたんですけども、モントリオール大学と東京大学とか日本の企業が共同研究をしていて、そこで新しい住宅がいろいろ提案されていました。フランスではないのかと思いがちなんですけども、フランスというのは歴史的建造物が多くて、学生のレベルだと、新しい建築物はなかなか建築学では出てこないらしいんですね。なので、割とケベックというのは最近フランスからも留学生が来るくらいなんです。そこにMUJIとかも入ったら結構おもしろいかなと思って私は見ていたので、こういうことが提案できるかなと思いました。

最大がこれです。エア・カナダが来月から直行便を出します。先ほど言ったように、今まではモントリオールへ行くのにはトロントで乗りかえしなければいけなかったんです。それか、ニューヨークかどこかに行って。ところが、来月からは直行便が出るのでぜひということで、これが商業ベースだと一番大きいと思います。

それから、また後で出てくると思うんですけども、結構日本人が今いないんです、ケベック州も。何人が多いかといったら何人が多いと思いますか、アジアからだ。

○—— 中国人。

中国人が多いんですよ。ケベックシティとかへ行っても私たち日本人にはえっという感じなんですけれども、ケベックシティとかモントリオールにも団体客がいるんです、バスツアーで。私もすごくびっくりしたんですけれども、何しに来るのかなというのが私の最大の関心事なんですけれども、実際、シノラマという中華系の旅行会社が今すごく大きく力を見せていて、モントリオールの空港でもシノラマという観光会社、旅行会社の宣伝が出て、テレビをつければ提供先がシノラマ提供とか結構あるので、そういうところでも、中国人以外にも来てほしいというのものもあるのかなと思いますし、中国は上海か北京かちょっとわからないですけれども、直行便は既にあるんです。私たちは中国よりも後にできる直行便を利用するわけなんですけれども、そこでも中国の人の力を先に見せつけられるなという気がします。

次に、モントリオールですけれども、もともとモン・ロワイヤルといって、ちょっとした山があるんですけれども、その名前から派生してモントリオールになります。ここの特徴は、間文化主義というのがケベックの特徴です。カナダ自体は多文化主義なんですよ。日本も共生を目指していると思うんですけれども、ケベックは間文化主義という、またちょっと違って、これはフランス語を核とした多文化国家を目指すんです。多文化主義だとそれぞれの文化を尊重するのはわかるけれども、1つにはならないというんですよ。しかも、フランス語とかフランス文化に全部なってしまうと全然意味がない、ケベックである意味がなくなってしまうので、核はフランス語にあって、周りにほかの言語を持つてくるということなんです。その中で1つの新しいものをつくっていこうというのを、簡単に言っていますけれども、これが間文化主義なんです。1つ1つが孤立ではなくて、全部が共生するためには多文化主義というのは無理があるということがモントリオールの今言われている主義、目的、目標です。うまくいっているんだと思うんですけれども。例えば、移民がすごくいろいろな国から来ますけれども、ケベック州に限っては、第一言語はフランス語です。必ずフランス語を習わなければならないんです。子供とかは、例えば、それこそアジアから行ったとしても必ずフランス語の学校を出る、フランス語が第一言語です。優先言語というか、公用語がフランス語になっているかもしれないですけれども、優先言語はあくまでも、ケベック州に限ってはフランス語なんです。かなり特殊は特殊です。

例えばメトロとかに乗ったとしてもポスターとか書いてある指示はみんな2カ国語で書

いてあります。フランス語と英語。だけれども、入ってくる音声はフランス語だけです。だから旅行者にはすごく気の毒だなと私は思って見ていたんです。ポスターとかは2カ国語なんですけれども、音はフランス語しか入ってきません。これはどうかなと思ってケベックの先生に聞いたんですけれども、長い間ずっと英語、英系に締めつけられてというか、支配されてきたので、やはりそれはしたくない、ここはフランス語だけでオッケー、別に英語は必要としないみたいなことをはっきり言われてしまったので、それはどうなのかなとは思ったんですけれども。あとはセント・ローレンス川で、自然観光かもしれないんですけれども、ここから歴史が始まっているので、これを意識せずにはモントリオールは語ってはいけないのではないかなと思います。

最近では、移民都市と言われてはいますがけれども、英語系アングロフォン、フランス語系フランコフォンとそれ以外のアロフォンから成り立っている移民都市です。現在ではアロフォンが多いです。やはり中国語の人がすごく多いです。でも、彼ら相手に使うのは中国語かもしれないけれども、学校とかではフランス語です。そこが結構厳しいというか、かなり制限されています。

これは先ほど言ったところの繰り返しになってしまいますけれども、フレンチ＝インディアン戦争でフランス軍が負けましたけれども、パリ協定があって、ケベック法と言われてはいますがけれども、これが仏語・仏文化を保証したということで、よかったと思うんですけれども、その後20世紀までずっと細々と生きてきました。皆さんの中で余りないと思うんですけれども、かなり細々と生きてきた都市です。60年代からモントリオールも、私も初めて意識したのがモンドセレクションというのを聞いたことがないですか、お菓子とかでモンドセレクション金賞とか。あれはモントリオールなんです、発祥は。そこで私も初めて意識したくらいなので、多分モントリオールというのが意識されたのは…。この辺は日本の万博とかぶるような気もしますけれども、やはりワールドワイドに認知されてくるのはこの辺なのかなという気がします。

場所を紹介しますがけれども、旧市街は古きヨーロッパみたいなものを出したいわけで、北米のヨーロッパ、北米のフランスを出したいので、ヨーロッパ風の石畳とかカフェテラス。これプーティンとって、ケベック州の名物なんですけれども、ジャンクです。これはアメリカなのかなと思ってしまいうんですけれども、フライドポテトにグレイビーソースとか、これは中華系のお店だったのでフライドポテトに甘酢あんかけみたいのをかけて食べる。これが観光のトゥーリストティックなメニューというか、こういうところに必ずプー

ティンと書いて提供するカフェとかレストランがあります。

お土産なんですけれども、旧市街でのこのお土産屋さんなんですけれども、インディアン関係のものも結構多いです。先住民族を意識した毛皮物とかインディアンビーズとかも多いし、あとTシャツとか国旗物が多くて、残念だったのは、この旧市街地はすごくきれいなんですけれども、こういうお土産屋さんばかりなんですよ。すごく残念。本当に同じものばかり売っているの、ちょっとこれはどうかなと私は思いました。日本人は多分、モンリオールに行っても2泊3日するかな、1泊2日で行ってしまうと思うので、そういう人たちというか、私たちには便利なのかもしれないですけれども、もうちょっと長くいるんだったらこれはないだろうと、ちょっと思いました。こういうのが何かヨーロッパを意識した感じなので、この辺は本当に北米のフランス、北米のヨーロッパということをかなり意識して見せているなというのが私の印象です。ちょっとうがっているかもしれないですけれども。

これがセント・ローレンス川で、天気がいい日はこんなにすばらしく見えるんですけれども、ちょっと天気が悪かったので。ジャック・カルティエ橋があって、1時間半ぐらいのクルーズなんですけれども、冬季になると凍ってしまいますので、夏しか楽しめないんですけれども、これもケベックのサイトを見ていると、ケベックの人も言っていたんですけれども、こういうものも観光資源にしたいと言っていました。私たち日本人は寒いから行かないんですけれども、逆に凍ったところとか、春先の氷が解けているところというのはすばらしいんだよというふうに言われたので、そういうのもこれからもしかしたら観光資源になっていくのかなという気はしました。

モンリオールに戻りますけれども、モンリオールのクルーズ船はなぜかバトー・ムッシュと呼ばれます。皆さん、パリに行かれた方はいますか。パリのセーヌ川の遊覧船の名前もバトー・ムッシュです。となると、カナダらしさ、モンリオールらしさが全くないですか。何でかなと思って。北米フランスというふうに見せているし、実際、ヨーロッパチックな旧市街を見せて、ではこれに乗りましょう、バトー・ムッシュですと言ったらもうフランスではないですか。乗っても、フランスの50年代とか60年代のシャンソンのかかっているんですよ。何が言いたいのかと思って。観光ってその土地らしさを見せることなんだけれども、全くないんですよ。パリらしさを見せてどうするんだという感じなんですけれども、それについて、まだまだ私は研究が足りないんですけれども、なぜかなというのがずっと疑問なんです。観光客も、乗っている人もフランス人が多いんですよ。

60年代とか70年代の歌がかかると一緒になって歌ってみたいな感じで、ノスタルジーなのかなと思いつつも、旧植民地に来たということではないと思うんですけども、何かそれが楽しいのかなとか思って、皆さんどうですか。他国に行っても何か、その辺ちょっと不思議なところでした。アジア人から見るとどうなのでしょう。よくわからないんですけども、なぜパリと全て同じものを提供してしまうのかなと思って、これは本当に残念なところなんですけれども、そうなんです。

バトー・ムッシュの中からどんなものが見えるかということなんですけれども、ビッグ・ベンみたいな立場のものがあって、一番古い時計台ですよみたいなものを見せたり、一番古い工場ですよということを紹介してくれます。やはり英語とフランス語の2カ国語でやってくれます。これは結構おもしろいと思うんですけども、アビタ67と書いてありますけれども、この建築物が万博のときに登場したすごく名物の建物らしいんですね。これが今すごく高いらしいんですよ。一画買うのに何億という値段がついてしまっていて、これが船から見るとか、あるいは、万博会場を見るときか。パリのバトー・ムッシュとコンセプトは同じなのかなと思いました。パリのバトー・ムッシュも、中から、この建物はとか説明されているわけです。ということで、川から町の成長を見るということコンセプトとするんだったらバトー・ムッシュという同じ名前をつけても間違いはないのかなという気はしましたが、しつこいですけれども、これは私にとってはとても残念なんです。パリのバトー・ムッシュと会社は違うような気がしましたけれども、ただ名前だけバトー・ムッシュと同じ。

次は、モンリオールの中心地の地図です。これが先ほど言った旧市街です。大体2泊3日とか1泊2日だと、ここしか出ないと思うんですけども、港があって旧市街があって、多分私たち日本人の2泊3日の旅は終わってしまいます。だけれども、実はもっと奥のほうというか、こういうところにこそ観光資源があるなと私は今回思いました。後でお話しますが、ここにサンローラン通りというのがあるんですけども、歴史的にはこの通りのこっち側がフランス語、こっちが英語の区域と決まっていたらしいんですね。こっちがフランス系カナダ人、こっちがイギリス系カナダ人の地域と決まっていて、それが今でもわかるのは、こっちのほうに狭い通りがいっぱいあるのがわかりますか。一画がすごい狭いんですよ。ところが、こっちは一区画が大きいんです。つまり1つの家が大きいということなんですけれども、地図からでもわかるということです。この辺です。ここがプラトー・モン・ロワイヤルという地域なんですけれども、フランス系の労働者が結構

多く住んでいる地域です。こっち側はイギリス系のほうなのでわかるんですけども、マイル・エンドという、今はユダヤ人が多いところですけども、ここは英語系です。こちらもちろん英語系です。今はどうかといった場合に、全くこの現象がなくなったと言えないんです。やはりこっちはフランス語が多いんです。こっちは英語の人がすごく多いんです。おもしろいのはカフェへ行っても、こっち側のカフェはメニューとかも英語だし、ケベック州なんですけれども、モントリオールはもうちょっと国際的というか、ケベックシティとはまた違うんですけども、こっち側のカフェとか本屋さんは英語の本が中心だったり英語のメニューだったりします。店員さんも英語をしゃべります。こっち側だとやはりカフェとかもみんなフランス語になってしまう。今でもその傾向はありますね。ここはフランス語中心です。ただし、この辺はバイリンガルの人が多いので、やはり旧市街が一番観光地域だから当然だと思うんですけども。3つほど大きな大学がありますけれども、こっちにあるマギル大学は英語系の大学です。こっちにあるモントリオール大学とかケベック大学はフランス語が主です。なので、同じ都市にありながらも2つの語学の大学が出てくるということです。

先ほどとかぶってしまいますけれども、資本家であるイギリス系と、被支配者、つまり労働者がフランス語系、フランス系の人たち。交わらない居住区域ということで、サンローラン通りを中心として交わることがなかったんです。宗教もそうで、フランス系はカトリックのほうです。イギリスはプロテスタントのほうなので教会も違ったと。現在は違々と書きましたけれども、言葉に限ってはまだまだその影響は見られます。

モントリオールは実は島なんです。ここが先ほどのサンローラン通りなんですけれども、ここからフランス語系と英語系に分かれています。これはいきなり何だということなんですけれども、ラシーヌ川なんですけれども、最初の歴史で言ったように、ヨーロッパ人がニューファンドランド島、北米を目指して船で来ているわけですけども、彼らの目的って何だと思えますか。なぜフランスとかスペイン、北欧の人が、ニューファンドランド島、北米を目指したと思えますか。いろいろな理由はありますけれども、大きな理由は何だと思えますか。なぜ北の海を。南というのはスペインとかポルトガルが航路をもう見つけてしまって、フランスは乗りおけているので北へ回ったわけですけども、目的は何でしょう。

実はもともと、探検家ではなくて、北欧の漁師さんとかバスクの漁師さんも、十二、十三世紀ごろにはもうニューファンドランド島まで行っているんです。ただ、証拠が余り残っ

ていない、文献がないのでなかなか誰がとは言えないんですけども、スペインとフランスの間のバスク、あの辺の人たちはもともとはあそこでクジラをとっていたんです。クジラがいたんです。ところが、どんだんクジラも北に行ってしまうと、それを追いかけてバスクの漁師さんも北に行くと、ニューファンドランド島まで行ってしまふわけです。だけれどもそれは別に、目的は目的ですけども、国家の目的としてではないので、国家フランスとしての目的は何だったと思いますか。

もちろん植民地をつくるためもあるんですけども、それはたまたま途中にあったので植民地にしたのかもしれないんですけども。やはり、アジア、中国への道を見つけない。先ほど言ったようにポルトガルとかスペインはもう南の行き方を見つけてしまっているんで、おくられているんですよ。なので、北から行きたいんです。北から、もっと短い行き方があるのではないかと探すわけです。見つけられたわけです。あるフランス系の人が見つけたと言うんですね。見つけて、こここのところをラシーヌと名前をつけるんですけども、フランス語でシーヌって中国のことなんです。川の名前をラシーヌとつけてしまふんですけども、その人はここに出た時点で中国はもうすぐだと思ったわけなんですよ。そういう地域でもあるんですね。香辛料とか、皆さんも世界史でやったと思うんですけども、中国への熱というんですか、そこまでいかに早く行けるか、いかに便利な道を見つかるかということが、14世紀、15世紀、16世紀の旅の目的なわけです。これが見つかったのも、もともとそういうことです。

モンリオールの名前になったモン・ロワイヤル。これが今建っていますけれども、これは夜になるとイルミネーションされます。そこから見たモンリオールの町並みです。大都市です。かなり大きな商業都市です。

ここが先ほど言った旧フランス系地区の特徴なんですけれども、フランス労働者が住んでいたアパートです。恐らく貧しく見えないと思うんですけども、リノベーションしたからすごくおしゃれな感じになっていて、本当に素敵なんです。特徴の1つがS字階段なんですけれども、必ず階段が外なんですよ。中にはないんです。珍しいというか、これはフランスではないんですけども、なぜなのと聞いたときに、はっきりした答えはなかなか得られなかったんですけども、やはりカトリックの影響が結構あるのではないかと。中につけて隣同士がこそこそやることはよくないと。それよりも外につけたほうがいいみたいなものがあったみたいだし、あと、暖房を効率的に使う方法として何かあったらしいので、いろいろな技術的な影響もあったんだと思います。これがフランス系のほうですけ

れども、やはり建物の特徴は外階段です。今は労働者は住んでいなくて、一画も高くなっているんで、アーティストとかが多く住んでいるようです。絵はがきにもなっているんですけども、ただ、私たち日本人にはこういうイメージは余り伝わっていないのではないかなと思います。芸術家さんたちが結構ここを使っているというお話を聞きます。あとは、労働者の町とは、なかなか写真からだと思えないとは思いますが、そうなんです。

これも一応外階段なんですけれども、英語系のほうです。この違いはなかなかわかりづらと思うんですけれども、一画がちょっと大きいんですよ。今はユダヤ人の人たちが多そうだなと思います。というのは、金曜日とか歩いていると、ユダヤの人たちがユダヤの衣装を着て教会に行く、シナゴークへ行くのが見えたので、そう思ったんですけれども。

注目していただきたいのが植物なんですけれども、これは9月です。ちょっと紅葉が始まっている気もしますけれども。モントリオールは、北緯44度かな、かなり北なんです。植物はどうなのかなと思ったんですけれども、意外に夏は蒸し暑いらしくて、日本で見るような雑草が結構ありました。とりわけ気になったのが、セイタカアワダチソウってわかりますか、結構背が高くなって黄色い花がつく、花粉症の私は見るだけでむずむずしてしまうんですけれども、北米原産らしいことは知っていたんですけれども、やはりたくさんありました。北とはいえ、意外にうじゃうじゃと雑草も多く、きれいはきれいですけれども、この辺を見ているとありました。これがバンクーバーとかになるとまたちょっと違うと思うので、こういう植物系も結構違うのかなと思います。

あとは、一軒家がこのように英語系のほうは多いです、今でも。全部英語をしゃべっている人かといったらちょっとわからないんですけれども、この家は古いものが多いので、英語系の人たちがもともと住んでいたということがわかります。こういう地区とかですね。

先ほどの繰り返しで、マイル・エンドなんですけれども、ユダヤ人地区と言えらと思うんですけれども、マイル・エンドというのは英語の名称ですものね。なので、英語系だと英語系の名称なんです。マイル・エンドというところなんですけれども、その地区だとユダヤ人が多くて、シナゴークへと向かう人々の姿が結構印象的でした。

ユダヤ人は歴史的に多く移民しているんですけれども、ケベコワとしているかといったら、やはりちょっと違うみたいですね。ケベックの人が言っていたんですけれども、ユダヤ人の学校に行くとか、必ずユダヤ人ということ意識した生活をしているらしいんです

ね。そのユダヤ人の学校も私立学校でしょうね、あるんだけど、それに対してかなり補助を出しているの、これだけ公共の補助を出しているのに分けて暮らすのはどうかなみたいなことはちょっと言っていました。私たちは余り想像できないし、フランス、パリもユダヤ人が多いですけども、またちょっと違うなと思いました。やはり彼らは何か独自の生活をしているような気がしました。こういうところですよ。

それから、裏通りを紹介しますが、先ほど素敵な家々を紹介しましたが、ちょっと奥に目をやるとこういうものがまだまだ残っているところもモンリオールらしいのかなと思います。おしゃれな作りではなくて、本当にどこの田舎？という感じの、もう少し掃除したほうがいいんじゃないか、もう少しペンキでも塗ればというところがあるんです。それがまた、大都市なのに、この素朴さが魅力なのかなという気がします。

ミッシェル・トランブレイというケベックの作家なんですけれども、彼は劇作家ではあるんですけども小説も書いていて、こういうノスタルジックな1950年代とか60年代の自分が小さかったころのモンリオールを舞台にした小説を書く人なんですけれども、それも人気の1つなのかなと思います。意外にと言ったら失礼ですけども、文芸活動が盛んなところなんです。ケベックの人は、詩をつくったり書いたりするのが好きな人たちなんですけれども、日本にも時々来ています劇作家のブシャールという人もいますし、あと、モンリオールで有名な芸術集団がありますよね。多国籍の人たちから成っている大きな、知りませんか。今、日本でもやっていますね、シルク・ドゥ・ソレイユ。あれはモンリオールの芸術軍団です。あれは多国籍なので、そういうところからもわかるような気がするんですけども。日本の人たちも受け入れますものね。あと、芝居小屋とかも多いんです。そういうのも割とモンリオールというのは私たちが知らないところなのかなと思います。あとは、最近余り出てこないですけども、セリーヌ・ディオンの、あの人はモンリオールというかケベックの人です。セリーヌ・ディオンの英語で歌ったからワールドワイドに有名になったんです。フランス語だけ歌っていたら多分ケベックで終わっていたと思います。そういうところなんです。

言語システムですけども、先ほど言ったように、バイリンガル都市はバイリンガル都市なんですけれども、このように、見るとフランス語しか書かれていません。こういうのを見るより、ピクトグラムとかがあつたりすると、標識を見るとわかるけれども、基本的には全部フランス語です。なぜ、これでオクケーされるのかといたら、この州にはフラ

ンス語憲章というのが1977年に制定されました。これで、第一言語はフランス語ということをはっきり固めてしまったんです。なので、ケベック州に限っては、本当は英語はなくてもいいんですよ。英語はなくても全然許される場所なんです。だから、カナダ連邦とのずれがあるんです。そこが政治問題とかになってしまうんでしょうけれども、ケベック党というものもあって、そこが難しいんですけども、ケベック州に限っては書き言葉にかかわらず、実はフランス語だけで生きていける場所なんです。こういう注意書きでも多分皆さんびっくりしてしまいます。えって感じで。だからこそいいのかなという気もするし、何かフランスみたいとか思って、自分はどこにいるんだろうという感覚にもなれるのかなと、観光者から見ると思ったりもしますけれども、皆さんどうでしょうか。

チャイナタウンです。チャイナタウンは大きいです。バンクーバーはもっと大きいみたいですけれども、モントリオールのチャイナタウンもかなりの大きさです。19世紀の終わりにゴールド・ラッシュがあったのと、鉄道建設とかに中国の人がかなり来ました。1902年に公式に「チャイナタウン」と命名されたそうです。万博のときは既に観光対象にされていたので、結構歴史が長いという感じがします。ゴールド・ラッシュもそうだし、鉄道建設もそうなんですけれども、ここはカナダですが、例えば、アメリカ横断鉄道なんかでも中国人は結構労働者として参加しています。だからこそチャイナタウンがあるんでしょうけれども。日本人は、ケベックはわからないんですけども、アメリカの横断鉄道に限っては、日本人も結構労働者として参加しています。割と、鉄道建設とかは、アジア人というのは好まれたみたいです。なぜなのか。特に中国人は好まれたらしいんですけども、中国の人って冷たいものを飲まないではないですか、体によくないとか言って必ずお湯にします。なので病気になるらしいんですよ。ところが白人は、すぐ生水を飲んでしまったりしておなかを壊して、あるいは死んでしまったりするんですけども、中国の人はお湯にして飲むので、そういう病気にもならないということと、あと、日本人も含めてアジア人は手先が器用なので、竹とかを使って器用に工事をやるらしいんです。なので、すごく便利がられたと言われていました。カナダの場合はちょっとわからないんですけども、アメリカの場合は日本人とかがかなり行っています。

これは9月だったので中秋の名月のお祝いがあって、中秋節があって、月餅が結構売られていました。私、月餅についてもちょっと関心があって調べたときがあるんですけども、ケベック、モントリオールの中華街だと月餅はみんな輸入品でした。フランスの中華街の月餅は、やはり輸入品が多いんですけども、日本のようにお菓子屋さんに行くと結

構一年中売っています。中国は、9月しか売っていないんですけども、パリの中華街に行っても日本みたいに一年中売っているし、日本は一年中コンビニとかでも売っていますよね。カナダは多分このときだけなんだと思います、ケベックですけども。逆に、中国本国だと、月餅もいろいろあるのを知っていますか。スターバックスとかも月餅を出しているし、ジャン＝ポール・エヴァンとか、有名なチョコレート菓子ですけども、そこも月餅を出しています。そういうものがあるかなと思ったら、ケベック、モントリオールではなくて、香港からのものが多かったです。香港から月餅を。店員さん同士は中国語でも話している人が多かったですけども、店員さんたちは英語でした。フランス語で言ってもわかる人ももちろんいましたけれども、英語で返ってくる率がすごく多かったので、一応、フランス語を学びなさいと言っているけれども、実際はどうなのかなと私はここでちょっと疑問を持ったんです。店員さんが英語しかわからない人なのはどういうことなのかと思ったんですけども、観光の人にはいいと思うんです。意外にここも大きなところでした。

それから、イタリア人がもともと多く入ってきたところなので、プティット・イタリー地区というのがケベック、モントリオールにもあります。今、ジャン・タロンという市場になっている地区なんですけれども、ここで見てもらうと、野菜も豊かなんですよ、あんなに北なのに。トウモロコシとかをよく食べる国らしくて、すごく出ていました。ゆでたトウモロコシとかも売っているんですよ、日本みたいだなと思ったんですけども。一方で、フランスではトウモロコシというのはゆでて食べたりはほとんどしないです。なぜ食べないのと聞くと「鳥の餌だから」と言われてしまうんです。でも、ケベック、モントリオールだとよく食べます。スチーマーがあって、そこでゆでて売っていましたね。あとは、ネギとかキャベツとかが普通にあったので、すごく豊かなんだなと思いました。

この地区は周りを歩くとアジア系のレストランがすごく多いですね。カレー的なもの、エスニックな感じが多かったです。今はプティット・イタリーと言うけれども、イタリア人の地区とはもう言えない気がします。もうどちらかといえば東アジアの地区という感じがしました。

私が今回紹介したかったものは中央図書館なんですけれども、これは入り口です。1階がカフェになっています。国立は国立なんですけれども、みんなが使えます。地下は児童書です。アーカイブ、16世紀のものとかも所蔵する大図書館なんです。やはりフランス語と英語の両言語に対応しています。同じ小説でもフランス語のものと英語のものが両方あ

ります。これはすごいなと思うんです。こういうところだと当たり前なのかもしれないですけれども、フランス語の本と英語と別ですけれども、翻訳があればちゃんと両方あります。ガイドブックも英仏両方です。そのガイドブックもすごく充実していました。ということは、ツーリストも利用しているので、観光資源としての図書館というのもあり得るのかなと思いました。椅子もふかふかしているので、ツーリストの人たちはそこにきて、ネットの資料ばかりではなく、実際に紙媒体を眺めているというのを見ました。

BDというのはフランスのハードカバーの漫画なんですけれども、それから日本語の漫画、もちろん英語訳、フランス語訳の両方あって、今、皆さんが日本で読んでいるような漫画もすごくありました。先ほど言ったようにカフェも常設しましたし、それからビデオとかDVDもすごく充実していました。火曜日から日曜日まで、10時までやっているんです。しかも町なかにあるので、最後まですごく多くの人利用しているなという気がします。

最近、図書館の観光資源ということを言われているんですけれども、でも、ツーリストがそこまでというのは、日本の場合はちょっと難しいですよ。日本語の文献が多くなってしまうと思うので。2言語の国だと、私たちが行っても英語で読めたりするので、観光資源としてすごく成立するのではないかなと思いましたね。この近くにUQAM（ユカム）といって、ケベック州立大学があるんですけれども、その図書館も実は入れるんです。借りられないんですけども入ることはできます。なので、大学の図書館とかも、どんな本があるかなんて見学できるのはいいことだなと思いました。もちろん、借りられないんですけれども、入れること自体すごいなと思って。

それから、今回はないんですけれども、寒いところなので、地下がすごく発達しています。地下街がすごく発達しているので、大学とかも地下から入るシステムで、地下鉄からそのまま直結だったり、ショッピングセンターも地下というのがすごく多いです。冬がマイナス20度的なものなので、ちょっと無理なんですね。今回その写真がないので申しわけないんですけれども。

最後に、これはモンリオールのエア・カナダの宣伝なんですけれども、見たことないですか。これはネットからなんですけれども、私、山手線の中でもことし見たんですけれども、この文句がおもしろいなと思って。「そろそろ、モンリオールはいかがですか」というものです。ということは、やはりターゲットが、フランスとかアメリカとかイギリスとかを知っている人は、次はモンリオールはいかがですかというスタンスなのかなと見

受けました。キーワードとして移民社会とか多文化国家だし、間文化社会もありますし、あと先住民族との関係とかがあって、自然、冬、スキーとか、そういうのがあると思うんですけれども、ケベックだけではなくて、カナダ全体の問題として、皆さんもそうだと思いますけれども、イメージがなくないませんか。カナダと聞いて、イメージがありますか。大体、観光とかする側にその国のイメージがあって、そのイメージに対応したのを見て、「あ、これか」とか、おもしろいとかつまらないと思うと思うんですね。例えば、最近、コンテンツツーリズムとかがやっていますけれども、漫画でも小説でも何でもいいんですけれども、そのこの場面に自分が行ったときに、「あ、ここか」と思って感動したり、あるいは自分が想像していたものを見たときの高揚感って、すごく観光にとっては重要だと思うんです。既視感というんですか、それを楽しむのが観光だと思うんですよ。何かないとちょっと印象に残らないと思うんです。カナダだって、そこが問題なのではないかと思って、例えば、皆さんがフランスへ行くとかアメリカへ行くといったら何かイメージがきつとあると思うんですよ。だけれども、カナダへ行くといった場合に、ありますか。そこが魅力だとは思いますが、ないのが魅力と言えればそれまでなんですけれども、観光ということを考えると難しいなと思って。

例えば、語学だとすると、英語をやるんだったらアメリカとかイギリスとか、フランス語だったらフランスでとあるんですけれども、カナダというのはなかなか出てこないし、今回も、テロとかがあって危険だからということで、次の選択肢だったと思うんですね。カナダの立ち位置はそこなのかなと思って。その次の国、第2の国というのが魅力だったり、残念なところなのかなと思うんです。

このイメージというのは観光にとっては本当に大切に、プロジェクションとかに行ったりするんですけれども、要するに、観光したときというのは、そこに何かを投影したいわけですよ。その投影するものがないと、特に観光に行こうという動機にはならないんですね。多分行ったら楽しいですよ。行ったらおもしろいとか楽しいなと思うと思うんですけれども、でも行く動機というのがなかなかカナダという国にはないかなと思って。そこに関心があるというか、そこをどうにかできればいいなと思っているんですけれども、でも、逆にないのが魅力だよというふうにアピールするのもカナダの魅力なのかなという気はしています。

私は、フランスが専門のところをやっていたのでケベック州中心になってしまうんですけれども、恐らく皆さんも、バンクーバーとか何か聞いたことはあるぞ、だけれどもどん

なところと聞いてもなかなかこうイメージが出てこないし、トロント、ああカナダだね、何かすごくいっぱい移民がいるんだよねといっても、それ以外のものがないと思うんです。カナダって皆さん何を浮かべますか。やはりナイアガラですかね。ナイアガラもアメリカ側とカナダ側があるんですけれども、ほかにどんなものがありますか。ここが私的には関心があるんですけれども、カナダって何ですか、ナイアガラと……。

○—— メープルシロップです。

そうですね。メープルシロップ、あれは春の象徴なんですけれども、あれはとりに行くことが春になったということで、みんなうれしいという行事らしいんですけれども。あとは。

○—— 赤毛のアン。

プリンス・エドワード島だけになってしまうんです。あれもやはり、赤毛のアンというコンテンツがあるからこそそのものなんです。プリンス・エドワード島は日本人が一番多いところなので、小説が日本でいかに読まれてきたかということなんでしょうけれども。カナダの作家といっても、なかなか皆さん御存じないんです。本を読まない、というか出ていないし、そこも大きいんです。ヨーロッパの作家だったら、読んではいないけれども名前は知っている人がほとんどではないですか、ヴィクトル・ユーゴーといって、ああ名前は知っている、ユーゴーの地、行ってみたいとか思うと思うんですけれども、カナダの場合だとそういうものもなかなか難しいんです。バンクーバーも、先ほどの、新渡戸稲造の何かがあるんだなと思ったんですけれども、そうすると何となく身近に感じたりして。知っているものがないと、そこが楽しみといえば楽しみなんですけれども、私は観光業者ではないですが、観光を促すときにそこはちょっと辛いかなと思って。風景も確かに美しいです。美しいんです。だけれども、実はその美しさに何か投影するものがないとやはり残らないと思うんですよ。あれは何とかで見た山なんだとか、誰々が泳いだところなんだという、余計印象も強くなるし、帰って来てからも結構楽しめると思うんですけれども。カナダについて皆さんはどういう感じなのかなと、そこはおもしろいところで興味あります。

それから、先ほど言ったようにケベックの場合は、ケベック党という政党もあるように、カナダ連邦とのしがらみ的なものはあると思います。今までも、独立を問うものとかがありました。最近の傾向はどうなったかといったら、1980年代の選挙だと、やはり独立したい派が結構多かったんですけれども、今、全然減っているんです。というのは、それ

だけアジアから来た移民が多くなったので、フランス系とかは関係なくなっているわけです。自分はフランス系だからフランス人というのはもうないんです。多くの移民が来てしまったので、全く歴史に関係のない人が来ているので、「独立？ 別に」という感じの人が多くなっているみたいです。

あと、おもしろいなと思ったのは、ケベックの国際学会の人とお話したときに、ケベックも高齢化社会らしいんですよ。「でも大丈夫なの、移民がいるから」と言われたんです。すごいなと思って、全然普通に言われた、「でも私たち移民がいるから」って。そういう社会なんだなと思って。私たちはなかなか言えないではないですか。日本は大変よね、でも移民がいるんでしょ。でも受け入れられないのよね。何でみたいなことを言われてしまうと、ウンって悩んでしまうんですけども、普通に「移民がいるから私たち大丈夫」というふうに言われたので、その辺の意識の違いというのは、ここ何年かですることではないでしょうから、やはりもともと移民でできた国なのかなというのはすごく感じました。

あとは、町なかを歩いていると、サンローラン通りとサンカトリーヌ通りというのがあるんですけども、サンカトリーヌ通りを通っていくと縦にサンローラン通りが割ってくるんですけども、歩いているだけですれ違う人の言語が変わるといのはおもしろいです。どうしてもバイリンガルになってしまうなと思って、毎日交差しているので、私たちが無理に教育的にやっていくのはすごく大変だと思うんですけども、あれだけ普通に、すれ違う人が違う言語をしゃべっている社会だったら、違ういろいろな文化にもなれ、それが普通になってしまうんでしょうし、その多様性は、フランスの移民は多いですけども全く違いますね。やはりフランスだったらフランス語で固めるではないですか、当たり前ですけども。だけれども、モンリオールを歩いている場合には本当に、普通にすれ違う人の言葉が違う。英語がやはり多いんですけども、これでは英仏両方しゃべれるようになるなという気がします。

あとは、私はフランス語をやっているのだからわかるんですけども、旅行者としてはやはり英語が入ってこないのはきついだらうなというのはすごく感じました。トロントは英語社会、英語がやはり第一というか、一応、英仏語で、子供たちはフランス語を学ぶようですが、普通の生活だったら英語中心と言っていましたね。オタワを通り過ぎる位置あたりで、フランス語圏に入ったのかなと感じたというのを旅行者の人に聞きました。皆さんは英語圏だけだと思うんですけども、それにしてもいろいろな民族の人たちがたくさんい

るので、それはすごくおもしろいというか、全く違う身体的特徴の人が一緒に1つの国にいるというのは、刺激的というか勉強になるのかなという気はします。

ちょっと早いですが、私の話はこんなところでいいのかなと思って、皆さんから御質問があれば、私が答えられる範囲でお答えします。せっかくなので御質問がありましたら、皆様いかがでしょうか。

質問1

質問者 最近、日本ではインバウンドとかいって、かなり力を入れているところがあるかと思うんですけども、例えばカナダ、ケベック州として、観光に力を入れているものが何かありましたら教えていただいてもよろしいでしょうか。

羽生 カナダ側からですか、ケベック側からですか。

質問者 両方です。

羽生 多分、ケベックの場合は恐らく、直行便を出したことで、日本からのお客さんをすごく狙っているのだと思います。特に、日本はオリンピック、パラリンピックがあるから余計なんだろうけれども、そういうような特別なものはちょっと感じられませんでした。でも、カナダの日本領事館の人に言われたのは、やはりケベックには日本人は来ないんですよ、なので、ぜひ何か考えがあったら教えてくださいみたいなことを言われたので、多分、日本人誘致には今すごく力を入れているところなのかなと。ただ、ケベック側も、最近、特に若い人の観光というのはインスタグラムの影響がすごいんですね。写真を撮りたいから行くのって、いいから行きたいわけですよ。やはりインスタグラムとかでどんどん発信していかないと、なかなか魅力は伝わらないし、その国がどういうものなのかが伝わらないので、そういうところはすごく大切なのかなと思います。

やはりエアライン直行便は大きいと思うので、ことしの6月からの動向を見てみたいという気がしています。なので、今のところ何とも言えないんですけども。済みません。

質問者 ありがとうございます。あと、日本以外にも観光に力を入れたいエリアとかはあるんでしょうか。

羽生 見ていると、やはりアジアの人たちを受け入れたいというのはすごく感じますね。韓国の人もちびちびいましたけれども、それだけ周知しているんでしょうね。だから韓国の人にも来るんでしょうし。先ほども言ったように、中国の場合は、例え

ば、ケベックシティ、モントリオールにしても、しつこく言っていますけれどもイメージがないじゃないですか。なのに、あれだけ大量の人が来るというのは何なんだろうと思って。1つは、中国だったか、ドラマでケベックシティを背景にしたところがあったらしいんですね。やはりコンテンツツーリズムなのかなと思うんですけども、ドラマの撮影場所がケベックのどこかだったらしくて、その影響もあるのではないかなということは言われました。

質問者 ありがとうございます。

質問2 お話、ありがとうございました。バトー・ムッシュの中で流れていたのがシャンソンだった、残念だったというお話をいただいて、ちょっと笑ってしまったんですけども、そこで先生としては、例えばこんなのがかかっていたらよかったとか、何かケベックのジャズミュージックみたいなのがあれば、あわせて参考に。

羽生 ケベックの音楽というのもあって、多分いるんだと思うんですけども、まだちょっと一部の人しか、好きな人は好きなんだと思うんですけども。確かにどの音楽だったらよかったのかというところすごく困ってしまうんですけども、でも、本当にフランスの懐かしきシャンソンみたいな感じだったので、そればかりイメージに残ってしまったんですね。でも、確かに何がよかったのかといたら、もし見つけたら今度私が提案してみようかなと思うんですけども、何でしょうね。皆さん何かありますか、カナダの何か……。

質問者 例えば、先ほどセリーヌ・ディオンのお話が出たんですけども、もともとカントリーみたいなのもあったりしたのかなと思ったので、お聞きしました。

羽生 そうですよ。ただ、セリーヌ・ディオンのかだとお金がかかりますよね。セリーヌ・ディオンのか、それこそシルク・ドゥ・ソレイユを使ったりとかでもよかった気もするし。なぜあそこまでフランスフランスにするのかなというのが本当に残念だったんですけども、かといって、カナダらしさとかケベックらしさを出すためには何がよかったのかなというと、確かに疑問です。セリーヌ・ディオンのくらいしかちょっと出てこないんですけども。でも、多分いるんです、調べさせてください。

質問者 ありがとうございます。

質問3

質問者 英語をふやしたほうが観光客はふえるんでしょうか。それこそさっきのインバウ

ンドとか、東京オリンピック・パラリンピックがありますけれども、来る人に対してわかる言語で接しているほうが、観光客は来てくれるのでしょうか。それとも、日本のそのままを知りたいんだよという人、そっちをメインで来る観光客とか、そういう目的の違いがいろいろあると思うんですけれども。

羽生　　そうなんですよ。日本はおもてなしということがすごく、言葉が軽くなってしまいましたけれども。ケベックの人はすごく親切でした。すごくおもてなし上手で、おもてなしというふうに持ち上げる言葉は多分ないんですけれども、ホスピタリティーだけになってしまいますけれども、さりげないんですよ。だから、日本みたまくマニュアルチックにおじぎしたりとかは全くないんですけれども、すごく親切だったんです。自分がこうしてあげたいからやってあげるという感覚のものがお店でもあったので、日本のお店では多分マニュアル以外のことはやらないと思うんですけれども、そういうものもお店の中でもあったので、それはすごくすばらしいなと思ったんですね。

言葉に関しては確かに、北米のフランスと違って来ているんだからフランス語のほうが、観光客の思いどおりなのかもしれない。だけれども、ツアー旅行だったらいいですけれども、1人で旅している場合は、やはりある程度英語の情報とか、特に交通の中ではあったほうが、事故などがあつたときに便利だなという気はしました。例えば、地下鉄とかバスとかがおくれても、フランス語の案内は、どこどこで事故があつたからとか何々が故障したのでと入るんですけれども、英語では全くないんです。それはどうなのかなと思いました。だけれども、確かにレストランとかだとフランス語だけというのは、それはいいのかなという気はします。ただ、こっちが質問したときには英語で返してくれたほうがもちろん便利なんだろうけれども。だから、観光資源としての言語もあるかもしれないです。

特に、日本に来る場合だったら、日本語をしゃべりたいという人も確かにいると思うんです。それなのに全部英語で返してきたら何だかちょっと残念みたいと思う観光客の人がいるかもしれないし、それはやっぱり一人一人になってしまうと思うんです。でも、言葉って私は観光資源になるのではないかなと思うんです。すごくおもしろいというか、私が言葉に興味があるからかもしれないんですけれども、わからないなりにおもしろいと思うので、その国にいることを楽しめると感じるのは、やはり言葉でもあると思うので、その言語センサーというのは日本ももうちょ

っと、英語だけではなくて日本語でみたいなことをもうちょっと考えてもいいのかなという気はします。どういう場面かちょっと思いつかないんですけども。先ほど言いました間文化主義ですけども、私の教えている学生で、日本も間文化がいいのではないかと行ってくれた女の子がいるんですね。日本語を核として何か多文化共生ということを考えたほうがいいと思うというふうに言った学生もいるので、なるほどなと思ったんですけども。

質問者 どうもありがとうございました。



「カナダの社会と人々」

神田外語大学外国語学部教授 矢頭 典枝 氏

【講師略歴】

東京外国語大学フランス語学科卒業、東京外国語大学大学院修士課程、博士後期課程修了。博士(学術)。外務省専門調査員(在カナダ日本国大使館勤務)、オタワ大学言語学科客員研究員、東京外国語大学・神田外語大学・青山学院大学非常勤講師などを経て、2008年より神田外語大学英米語学科専任。

【著 書】

『知っておきたい環太平洋の言語と文化』

神田外語大学 (担当:分担執筆, 範囲:カナダ) 神田外語大学出版局、2016年

『カナダを旅する 37章』

飯野正子、竹中豊編著 (担当:分担執筆, 範囲:「22. 英語とフランス語の政治舞台オタワ—バイリンガル首都物語」)明石書店、2012年10月

『多文化社会ケベックの挑戦—文化的差異に関する調和の実践 ブシャール=テイラー報告—』

チャールズ・テイラー、ジェラルド・ブシャール著 (竹中豊、飯笹佐代子、矢頭典枝訳) (担当:共訳) 明石書店、2011年8月

『現代カナダを知るための57章』

飯野正子・竹中豊編著 (担当:分担執筆, 範囲:「15. カナダの公用語政策」「37. ケベック問題」) 明石書店、2010年

『カナダの公用語政策—バイリンガル連邦公務員の言語選択を中心として』

矢頭 典枝著 リーベル出版、2008年2月 など

カナダの社会と人々

神田外語大学外国語学部教授 矢頭 典枝 氏

はじめに

神田外語大学の矢頭と申します。私の専門分野は社会言語学ですが、勤務先では「カナダ研究入門」という授業も担当しています。今日は、カナダ研究の中でも言語状況と政治寄りの話を中心にしたいと思います。皆様はカナダに視察に行かれるということですので少しでもお役にたつような話をしたいと思います。

まず、私のことを若干紹介します。私は移民として家族とともに5歳のときにカナダに渡り、11歳のころに日本に戻ってきました。ですから、1960年代、1970年代のころ、私はカナダで子供時代を過ごしました。身についた最初の言語は英語で、11歳で日本に帰ってきて日本語でとても苦労しました。

それから、1980年代の半ば、大学院のころ、カナダのモントリオールに留学しておりました。子供のころ住んでいたのはトロントで、そこは英語圏です。モントリオールはケベック州でフランス語圏です。その後、外務省専門調査員としてオタワの日本大使館に勤めておりましたが、オタワは英語とフランス語のバイリンガル圏です。だから、1960年代から1970年代にかけ、1980年代の中ごろ、そしてオタワにいた1990年代の真ん中から2000年ぐらいにかけて、3つの時期、そして3つの言語圏で過ごしました。英語圏トロント、フランス語圏モントリオール、そしてバイリンガル圏のオタワです。そういう観点からも少し話をしようと思います。

カナダの地理と言語状況

皆さんが行かれるのはトロントとバンクーバーだと聞いております。地図を見ていただくと、こんな感じで、バンクーバーはブリティッシュ・コロンビア州というところにあります。バンクーバーというところは、実はブリティッシュ・コロンビア州の州都ではありません。カナダでは州のことをstateではなくてprovinceと言っておりますが、全てのprovinceに州都があります。英語ではProvincial capitalといいます。州都はビクトリアです。皆さん、ビクトリアのほうには行かれますか。——行かないですね。すごくきれいなところです。カナダは東のほうが寒いのです。私が住んでいたのはトロント、モントリオ

ールとオタワですので、とても寒かったです。今年のモントリオールが一番寒かった1月の気温はマイナス40度ぐらいでした。トロントはそこまで寒くないですが、オタワもマイナス40度とか、私が一番寒い体験をしたのはマイナス52度でした。マイナス52度になると、例えばちょっと風邪を引いていて、鼻水が出ている場合、鼻の中が凍るような、そういう寒さなのです。しかし、バンクーバーはそこまで寒くありません。皆さんが行かれるのは6月ですよ。一番いい時期に行かれます。トロントとバンクーバー、両方ともすばらしい時期です。本当に楽しんで行かれたらいいなと思います。

地図を見ましょう。これがバンクーバー、ブリティッシュ・コロンビア州、一番西のほうです。それから、トロントはオンタリオ州です。州都がトロントで、同じオンタリオ州の中に首都のオタワがあります。各州のいろんな情報は配布資料に書いてありますので、皆さん、ごらんになってください。

カナダは大きく分けて英語圏とフランス語圏があります。フランス語圏はケベック州、残りが英語圏と聞いていいです。厳密に言うと、バイリンガル圏があります。それは首都オタワで、オンタリオ州に位置しますが、ほとんどケベック州との州境にあります。それから、ニュー・ブランズウィック州という小さい州がこの辺にありますが、この州はフランス語系の人たちが3分の1を占めておりますので、バイリンガル圏として知られております。

国内に時差があります。これはカナダに限ったことだけではなく、アメリカもそうですが、皆様はバンクーバーからトロントに飛ばれるんですか。そうした場合、トロントの方が3時間ほど時間が進んでおりますので、時計の針を進めなければなりません。

それから、国民の言語状況についてです。このあたりが私の専門分野なのですが、人口は3,500万人です。国民を言語別に分けて称する用語がカナダにあります。アメリカ人にこういうことを言ってもぴんとこないと思います。英語でAnglophoneは、日本語で言うところの「アングロフォン」で、英語をふだんの生活の中で話すカナダ人のことを指します。これは民族的な出自に関わりません。もちろんイギリス系の人たちが一番多いのですが、例えば中国系とかアジア、ヨーロッパの人たちはかなり昔から移民しておりますので、その2世、3世になると、血筋は、例えば日本人だったり、中国人だったりしますが、祖国の言葉が話せなくなっている場合が多いです。彼らは英語をふだんの生活のなかで使っている、そういう人たちをアングロフォンと呼んでおります。

他方でケベック州に集中しているフランス語系の人たちのことをフランコフォン

Francophoneと言っております。

もう1つ変わった用語があります。アロフォンAllophoneといって、これはもともと音声学の学術用語からとってきているのですが、カナダでは独特な使われ方をされていて、移民の人たちで、ふだんの生活の中で祖国の言語を話すカナダ人、あるいはカナダ永住者のことを言っております。例えばカナダにはたくさんの中国系の移民がいます。2016年の国勢調査の結果によりますと、180万人もの中国系がカナダに存在します。子供と一緒におじいさんやおばあさんも移民してきた中国系の人たちが多いのですが、彼らは全く英語を話さずにカナダで暮らしています。そういう人たちのことをアロフォンと言っております。移民した人の子供たちは英語を身につけますので、どんどんアングロフォンになっていきます。この3つの言葉はカナダでよく聞かれる言葉です。民族的な出自については、今は何と250以上の民族集団がカナダに存在しています。

人口の過半数——正確には58%がカナダの二大建国民族でありますイギリス系かフランス系の人たちなのです。後で述べますが、純粋なイギリス系、純粋なフランス系は、今余りいません。特にイギリス系の人たちの多くは、他の民族との混血です。それから、イングランド系、スコットランド系、アイルランド系がいわゆるイギリス系（英系）、13.4%がフランス系です。フランス系というのは民族的な出自で、先祖がフランスのほうからやってきたという意味です。そのほかの民族で一番多いのはやはり中国系です。これが180万人、今、人口の5%を占めています。

それから、2番目に多いのがインド系です。90年代からITを専門にする移民が、インドやバングラデッシュからカナダにかなり移民してきています。

それから、過去10年間、非常に伸びが目立つのがフィリピン系の人たちです。特に最新の2016年の国勢調査、そしてその前の2011年の国勢調査の結果を見ますと、中国系よりもフィリピン系のほうが移民としての数が多かったのです。すでに言いましたように、国民の40%が混血なのです。特に移民の時期が早かった人たち、イギリス系、フランス系、そしてドイツ系とかイタリア系ですね。とにかく混血が多いです。

1つ例を挙げますと、私がオタワに住んでいたときに隣の家が、そこのお父さんはイギリス系のカナダ人、お母さんが日系カナダ人。血筋的には、お母さんは全くの日本人なのです。この夫婦の子供は半分イギリス系で半分日系になります。最近、その長男が結婚し、その女性というのは、結局、フランス系とアラブ系の混血なのです。生まれた子供というのが、4つの民族が入っていますよね。フランス系、アラブ系、それからイギリス系

と日系が入っています。カナダの国勢調査では民族的な出自が尋ねられますが、自分が何の民族が入っているのか、すべてを答えられない人たちが結構います。それぐらい混血が進んでいます。最近、カナダは変わった商売がはやっていて、自分のつばを分析することによって自分の出自がわかる、というものです。自分は何とイタリア系が入っていたんだということが初めてわかる—それがテレビのコマーシャルで頻繁に放送されています。

カナダは年間約25万人もの移民を受け入れています。最近、移民の過半数がアジア系で、大都市に集中しています。カナダは、1867年にイギリス系とフランス系がつくった国ですので白人が人口の大半を占めていました。ところが、今は国民の20%がいわゆるビジブル・マイノリティと呼ばれる人たちです。これは何かというと、日本語に訳すと「可視的少数派」です。ぱっと見て白人ではない人たちのことです。ただし、カナダの先住民はビジブル・マイノリティには入りません。先住民は移民ではなく、最初からいた人たちだからです。

それから、ビジブル・マイノリティは大都市トロントとバンクーバーでは人口の約半分を占めています。私は子供時代にトロントで過ごしていましたが、最近のトロントに行くと、本当にびっくりするほど変わりました。昔は、小学校のクラス写真を撮ると、私1人がアジア系だったのです。妹のクラスには中国系と黒人が1人ずついましたが、それくらい少なく、あとは全員白人だったのです。ところが、今のトロントの小学校の写真を撮ると、半分ぐらいが白人ではない人たちなのです。皆さん、トロントとかバンクーバーのバスや地下鉄に乗る機会がありましたら、そのときにちょっと中を見渡していただきたいんですが、白人のほうが少ないのです。先日、トロントの地下鉄に乗っていて、見回したら、ほとんどがアジア系やインド系なのです。最近、黒人もちらほらいますけれども、そういう公的機関の中では白人のほうに本当に少なくなりました。これが実態です。

私の勤務先の大学はカナダに留学したいと思う学生がたくさんいますが、幻想を持っている学生が多いです。カナダといったら雄大な自然があって、きれいなカナダ英語で、そしてホストファミリーには白人のお父さんとお母さんで、髪の毛がブロンドで目がブルーで、といったイメージを持ってカナダに行くと、結局、ホームステイ先の多くはフィリピン系だったり、中国系だったりして、町を歩くと白人が少ないので、愕然とする人たちが結構います。それがカナダの大都市の現実なのです。ケベック州の田舎のほうに行けば、逆に白人しかいないのです。だから、田舎のほうは白人社会といえます。

配布資料の母語人口のグラフをみましょう。これは昔からの母語人口の推移です。母語

というのは、定義が国によって違うのですが、カナダの場合は「幼少のころ、最初に覚えて今でも理解できる言語」と定義されます。カナダの英語の母語人口はずっと水準で維持されています。フランス語の母語人口はどんどん減っていった、最新の2016年の国勢調査ではフランス語の母語人口は20%切っています。昔、1867年にカナダが建国されたときはフランス系、イギリス系、半分半分でした。ところが、今、フランス語を母語とする人たちがどんどん減ってきています。逆にその他、要するに移民の人たちの言語がどんどん上がっていった、今はフランス語を少し上回る程度になっていて、今後、この傾向は強まると予想されます。

それから、公用語の知識です。カナダ人といったら、カナダは英語とフランス語が公用語になっていますので、みんなフランス語と英語の両方がぺらぺらだろうと思われるかもしれませんが、何とカナダ人で英語とフランス語の両方できる人たちは17.9%です。5人に1人もいないのです。どこにいるかということ、ケベック州とオタワ、あとカナダの東のほうのオタワからモントリオールに至るまでの「バイリンガルベルト」と呼ばれる地帯に集中しています。だから、皆さんが行かれるバンクーバーとかトロントは、フランス語を学校で少し習ったという程度の人はいるとは思いますけれども、ほとんど普通に話せません。カナダ全国では、英語しか話せない人たちが68.3%、フランス語しか話せない人たちが12%ぐらいです。それから、どちらも話さない人たちも若干いますが、この多くは、高齢になってからカナダにやってきたしてきた人たちです。

州別の表を見ると、カナダの東のほうのいわゆる大西洋沿岸州は圧倒的に英語州です。ニュー・ブランズウィック州、例のケベックの東隣の小さい州で、ここはバイリンガル人口がかなり多いです。ケベック州、特にモントリオールはバイリンガル人口、英語、フランス語の両方ができる人が多いです。すでに言いましたように、ケベック州でも田舎のほうはフランス語しかできない人が多いのです。モントリオールにはバイリンガルが大勢います。レストランとかお店に入ると、そこで働いている若い人たちは見事なバイリンガルで、英語とフランス語、どちらも母語のように話します。そういう現象がこのケベック州のモントリオールで見られます。それから、ケベック州で英語しか話せないという人は大変少ないです。カナダの州の中で一番特殊なのはケベック州だといえます。

それから、オンタリオ州には、英語、フランス語、両方できる人がかなりいますが、これはなぜかということ、オタワがあるからです。首都オタワは連邦（国家）公務員がいますので、彼らはバイリンガルでなければいけない。特に上司になればなるほど、管理職にな

る場合には必ず英語、フランス語、両方ともうまく使えなければなりません。フランス語を母語とする人たち（フランコフォン）が連邦公務員になった場合、もともとバイリンガルの人が多いので、簡単にバイリンガル・テスト（第二公用語試験）に合格するのです。しかし、英語を母語とする人たちが国家公務員になる場合、すごく苦労します。能力的にはすばらしくても、管理職になるためにはバイリンガル・テストを受けなければいけない。それに合格しないと、どんなに能力があっても管理職になれないのです。

私の博士論文が実は公用語政策についてでした。オタワの連邦公務員の人たちにインタビューを行ったり、アンケートを実施したりして彼らの言語選択を見ましたが、アングロフォンがバイリンガル・テストに合格できなくてノイローゼになったという人もいました。必死になってフランス語を勉強して、やっと管理職になったというアングロフォンもいました。

皆さんが行かれるブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバーを見ていただくと、英語とフランス語を話せる人たちというのはかなり少ないです。イマージョン教育、つまりフランス語で教育を受ける小学校、中学校、高校がバンクーバーに存在します。そこに通った人たちはある程度のフランス語を話しますが、生活のなか、あるいは仕事でフランス語を話しているかという点、連邦公務員にでもならない限り、バンクーバーではそういうことはありません。

カナダの歴史

それから、歴史です。カナダの歴史は短いですが、まず、アジアの方から先住民がやってきました。その後、ヨーロッパから人々が到来するのですが、最初にカナダに到来したヨーロッパ人は、実はイギリス系でもフランス系でもなく、バイキングの人たちなんです。しかし、彼らはカナダに恒常的に定住することはありませんでした。最初に定住したのはフランス人たちでした。

ここに書いてありますヌーヴェル・フランス時代、これは英語で言うとニューフランス、つまり、新しいフランス植民地という意味です。シャンプランというフランス人が探検して、ケベックに初めて植民地をつくりました。皆さんはトロントまでは行かれますが、モントリオールやケベックのほうには行かれないと思います。あの辺、冬に行ったらわかることですが、すごく寒いのです。さきほど私が言ったように、マイナス40度になることもあります。シャンプランが最初の船で連れてきたフランス人たちは、自分を含めて

28名いたのですが、最初の冬を越せたのが8名のみ。残りの20名はみんな亡くなりました。それは飢えと、あと壊血病というビタミンCが不足する病気、それから凍死で亡くなっているのです。定着がなかなか進まなかったのですが、それでも頑張ってフランスからいろんな人、そして物を持ってきて冬を越せるようになって、150年のフランスの植民地時代が続くのです。

それから、フランスとイギリスはたびたび戦争しておりましたが、1700年代のフレンチ・インディアン戦争でイギリスが勝利したため、結局、ヌーヴェル・フランス植民地は消滅し、イギリス領となるのです。そして1763年から正式にイギリス支配が始まります。

皆さん、この表をご覧になって不思議に思うかもしれませんが、米英戦争という戦争がありました。カナダがまだ植民地だった時代なので、米英戦争という言い方が一般的ですが、米加戦争ともいいます。実はカナダとアメリカの間で戦争が起こっていたのです。私の大学の授業の中でも、このことを話すとみんなびっくりします。カナダとアメリカが戦争をやっていたの、信じられない、と。このころ、まだカナダがイギリスの植民地だったとき、カナダ軍がアメリカの首都ワシントンDCに行き、大統領が住んでいる家、つまりホワイトハウスを焼いたのです。数カ月前にアメリカ軍がカナダに侵入してトロントを焼き討ちにしたその報復です。それが6月末なのですが、毎年、今日が自分たちがホワイトハウスを焼いた日だ、と誇らしげに書いた記事がカナダの新聞に出ております。

カナダが存在するということが奇跡で、常にアメリカ合衆国の侵略を防御していたのです。頑張って防御していなかったら、皆さんがこれから行かれるバンクーバーのあたりはアメリカ合衆国になっていたはずなんです。アラスカがアメリカというのは皆さん御存じだと思いますが、アメリカはそれをロシアから買ったのです。アメリカは、西のほうの例の太平洋沿岸、今のブリティッシュ・コロンビア州とかユーコン州があるあたりを全部、アメリカ合衆国にする意図を持っていました。だから、カナダとアメリカはそのころ、西のほうの領土をめぐる戦っていたのです。

アメリカから領土を取られまいと、カナダは鉄道を敷設しました。カナダが1800年代、15年間というすごく短い間にカナダの東のほうのモンリオールからバンクーバーまでの4,000キロに、15年間で鉄道を引いたのです。そして、モンリオール、トロントに既にいたカナダ人をバンクーバーに送り込んで定着させて、アメリカの侵略を免れたのです。そうやって、カナダが大西洋から太平洋の海から海までの大きな領土を獲得したわけです。カナダの建国は1867年、明治維新の1年前、日本の近代化とほぼ同じ時期に近代化の

道を歩きました。アメリカ合衆国の反英的・膨張主義的な動きを防御するために結局カナダが建国されたのです。

カナダが建国されたとき、カナダという名前ではありませんでした。1867年の時点では **Dominion of Canada** という言い方をしておりました。この **Dominion** とは、自治領と訳しておりますが、完全な独立国ではなく、外交権に関しては、カナダは全く何もできず、親元であるイギリスがカナダの外交を担っていました。だから、1890年代のボーア戦争も、第一次世界大戦も、イギリスが参戦したのと同時に、カナダも自動的に一緒に参戦しなければいけない、そういう時代があったのです。

それから、カナダは自分の憲法をイギリス議会の承認なしで修正できませんでした。それが、1982年までずっと続いていました。1982年、カナダの新憲法ができました。1867年のカナダ建国時にも憲法が公布されました。つまり、カナダに2つ憲法があり、2つ目の1982年の憲法の中で、イギリスの議会の承認を経ずにカナダの憲法を修正する権限をカナダが得たのです。それが1982年ですから、完全にカナダがイギリスから独立国になったのは36年前と言ってもいいかと思います。

イギリスとカナダは親密な関係にあるまま、カナダが独立しましたが、建国のいきさつについて歴史家たちは、アメリカのことをイギリスからけんか別れした粗野な親不幸な長男だとよく呼んでいます。他方で、カナダは大英帝国 **The British Empire** の忠誠な長女であると。とても親と仲がいい娘であると。そして、親が娘をお嫁に出すためにひとり立ちさせて、お嫁に行っても、しょっちゅう親元に帰って親に甘えているという関係が続き、今でもカナダとイギリスは仲がいいのです。

例えばウィリアム王子とキャサリン妃が結婚したとき、今は子供が3人いますが、新婚だった数年前、最初に外国に行った公式訪問先の新婚旅行を兼ねた旅行が、オーストラリアでもどこでもなく、カナダだったのです。カナダ人も、それを大変喜んでいて、至るところで大歓迎されていました。そして、カナダが何か大きな行事があると、エリザベス女王か、あるいはウィリアム王子が来ることになっております。

今でもカナダにはイギリス的なものが残っております。皆さんはカナダに行かれたら、イギリス的な建物を多く目にするでしょう。

今でも残っている制度は、まず形式上、女王を国家元首にしていることです。これはイギリスのエリザベス女王です。しかし女王はイギリスにいますので、女王の名代として総督 **Governor General** と呼ばれる人がカナダにいます。

それから、カナダの議会のいろんな委員会があります。その名称に必ずRoyalがつきませんが、Royalを「王立」と訳さないほうがいいです。カナダには基本的に王様はいません。シンボルとしてのエリザベス女王ですから、Royalというのを訳す場合、私は「政府」と訳しています。

それから、カナダの連邦警察はRoyal Canadian Mounted Police (RCMP)と呼ばれ、オタワにいと、バッキンガム宮殿でよく見るあの光景が見られます。衛兵さんたちが赤い制服を着て、頭には熊の毛皮の帽子をかぶって行進する。この連邦警察の名称にもRoyalがつくというのはイギリスの名残が残っている証拠です。

それから、アメリカと日本の間には大使を置いています、イギリスとカナダの間は大使Ambassadorを交換せず、High Commissionerを交換しています。イギリスは特別ということです。また、女王の誕生日を全国あげて祝うなど、親密さが見られます。

これまで脱却した制度としては国旗です。イギリスのUnion Jackを50年ぐらい前まで使っていました。今のカナダのメープルの国旗はたった50年前に制定されたのです。「O Canada」というのがカナダの国歌で、オリンピックでもこれが流れますが、私の子供のころは「O Canada」が歌い始められたころで、2つ歌っていて、1つは「O Canada」、それに続いて、イギリスの国歌である「God Save the Queen」を歌っていました。今はイギリスの国歌は歌われていません。

それから、国民については、「カナダ人」が制度上、存在するようになったのは1947年からなのです。それまでは、カナダで生まれてもイギリス臣民でした。臣民は英語にするとSubjectです。Subjectといえば「何々に所属する」という意味になりますが、イギリス国民でもなく、カナダ人でもなく、1947年までイギリス臣民と言われていました。

それから、カナダの郵便制度です。今はCanada Postと言っていますが、昔はRoyal Mailと言っていました。カナダの軍も昔はRoyal Canadian Air Forceと一々Royalがついていたのですが、今はCanadian Armed Forcesという言い方をしてRoyalが全部外されております。

昔はエリザベス女王の名代である総督はイギリスから来ていました。それをやめて、カナダ人総督が初めて1952年に誕生しました。そして私の子供のころは、高速道路の名前に一々RoyalとかKing、あるいはQueenがついていましたが、今では番号がつくハイウェイになっています。

それから、カナダ史のポイントですけれども、配布資料に「1960年代以降『ケベック問

題の台頭』」と書いてありますが、1960年代以降にケベックの独立問題が浮上してきて、カナダ政治は、このケベック問題に振り回されておりました。つい最近までです。

私はもともと大学の教員なのですが、オタワの日本大使館に赴任したのは、ケベック問題が表面化していたからです。ケベックは独立をめぐる州民投票を2回行っています。1回目が1980年、2回目が1995年で、私がオタワの大使館に呼ばれたのが1995年のときで、州民投票が行われたときに、独立賛成派と反対派の勢いが極めて拮抗していたのです。独立に賛成が49.4%、反対が50.6%。その票差はたったの5万票でした。その日の気分でノーに投票した人が、やっぱりイエスにしようと思って2万5000票ちょっと、イエスのほうに投票していたら、今ごろケベックは独立国家になっていました。それぐらい衝撃的な結果でした。日本の外務省が、ケベック事情を研究し、かつ英語とフランス語が使える人間を探していたので、ケベック問題の調査のためにカナダに赴任しました。

移民の増加と多文化主義

それから、移民の増加による多文化主義社会へ。今のイケメン首相として知られるジャスティン・トルドーの父親のピエール・トルドーが、近代カナダの基盤を築いた人です。1982年の新しいカナダ憲法、多文化主義政策、公用語政策などを彼が策定しました。彼は1971年に多文化主義政策を国の政策として採択することを宣言しました。

多文化主義政策が採択された理由は移民の増加にあります。1970年代にはカナダの人口における移民の割合が全体の25%ぐらいになっていました。英語とフランス語以外を母語とする国民が大きな存在になってきたため、彼らを尊重せざるを得なくなりました。そのため、多様な民族集団の文化や言語の振興のために政府の予算が割り当てられました。

実際にどういうことが行われたかという点ですが、例えば、私がトロントに住んでいた子供のころ、土曜日の朝だけ、日本語学校に行っていました。土曜日といたら、小学校、中学・高校は普通閉まっていますので、その校舎を午前中使わせてもらって、日系人の子供たちは日本語を習っていました。その運営費は日系人の保護者たちが払っていたのですが、政府が運営費を補助してくれるようになりました。

それから、私の母はトロントの日系カナダ文化会館でお茶の先生をボランティアでして、父は合気道の先生をしていたのですが、そういう活動にも補助金が出るようになりました。このように種々のイベントを政府がサポートし、1971年以降、政治家が視察に来ることもありました。それまではアジア人は差別されていました。

私の子供のころ、1960年代から70年代にかけてカナダはまだ差別的な社会でした。その前の時代、第2次世界大戦中には日系カナダ人は強制収容所に入れられました。日本の同盟国だったドイツとイタリアの移民はカナダにたくさんいましたが、彼らは強制収容所に入れられることはなく、日本人だけが入れられました。その理由は紛れもなく差別です。日本人たちが強制収容所からやっと解放されてバンクーバーに戻ろうと思っても戻りませんでした。なぜならば、日本人が住んでいた「リトル東京」が中華街になってしまったからです。皆さん、バンクーバーに行かれると、恐らく中華街を訪れると思いますが、そこは昔、日本人街だったのです。強制収容所に2万1000人の日本人、子供もお年寄りも、北のほうの家畜小屋のようなところを改造して建物に入れられ、約5年間、外に出られませんでした。自宅を退去するとき、家も、家財道具、そして漁師たちの船も、カナダ政府がオークションで全部売り払ったのです。戦争が終わった後、日本人は強勢収容所から解放されましたが、バンクーバーへ戻れないから東のほうに行かされました。トロントやモントリオールなど東のほうの大きな都市に行きました。だから、トロントに今大きな日系人コミュニティが存在するというのは、そういう経緯があったからです。そして、日本人は固まって住まない傾向があります。今、日本人街はカナダにはありません。昔からいる日系人は、戦時中の収容の記憶がありますから、彼らはあえて一緒に住まないで、兄弟や親戚はあえて少し離れたところに住む傾向があります。そのようなメンタリティーなのです。

1988年に当時のカナダのマルルーニー首相が謝罪し、謝罪の気持ちとして補償金を収容所に入っていた日系人に対し、1人当たり2万ドル渡しました。日系カナダ人は非常に苦勞しております。もちろん中国系カナダ人も相当苦勞しております。そういったことも頭に入れてバンクーバー、トロントに行かれたほうがいいのではないかと思います。

移民の歴史について少し話します。1867年のカナダの建国時は、人口はイギリス系とフランス系が大体半分半分でしたが、その後、移民がヨーロッパのほうからどんどん入ってきます。なるべくアジアからは移民を入れない政策でした。ところが、一時期、カナダ政府がアジアに向けて門戸を広げたことがありました。それはカナダ政府が1880年代にカナダ横断鉄道を建設していたときです。15年という短い期間でモントリオールからバンクーバーまで4,000キロの道に鉄道を建設しましたが、、ロッキー山脈に鉄道を引くときのトンネル工事を白人がやりたがらなかったからです。白人が最初していたのですが、あまりに危険だったので、アジアに門戸を広げて、一時的に中国人を移民させ、男性で働ける中

国人たちは鉄道工事に従事させられたのです。何百人もの中国人がこの工事に駆り出されて亡くなりました。工事が終わったら、政府は中国に対する門戸を閉じました。その後は、仮に中国からカナダに移民として入国する場合には人頭税を課して、1人、500ドル、今のお金で何百万円ですが、それを課すという政策に移行しました。昔のカナダはそのような差別的な社会でした。

20世紀初頭のアングロサクソンの価値観というのは、イギリス系の人たちから見て、望ましい移民と望ましくない移民があり、アジアが一番下にいました。一番望ましいのはイギリスから来た人たちです。それから、西欧、北欧、フランス、ドイツ、スウェーデンなどの北欧です。また、メノナイト・ハッタライトなど、ちょっと御存じないかもしれませんが、アーミッシュと言えば御存じかと思います。ヨーロッパから移民してきた宗教的なマイノリティたちです。彼らは田舎のほうに自分たちの村をつくって、文明の利器を拒絶して生きている人たちです。今は少し変わってきたみたいですが、車に乗らずに馬車に乗るとか、電気を使わずにろうそくを使うとか、そういう生活スタイルです。それから1914年になると、東ヨーロッパ、イタリアやギリシャなどの南ヨーロッパからも移民が入るようになりました。

1960年代には、カナダの総人口が、民族別に見ると、イギリス系は45%、フランス系が30%で、その他が25%になってきました。それが1970年代になると、特にアジア系からの移民がふえてきました。1980年代になると、香港からの移民ふえました。香港は1997年にイギリスから中国に返還されましたが、その前後、かなりふえてきて、その後は、香港よりも中国大陸から入ってきております。ここ数年間、移民で一番多いのはフィリピンです。それから、ベトナムもかなりふえてきております。1970年代は、ベトナムのポートピールがカナダに相当入ってきております。

現在の移民政策

では、現在の移民政策はどうなっているのでしょうか。1967年より、開かれた差別のない移民政策になりました。これがポイント制（システム）です。今は67点以上とれば合格ですが、昔、私の父が移民したときは72点が合格ラインでした。

ポイント制では教育レベルの配点が25点です。満点は博士号を持っている人と修士号を2つ持っている人が取れます。大学卒業だったら20点になります。それから、英語またはフランス語の能力が重視され、試験で上級と認定されればマックス24点です。英語だけで

もよく、上級と認定されれば高得点がとれます。それから、職歴ですが、1つの職にフルタイムで4年以上従事していれば21点とれます。カナダ政府が欲しがっている職業についている人たちが優先的にカナダの移民として選別されます。例えば医者、科学者、エンジニア、建設業従事者などです。年齢に関しては21歳から49歳の一番働き盛りの人たちが10点、それ以上、それ以下であれば1点ずつ引かれます。カナダの勤務予定先からの契約書があれば10点追加され、そのほかの適応性——例えば配偶者がいた場合、配偶者が学歴が高いだとか、そういったところも考慮されます。それを全部合計して67点とれば、カナダへの移民資格が得られるということです。毎年25万人も受け入れています。移民受け入れは世界的にトップクラスで、4年で100万人の移民がカナダに入ることになります。カナダの人口増加に貢献しています。私がオタワの日本大使館に勤めていた20年前、人口が2,600万人でしたが、2016年の国勢調査では3,500万人になっています。これは目を見張る増加率で、将来、日本よりカナダのほうが人口が多くなるのではないかと思います。

二言語・二文化主義から二言語・多文化主義へ

多文化主義は「多数の民族、エスニック集団で構成されている国民国家が、政治的、社会的、経済的、文化的不平等をなくして国民社会の統合を維持しようとするイデオロギーであり、政策原理である」（『現代カナダを知るための57章』p.74より）と定義されます。カナダは「二言語・二文化主義から二言語多文化主義へ」と政策を転換させます。なぜカナダは公用語として、英語とフランス語の両方を制定しなければならなかったのか、という点ですが、これはケベック問題が顕在化していたからです。ケベック州の分離・独立運動が1960年代の初めから台頭しました。それに対して、カナダ政府はケベック州の分離を阻止するため、ケベックのフランス系カナダ人が一体カナダのどこに不満を持っているのかというところを調査しました。それが二言語主義・二文化主義に関する政府調査委員会です。そうすると、フランス系カナダ人はいろんなことに不満を持っていたということがわかりました。所得を見ても歴然としていました。フランス系カナダ人の所得はイギリス系の血筋の人たちに比べてずっと低かったのです。また、国家の中核機関である国家公務員のほとんどがイギリス系、つまり英語を話す人たちでした。フランス系が公務員にいたとしても、彼らは英語で働かなければならなかったのです。

では、フランス系が満足するために何をすればいいかと政府は考え、フランス語を英語と一緒に公用語にすることを考えたのです。フランス語といえば、ケベック州を中心とす

るカナダ東部に住む一部の人たちの母語です。それを国全体の公用語にすることによって、フランス系の人たちが少しは満足するだろうとカナダ政府は考えたのです。そして、1969年に公用語法が制定されました。

しかし、その後、今度は別のところから不満が出てきました。移民からです。カナダが二言語、二文化の国であるという政府の方針に、非イギリス系、非フランス系の人たちの不満が噴出したのです。そして結局、移民の人たちを満足させるために、また委員会を立ち上げて調査させ、これが二言語・多文化主義政策となったのです。それが1971年に、今の首相の父であるピエール・トルドーが出した政策です。だから、公用語政策も多文化主義政策も国民の不満を静めるためにとった政策といえます。

結局、トルドーの主張は、多文化主義政策を採択して、移民の人たちの文化と言語を尊重するが、二言語主義という点では譲れない、ということです。国の公用語がたくさんあれば混乱します。英語とフランス語だけでも、全ての政府の文書を英語とフランス語の両バージョンつくらなければならない、政府機関内の業務言語を英語とフランス語にしなければならない。移民の増加により、カナダに存在する民族は200以上もあります。彼らの言語を全部公用語にしてしまうと、これは混乱するだけでなく、お金もかかります。例えばカナダ連邦政府機関の建物の看板。英語とフランス語で出すことになっていますが、それを200以上の言語にするというのは無理があります。それから、政府機関に電話をかけると、留守番電話で“*For English, press 1.*”（「英語は1番を押してください」）、“*Pour le français, numéro 2.*”（「フランス語は2番を押してください」）と流れますが、それを200言語でやったら、たとえば日本語は38番を押してください、というふうに、ずっと聞いてなければならない。それはあまりにも時間がかかります。公用語は、少なければ少ないほど国家運営が楽なのです。トルドーは、それを承知で、公用語としては英語とフランス語の二言語で行く、という点だけは譲りませんでした。しかし、多文化主義の推進には大いに政府の予算を割こうということです。政策の内容としては、例えば移民の子供たちが親の祖国の言語を学習する機会を設ける—これを継承言語*heritage language*教育と言っています—など、様々です。

また、多文化主義の運営を担う省が設立され、その担当大臣もいます。この省は名称がこれまで何度か変わり、今は*Canadian Heritage*です。*Heritage*といえば遺産という意味がありますが、カナダ遺産省と言ったら変な訳ですので、私はカナダ文化継承省と訳しております。そして、1988年に当時の首相のマルルーニー首相が、トルドーがつくった多文化

主義政策を具体化するような形で多文化主義法という法律を制定しました。この多文化主義法の主要な柱の一つが人種差別の撤廃でした。禁止事項は店とかサービス、宿泊へのアクセスの拒否です。これは実際、1950年代くらいまで有色人種に対してあった差別です。それから、就職の際の採用の拒否、白人ではないから採用しない、賃金の不平等、といった差別です。また、1982年憲法には「権利及び自由に関するカナダ憲章（いわゆる「人権憲章」）」が盛り込まれ、民族だけでなく、性別、宗教、年齢、身体的障害に基づく差別をカナダでは完全に禁止することが明記されました。また、カナダ人のこうした人権を擁護するために、カナダ連邦政府は救済措置としてカナダ人権委員会、およびカナダ人権裁判所を設立しています。

多文化主義社会の現状

カナダは移民を毎年25万人受け入れています。約半分が「熟練労働者」というカテゴリーで、次に多いのがその「呼び寄せ家族」です。また、ビジネス移民というカテゴリーはお金を持っていればカナダに移民できるのです。日本円にすると8,000万円以上の資産があり、そのうち、日本円で4,000万円をカナダ政府に預ける。カナダ政府は5年間運用して、利子を取り、5年後にそのまま戻してくれる。もう1つは投資家移民というカテゴリーがあって、カナダにお店などビジネスを設立してカナダ人を雇い、雇用創出に貢献しなければいけない。これも何千万円か、かなり大きなお金を持ってないとできない。このビジネス移民はポイント制のテストを免除されます。

それから、難民です。毎年、大体25万人のうちの10%が難民で、ここ2年は、既にシリアだけで2万人もの難民が来ています。これはジャスティン・トルドー首相の政策です。

その他というカテゴリーのなかに「住み込みの手伝いlive-in caregivers」枠があります。私は大使館に勤めていて、夜遅くまで仕事していましたので、子供たちの面倒をみる住み込みのお手伝いさんが必要でした。このカテゴリーには、ポイント制のテストで67点に届かなかった女性たちが応募してきます。そうして、私は自分のところにそういう人を1人雇いました。ハンガリーからの女性で、彼女はハンガリーの看護師の免許を持っていたのに、カナダでそれが通用しなかったのです。カナダで看護学校に行き直さなければ看護師としてやっていけなかったのです。うちの家で3年ぐらい住み込みで働き、その後、貯めたお金でカナダの看護師学校に行き直し、現在は看護師として働いています。去年トロントに行ったときに彼女と再会したのですが、何とトロントの大きい病院の婦長になって

いるのです。

最近、「カナダ経験クラス」というカテゴリーができました。カナダに既にいた人たちです。カナダの大学を卒業してカナダで働いたことのある人たちが移民申請する場合、ポイント制のテストを受けなくていいのです。カナダのことをよく知っているだろうし、英語かフランス語か、どっちかできるだろうということで、彼らは優先的にカナダに移民できるようになっています。

それから、多文化主義について最近言えることは、ビジネス界の上層部や政界に目覚ましくイギリス系、フランス系以外の人たちが入ってきている。総督にも就任しています。総督はカナダでは最重要ポストですが、1990年代からは英系の男性以外の人たちが総督になっています。中国系のクラークソンという女性も、ハイチ系の黒人女性もなりましたし、現在の総督は、宇宙飛行士をしていたケベック州出身のフランス系の金髪女性です。

多文化主義の問題点

多文化主義の問題点は最近顕在化しております。まず、公用語政策に関して苦情が出ています。これは皆さんが行かれるバンクーバーのほうからです。バンクーバーに行かれたらわかると思いますが、至るところに、中国語の看板が出ております。公用語であるフランス語がなくても中国語の看板があったりします。要するにフランス語を話す実態がないから、そういうふうになっているのですが、バンクーバーの中国系からは、カナダの公用語がフランス語と英語両方というのはおかしい、バイリンガルであるのはいいけれども、少なくともバンクーバーは英語と中国語にしてほしい、そういう声が聞かれます。

それから東のほう、これは特にモントリオールで顕在化した問題ですけれども、マイノリティ宗教をめぐる社会問題です。イスラム系、ユダヤ系だとかシーク教徒が、自分たちが移民した後も自分たちの宗教的な慣行を続けて周りに迷惑をかけていると。

いろんな例がありますが、1つ、モントリオールのユダヤ系の人たちの例を挙げます。彼らは安息日である土曜日に彼らの教会、シナゴグに行きます。正統派のユダヤ系の人々は真っ黒いものを着て、特殊な恰好が目立ちます。彼らのシナゴグの隣にYMCAがあり、その1階がスポーツ・ジムになっていて、窓ガラス越しに女性が運動しているのが見えるのです。女性が運動するときの恰好はTシャツやタンクトップ、足むき出しでかなり肌を露出しますが、ユダヤ系の正統派の人たちは、女性の肌を見てはいけなそうです。それを見たくないということで、ユダヤ系の人たちがYMCAに対して、窓ガラスを曇

りガラスにしてほしいという要望を出し、YMCAはその要求を受け入れたのです。このことがある新聞記者の目にとまって新聞に書き立てられました。少数派の人たちの意見を多数派であるカナダ人の自分たちがどこまで受け入れなければいけないのか、という主旨の記事でした。すると、大きな論争に発展し、ユダヤ系だけではなく、シーク教にもイスラム教にも問題があるという指摘がメディアを賑わせました。例えばイスラム教が病院に入院するとき、ベッドの頭の向きをメッカの方角に向けなければならない、といった話など、いろいろ出てきて大論争になったのです。

この状況を重く見たケベック州政府が立ち上がり、ケベック州政府の当時のシャレー州首相が提唱して、ブシャール＝テイラー委員会が設立され、ケベック州中でこの問題について公聴会を開いて、住民たちの意見に耳を傾けました。ブシャールはフランス系カナダ人の歴史家であるジェラルド・ブシャール、テイラーは哲学者のチャールズ・テイラーです。テイラーは日本でも有名で、ハーバード大学の教員を務めたこともある、モントリオール出身の英語系のカナダ人です。ケベック州首相の任命のもと、この2人をリーダーとした委員会が調査を行って報告書を公表しました。

結局、彼らの提案というのは、少数派の意見をなるべく尊重しつつ、主流派の人たちも歩み寄り、できるかぎり妥協点を見つけましょう、というものです。そういった提案を「妥当なる調整」と私たちは訳しました。フランス語ではaccommodements raisonnables、英語で言うとreasonable accommodationです。この報告書はケベック州だけではなく、カナダ中で話題となり、2011年に日本語に訳して出版しました。和訳の本のタイトルは『多文化社会ケベックの挑戦』（明石書店、竹中・飯笹・矢頭訳）です。

政治制度と政治家

立憲君主制については、カナダの国家元首がイギリスのエリザベス女王だという点をすでに言いました。現在の総督は、Julie Payetteという女性で元宇宙飛行士です。また、カナダは議院内閣制で、日本と同様のシステムです。それから連邦制がカナダの政治制度の三つ目の特徴です。

カナダの政党は、従来、二大政党制で、自由党と保守党です。保守党はいろいろ名前を変えておりますけれども、今はまた保守党という名称に戻っています。

二大政党制が突然崩れた時期がありました。それが1993年です。この年に、保守党から自由党へと政権交代があり、それが長く続き、再び保守党に政権交代したのが2006年で

す。そして2015年、ジャスティン・トルドーが率いることになった自由党が政権を掌握しました。選挙制度については、日本は小選挙区制と比例代表制ですが、カナダは小選挙区制だけになっています。

首相は、日本の衆議院にあたる連邦下院の第一党（与党）の党首です。派閥はなく、閣僚人事では日本のような根回しはみられず、首相が決めます。ジャスティン・トルドーは、ピエール・トルドーの息子ということでシンボリックな存在で、政界に入る前は高校の先生でした。父親のピエール・トルドーは弁護士資格を持って大学の先生をしていました。

それから、カナダの首相について多くの人たちが不思議に思うことがあります。それは1968年以降、カナダの首相は、ほとんどがフランス語系、そしてケベック州出身なのです。今もそうです。ジャスティン・トルドーはオタワ生まれでモンリオール育ち、父親はモンリオール出身で1968年から1984年まで首相を務めました。1979年、クラークという、ケベック州出身ではない人が6カ月ほど首相になったことがあります。しかし、またトルドーが首相になって、その後1984年からはマルルーニーで、彼はアイルランド系ですが、フランス語のほうが強いです。彼もケベック州出身です。それから、1993年からクレチエンでしたが、彼もケベック州出身のフランス系です。それから、2003年から首相を務めたマーティンもフランス系の人です。それから、ジャスティン・トルドーです。トルドーの前は、ハーパーという人がアルバータ州からの首相でしたが、それ以外は、カナダの国の首相がケベック州出身、あるいはフランス語系の政治家です。

それはなぜか。ケベック問題があるからです。フランス語ができない英語系の人を首相に据えるとケベックは本当に独立してしまうかもしれないという危惧があったため、フランス語ができる、あるいはフランス系の血筋の人物、あるいは、フランス系ではなくても、ケベック州出身でフランス語ができる人物を首相にしているのです。

また、カナダの政治家の特徴として他に挙げたいのは、二世議員は極端に少ないということです。それに選挙区は地元でなくてもいいのです。それから、汚職は少ないほうだと思います。また、弁護士資格をもつ議員が多いです。だから、議会での議論でも、議員たちは何も読まずに丁々発止とやり合います。

連邦制についてです。カナダが建国された1867年、最初の憲法だった英領北アメリカ法のなかで、国家の権限の配分が明記されていました。連邦政府の管轄と州政府の管轄に権限が分かれていました。建国当初、連邦政府の管轄分野が多かったのですが、今は、州、

あるいは連邦と州の両方へと権限が移った分野が多くあります。連邦政府の管轄が国防、外交、国際貿易、市民権、連邦警察、刑法、移民、先住民問題となっています。連邦と州の共同で管轄しているのが移民、農業、環境です。

州・準州の管轄であるのは教育です。そのため、州によって教育のシステムが全然違います。例えばケベック州では大学は3年制です。大学に行くためのコレッジで2年間、基礎教育を受けます。中学校と高校が合わさったものがケベック州では5年です。だから、ケベック州は中学校・高校が5年、コレッジが2年、大学は3年です。ほかの州は、大学は4年制です。オンタリオ州は高校3年、中学校も3年。それも時々変わったりします。システムが州によって違います。教育は州の管轄なのです。また、土地所有、保健、自然資源、高速道路、州警察も州と準州の管轄になります。

それから、自治体の管轄ですが、たとえば、ごみのリサイクル関係や公共交通機関がこれにあたります。例えばトロントではTTC (Toronto Transit Commission) が市の地下鉄、バス、路面電車を運営しています。モントリオールも市営のSTM (Société de Transport de Montréal) が地下鉄とバスのシステムを運営しています。

それから、除雪作業は、カナダの東のほうでは絶対必要です。特にモントリオール、オタワは雪が時々2メートル、私の身長よりも高い高さに積もることがあります。除雪をする業者と契約を結んでいなかったから、ある日、朝起きて玄関があげられない、1階の窓が真っ白になっている、そういう状況があります。これは自治体の管轄になります。それから、自治体レベルの警察もあります。消防車や救急車の運営も自治体の管轄になっています。

カナダに2つ憲法があると言いました。1867年の建国時の憲法の内容が連邦と州政府の権限分割でした。1982年憲法はこれを補足するもので、まず憲法改正権の移管です。カナダはイギリスの議会を経なければ憲法改正できなかったのですが、新憲法の公布により、カナダだけで憲法を改正できるようになり、その手続のルールが明記されています。また、カナダには、それまで人権憲章が憲法の中に盛り込まれていなかったため、新憲法に人権憲章が入れられました。

ところが、ケベック州は1982年憲法をいまだに承認していないのです。これは本当に変則的な状況で、ほかのどの国を見ても、こんな国はないと思います。例えば日本国憲法を千葉県だけが承認していないというような状況です。それが今でも続いております。それでもカナダの憲法はケベック州に適用されていますが、政治的な立場から、ケベック州政

府はこれを承認していないということになっています。

1982年憲法を改正する方向で、要するにケベック州のフランス系カナダ人が喜ぶ、満足するような方向で改正案が二度試みられましたが、結局、これはほかの英語州によって否決され、1992年の二度目の否決の直後からケベックの独立運動が再燃しました。1994年にケベックの分離・独立を支持する政党であるケベック党がケベック州政権を奪回し、1995年に第2回目のケベック州の分離をめぐる州民投票が行われたのです。

カナダ雇用公平法

カナダの公用語政策ですが、これは私の専門分野で、話すと時間がかかりますので、配布したプリントのほうを皆さんに見ていただきたいと思います。むしろ、最後に、カナダの雇用公平法についてお話します。Employment Equity Act という法律が1995年から施行されています。これは内容的には、「何人も能力に無関係な理由によって雇用の機会や福利厚生を否定されることがないように職場における平等を達成することを目的とする。この目的を達成するため、女性、先住民、障がい者、ビジブル・マイノリティの人々が受けてきた不利な状況を是正する必要がある。雇用の公平性とは、人々を同じように扱うだけでなく、特別な措置と相違の調整をも要することを意味する」というものです。

これはどういうことかということ、社会的に不利な立場に立たされている少数派 minorities を4つ指定しています。その4つの一つ目は、女性です。人数的には女性のほうが若干多いですので、数の上では少数派ではありませんが、社会的な弱者ということです。2番目は先住民です。3番目は障がい者です。4番目がビジブル・マイノリティ visible minority で、これは非白人で先住民を除く人たちです。

この4つのグループが人口比例に、例えば女性だったら大体50%存在します。先住民だったら大体3%存在します。障がい者だったら、これは誰を障がい者に入れるかによっていろいろ変わってきますけれども、先住民と同じぐらい、2~3%は存在する、と考えられます。ビジブル・マイノリティ、これはカナダ全体で言うと20%ぐらいになっております。トロントやバンクーバーに行けば、ビジブル・マイノリティの比率は50%近くになりますが、カナダ全体で見ると20%くらいです。だから、この比率を職場が守らなければいけない。遵守しなければ、状況を是正するよう勧告されます。

対象となる機関は連邦公務員 federal public servants、これは国家公務員です。それから、民間企業でも、カナダ憲法の中で連邦の規制を受けることが定められた民間企業、大

手銀行などがそうです。カナダには全部で7つぐらい銀行があります。日本から見たら少ないと思います。それが対象になっています。カナダの航空会社は今いろいろありますけれども、最大手の航空会社であるエア・カナダは国営企業でした。元国営企業だったものがこの中に入っております。それから、鉄道会社とか、放送局です。

この法律は連邦法です。そのため、連邦公務員と連邦が定める民間企業が対象になります。州レベルでも同様の法律があります。たとえばオンタリオ州です。

私の中国系の友人がカナダの連邦公務員になっています。彼女は女性、中国人だからビジブル・マイノリティ。それに、ちょっと足が悪いので障がい者認定されています。先住民だけは該当せず、女性、障害者、ビジブル・マイノリティに三つに該当しています。このように、彼女はトリプルで優遇されて、今の職についている、と自分で言っています。

ジャスティン・トルドーが2015年に組閣したとき、自分の内閣でこれを見事に体現しました。30名の閣僚のうち、女性がぴったり15人、先住民が1人、障がい者が1人、ビジブル・マイノリティの人が5人です。この写真がトルドーの内閣です。このスライドに **Trudeau's cabinet emphasizes Equity** (トルドー内閣は公平を強調する) と書いてあります。この写真を見ると、全部数えると、女の人が15名います。それから、インドのターバンを巻いた人がいます。ここに明らかに障がい者の閣僚もいます。ターバンを巻いていないインド系もいて、この女性は先住民で法務大臣です。

この法務大臣はFirst Nationsで、これは北米インディアンのことですが、カナダでは、インディアンという言葉はなるべく使わないようにしたほうがいいです。インディアンという語は誤解のもとにつくられた言葉で、ヨーロッパの人たちが最初にカナダに行ったとき、アジアのインドに着いたと思っていたのです。そこで遭遇した人間たちをインド人だと思い込んでIndiansと呼ぶようになったと考えられています。先住民たちは、最初にいた民族“First nations”という言い方を好みます。先住民と白人の間に生まれたメイティMétisと呼ばれる人たちもカナダには多く存在します。

しかし、トルドーの内閣になぜインド系が4人もいるのか、という点が日本人の立場からみれば、公平ではないような気がします。せめて中国人が1人いてもいいのではないかなと思います。カナダには中国人がこれだけ多いわけですから。そして、この女性の閣僚は、イランで生まれてアフガニスタンで育った人です。

ケベック問題とケベック州の言語政策

それから、ケベック問題です。きょう配った資料の最後を見ていただくとケベック問題について若干書いてあります。詳細は『現代カナダを知るための57章』のなかの私が書いた章「37. ケベック問題」に具体的に書いています。まず、ケベックが独立すればどうなるか。ケベック州の位置をみていただきましょう。ケベック州の東のほうにも4つ州があります。大西洋沿岸の諸州のニューファンドランド・ラブラドール州、ノヴァ・スコシア州、それからニュー・ブランズウィック州、プリンス・エドワード島州です。この4つの州がケベックの東側にあるのです。このため、ケベック州が独立した場合、ケベックの間に挟まれてカナダが2つに分断されることとなります。この点がまず問題となり、仮にケベックが独立したら、西と東に分かれたカナダを水路、つまりセントローレンス川でつなげる、という案も出ていました。また、ケベックの中でも独立に反対する人たちが集中して住んでいる地域がありますが、そこだけは飛び地としてカナダのままにしようとか、いろいろ議論がありました。

それだけでなく、カナダ全体が解体するかもしれないという懸念もありました。カナダに内在する根本的な問題として、カナダ国民の一体性の希薄性が挙げられます。カナダの西のほうでは、中央、つまりオタワで繰り広げられる政治に対して常に不満を持っている人たちがかなりいます。先ほど触れましたように、カナダの連邦首相が1968年からずっとケベック出身、フランス語の首相になっていて、それに対してもいろんな不満があります。ですから、西のほうのブリティッシュ・コロンビア州が、ケベック州が独立すれば自分たちも独立しようとする動きが出てくるかもしれないという懸念もありました。

また、多くの移民たちがカナダに入ってきますが、カナダ国籍をとっても、カナダ文化、カナダの主流派の人たちに溶け込もうとしない人もいます。自分の祖国のほうにずっと愛着を持つ人もいます。ケベックが独立した場合、国民が統合できていないような状況が加速するかもしれません。

カナダに行かれたら、まず、やたら目につくものがあります。それはカナダの国旗です。国旗が至るところにあります。学校にも、別に祝日でもないのに国旗が掲げられている。とにかくカナダのメープルリーフをいろんなところで見かけます。カナダの小学校、中学校、公立の学校では、朝登校したら、まずカナダの国歌斉唱で始まります。私の子供たちもカナダのオタワの小学校で、私も子供のころはカナダの国歌O Canadaとイギリスの国歌God Save the Queenの両方を歌っていました。学校に行くと建物の中に入りますと、国歌が放送で流れますので、その場で直立不動で神妙な気持ちでカナダの国歌を歌わなけ

ればなりません。これは、文化継承省のCanadian Heritageが全国的に行っている政策です。

ケベック州が独立すればカナダの国力低下が最も懸念されます。カナダはG8の構成メンバーですが、ケベック州が独立したら、カナダがG8から外れる可能性があります。ケベックのGDPはカナダ全体の約4分の1を占めています。ケベックが独立すれば、カナダのGDPはオーストラリアに抜かされてしまいます。また、カナダ・ドル、それから、カナダに関する株が暴落することが予想されます。

実際、1995年の州民投票の直前、ケベックは本当に独立するかもしれない、という憶測が流れていました。独立派に猛烈な勢いがありましたので。投票の前でもカナダ・ドルが急落し、カナダ関連の株が急落したのです。独立が成立していたら、経済的な混乱が避けられなかったと思われま

さらに、州民投票で独立派が勝利していたら、事後処理が複雑で政治的な混乱が起こることが予想されます。1995年の州民投票では、分離独立派は完全な独立を提唱したのではなく、「主権達成」という言葉を使い、分離したケベックが残りのカナダと政治的なパートナーシップを構成する、つまり「パートナーシップ構想」を提唱していました。そうすると、カナダの政治機構を再編しなければなりません。独立したケベックがカナダと何らかのパートナーシップを結ぶ、というものです。世界でそのような国はどこにもありません。それを成立させるためには憲法修正を行うことになりませんが、重要事項での憲法修正は全ての州で承認を得なければいけない。それをケベックが承認しても、ほかの州は承認しないはずで

そうするとケベックは一方向的に独立を宣言するとみられ、非常に大きな政治的な混乱が予想されます。昨年、スペインのカタルーニャ州はスペインからの独立を問う州民投票を行い、独立派が勝利しました。その結果、カタルーニャ州首相が亡命し、今も政治的混乱が続いています。ケベック州も同じようなことになったかもしれません。

それから、ケベック州内の英語系の人たち、つまりアングロフォンはケベック州の独立に反対しています。先住民もケベックの独立に反対していました。さらに通貨の問題があります。カナダ政府は、仮にケベックが独立したらカナダ通貨を使わせないと断言していました。

また、ケベックが独立すればカナダの英語系の国民にとって心理的な打撃です。西のバンクーバーのほうは、ケベックが独立したいのなら、すればいいという気持ちの人

すが、私が知る限り、オタワとかトロントの人たちは、ケベックが独立するなんて考えられないという気持ちの人が多いです。

最近のケベック問題の動向ですが、ケベック州はもう分離しないと思います。恐らく州民投票も行わないと思います。重要な理由の一つとしてケベック州の言語政策の成功が挙げられます。ケベックの人たちが分離、独立しなくてもいい、カナダのままでいいと思っている最大の理由は、ケベック州におけるフランス語の優位性が確立したからなのです。

もともとケベック州はカナダの唯一のフランス語圏です。約83%がフランス語を母語とする人たちです。ところが、ケベック州で最大の商業都市であるモントリオールは、かつてカナダ一の商業都市でカナダの大企業の本社が集中する都市でした。企業の経営者たちは英語系の人たちで、その多くが英語を話すイギリス系のカナダ人でした。そこにフランス系の人たちが勤めたとしても英語で働かなければなりません。そもそもフランス系の人たちがなかなか雇ってもらえず、雇ってもらえても、下のほうのレベルでしか雇ってもらえなかった。この状況を是正するために、ケベック州政府は1977年に「フランス語憲章」という言語法を制定して、ケベック社会の隅々をフランス語化しました。

フランス語憲章の適用範囲は大きく分けて3つあります。まず、ケベック州の州レベルの行政、司法、立法、つまり公的部門です。これだけでなく、私的部門も適用範囲です。ビジネス、これは大手企業のみならず、個人の商業活動もフランス語で行われなければならない、と決められました。例えばケベックに存在する大企業は業務言語をフランス語にすることを義務付けられました。多くの企業の業務言語は英語だったため、フランス語局というケベック州政府の言語機関の指揮のもとで「フランス語化プログラム」が課せられ、フランス語が企業内の業務言語になるまで2年ぐらいかけて徹底的にフランス語化が行われました。フランス語ができない社員に対するフランス語教育、企業内の文書のフランス語翻訳などが義務化されました。

また、サイン表示言語のフランス語化も徹底して行われました。フランス語憲章の制定により、当初、企業や店の看板は全部フランス語にしなければなりません。その後、フランス語憲章は修正され、現在ではフランス語と英語、あるいは他の言語、の両方看板を出すことが許可されましたが、フランス語の方が他の言語より、文字が大きく表記されることが義務付けられています。

また、教育の分野にもフランス語憲章は適用されています。それまで移民の子供たちの大半は英語系の学校に通っていました。ケベック州の多数派はフランス語系住民、つまり

フランコフォンですが、移民にとって重要なのはフランス語より英語でした。フランス語憲章の制定により、移民の子供たちはフランス語系の学校に通うことが義務づけられました。そのため、現在ではケベック社会は、本当にフランス語を共通語とする社会になっています。フランス語憲章が制定された1977年までは、格式のあるモントリオールのレストランや百貨店などでは、そこで働く英語系の人たちが英語で接待し、フランス語を使いませんでした。フランス語系住民にとってそういう屈辱的なことが昔ありましたが、今は逆現象が起こっています。

このフランス語憲章によって、ケベック州の多数派であるフランス語系住民の最大の不満、つまり、英語の社会的・経済的優位性が崩れ、ケベック社会がフランス語優位の社会になったということにフランス語系住民たちは満足するようになりました。そのため、彼らは独立しなくてもいい、と考えるようになり、現在では独立機運は下がっています。また、今の若い世代のケベック州民は、英語が優位言語だったころのケベック社会を知らず、分離独立を問う州民投票が行われたのが遠い過去のように感じているようです。フランス語憲章によってフランス語が守られている現在、彼らは英語を使うことにも前向きになっています。